

小林さんちのアイズ様

タッパ・タッパ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『小林さんちのメイドラゴン』世界にアインズ様が召喚され、小林さんの家に居候するという話です。

開始時点では、オーバードは11巻本編終了時、メイドラゴンは3巻あたりのまだイルルが小林家に加わっていない状態です。

思い付きで書くつもりなので、メイドラゴンの本編における時系列を少し前後するかもしれません。

他のクール教信者さまの作品に登場するキャラも少し出てきます。

2017/8/2 原作名を「オーバード」から「小林さんちのメイドラゴン」に変更しました。

目次

第1話	プロローグ	1
第2話	お出かけしませんか？	15
第3話	失礼ですが、ご職業は？	35
第4話	お役に立ててますか？	52
第5話	小林さんちのオーバードラゴン	77
第6話	飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (前編)	98
第7話	飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (中編)	107
第8話	飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (後編)	125
第9話	クリスマス前のクリスマスネタ	149
第10話	足し算の出来るゴリラは夕食の後に缶ビールを飲むか？	171

第1話 プロローグ

「ただいまー」

そう言いながら玄関に入ってきた人物は、後ろ手に扉を閉めた。

一見、線の細い男性かと思紛うような姿だが、セミロングの髪を後頭部でまとめているその人物は立派な女性である。

今、そんな彼女は眼鏡の奥にある瞳、そしてその目の周りに隠せぬほどの疲労の色が見えていた。

そして玄関で靴を脱ぐ彼女の許へ、廊下の向こうから駆け寄ってきた人物がいる。

それはメイドであった。

ここは中世やファンタジー世界ではなく現代。

そして、日本におけるごく普通のマンション、その一室である。なぜ、こんなところに金髪ツインテールのメイドがいるのか？

誰もが初見において、戸惑いを覚えてしまう事は間違いない。

しかも、よくよく見ればその瞳は赤みがかった金色であり、その光彩は爬虫類のごとく縦に伸びているのだ。

そして、最も特徴的なのはその頭部。

いかにもメイドという白いホワイトブリムのそのすぐ後ろから、二股に枝分かれした角が左右一対、によきりと生えていた。

そんな彼女はその顔に極上の笑みを浮かべ、帰って来た家主を出迎えた。

「おかえりなさいませ、小林さん」

彼女、トールは竜ドラゴンである。

かつてはここではない異世界において、破壊と支配を望む混沌勢の一員として、その恐るべき力を振るっていたが、数奇な運命の果て、今こうして小林の下でメイドとして過ごしている。

そんな彼女に「ただいま」と挨拶すると、手にしていたカバンをトールに預け、後ろをついてくる彼女と共に小林はリビングへと向かう。すると、トテトテという軽い足音と共に、小林の身体にぶつかってきたものがある。

「おかえり、コバヤシー」

その自分の腰ほどしかない少女の頭を、小林は優しく撫でてやる。

「ただいま、カンナちゃん」

この少女カンナもまた、その正体は竜ドラゴンであり、トール同様、小林の家で暮らしていた。

そして、共に暮らしているといえば……。

「おかえり、小林」

リビングのソファアに腰かけていたもう一人の居候が声をかける。

漆黒のアカデミック・ガウンに身を包み、その雪花石膏アラバスターのように白い骸骨の指には、たつた一つでどれほどの価値があるのかもわからぬほどの大ぶりの宝石が埋め込まれた指輪をいくつも嵌めている。

そして頭部のしゃれこうべ。その眼窩の奥には地獄の熾火のような紅い光が爛々らんらんと灯っていた。

そんな現代の人間であれば、恐れてしかるべき姿である彼に向かって、小林は何の気負いもなく声をかけた。

「ただいま、アインズさん」



彼、アインズ・ウール・ゴウンはこの世界の存在ではない。

かつてDMMORPGであるユグドラシルをプレイしていた鈴木悟——ゲームでのキャラクター名モモンガは、ゲームの終了を彼らのギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の拠点であるナザリック地下

大墳墓で迎えようとしていた。

しかし、ゲーム終了と共に強制的にログアウトされると思っていたところ、いったいどういう訳だか、異世界へと転移してしまった。それもギルド拠点であったナザリック地下大墳墓ごとである。さらに、かつて友人たちと共に作ったNPCたちが、まるで生きているかの如くに動き、話したのだ。

その後、彼はギルド名であったアインズ・ウール・ゴウンに名を変え、転移後の世界でかつての友人たちと共に作り上げたナザリック、そしてNPC達を守るために活動した。

そうして、ついにその地において、アインズ・ウール・ゴウン魔導国という国を創るに至ったのである。

そんな彼が、何故こうして現代日本にいるのかというところ……。



「ぶっはー」

声をあげて缶ビールから口を離し、大きく息を継ぐ小林。

開け放たれている窓の向こうからは、通りを行き交う車のエンジン音が遠く聞こえる。

小林はそれを聞くとはなしに聞きながら、座っていた座布団に後ろ手をつき、リラックスした様子で再度ビールに口をつける。

彼女の職場は忙しいのが常であるのだが、今日はクライアント先の都合によって予定されていた打ち合わせが急ぎよキャンセルになり、早めに仕事はけたのだ。

そして自宅に帰ってきたのだが、ちょうどトールは近所の商店街へ買い出しに出かけており、カンナもまたクラスメイトである才川の家へ寄ってきているらしく、まだ学校から帰ってきていなかった。

そのため、久しぶりに自宅で一人になった小林は、まだ日もある時

間ながら、こうして一人ビールの味を満喫しているのであった。

そうして、まったりとした空気の中、早くも二本目のビールに取り掛かりつつ、何か面白そうな番組はないかなとテレビの番組表が載っている新聞を探したとき、ふとテーブルの上、そこに置かれた今日の新聞の下に見慣れぬ冊子があるのに気がついた。

なんだろうと思ってみると、そこにはこう書かれていた。

『漫画で分かる召喚魔法』

奥付を確認してみると、案の定、トールが来てから知り合いとなった竜^{ドラゴン}、フアフニールが書いた同人誌であった。

ごくりと緊張に喉を鳴らしながら、中身を確認してみる小林。

実は以前もフアフニールは『呪いアンソロ』なる、実際に呪いにかける方法を記述したものを同人誌として出したことがあった。

その内容は、まさしく相手に呪いをかけ、病や怪我、果てには死に至るまで対象者を様々な状態に陥らせる恐るべき呪法の数々。

それがろくに魔力も知識もない一般人でさえも使えるように、実に平易にして効率的な方法が記載されていたのだ。

だが、幸いといつてはなんだが、その本はほとんど売れはしなかった。

もし、そこに記載されている内容が実践されでもしたら、それこそ下手をすると世界情勢が変わるほどのとんでもない事態が引き起こされかねなかったのだが、ただのオカルトマニアの趣味本としか思われなかったため、ろくに流通もせず、真面目にとる者もいなかったため、結果的にそれが悪用されることもなかった。

おそらくこの本は、前回の失敗に懲りたフアフニールがただ文章だけではなく、漫画形式で分かりやすいHOW TO本として作成したものなのだろう。

——前回の呪い本も本当の事が書かれてたみたいだし、この本に書かれている召喚魔法とかも、もし誰かが実践でもしたら、本当に何が召喚されることになるんじゃない？……？

そんな疑問と共にページをめくってみた小林。

だが、そこに書かれていた絵を見た瞬間、その顔が引きつった。漫画で分かると銘うったものであるため、たしかにその内容は漫画仕立てで、誰でも簡単に唱え方が理解できるような内容となっていた。

問題はその絵柄である。

それがいわゆる萌え絵であったならば、手にとる者もいるだろう。

もしくは怪奇漫画風であったり、子供向け学習漫画風であったのならば、まだいい。

だが、その絵柄は漫☆画太郎風であった。

なぜ、よりにもよって漫☆画太郎風なのだろうか？

見たものが思わず中身が気になるようなインパクト重視としても、いくらなんでも限度がある。

小林がぺらぺらとページをめくると、いかにも御大らしいババアキャラが懇切丁寧に召喚魔法の使い方を解説するという、正気とは思えないような展開となっていた。

それを読んだ彼女の肩に徒労感がどつと押し寄せた。

身構えていた分、反動も大きい。

これならば、仮に買ってしまった人がいたとしても、本気にして実践してみるという事はあるまい。

……いや、そもそも、これは実践出来るものなのだろうか？

たしか以前の呪いに関する本は、実際に普通の人間でも使えるような内容だったと聞いた。

だが、これもそうだとは限らない。

普通の人間が使用しようとしても、魔力とやらがないため使えないとかもあるかもしれない。

そこで、「まあ、自分には関係ないか」と考えるのを止めてしまえばよかった。

前日もフアフニールの本は売れなかったわけだし、きつと今回のコレも買う者はいないだろう。

余計な厄介ごとのタネに、トールやカンナがいない状態で一般人に過ぎない彼女が積極的に関わることもあるまい。

そんな考えでよかったのだが、不幸な事にその時、小林はとあるバッドステータス状態にあったのだ。

すなわち『酩酊』である。

疲れた体。空腹時のアルコール。一緒に話でもする存在、トールらの不在といった諸条件が重なり、その頭は回転が鈍り、かつ危険なものへの警戒心も火に近づけたワタアメの如くにとろけてしまっていたのである。

ビール片手にテーブル上に新聞紙や広告紙を並べると、小林はその本を見ながら、水性マジックで召喚の際に使用する魔法陣とやらをぐりぐりと書いた。マジックのインクがテーブル板の方にまで裏うつりしてしまっており結構、というかかなりひどい事になっているのだが、そのような些細な事など酔っ払いの前には問題ではない。

そうして、一つ大きなゲップと共に、その本に書かれていた呪文とやらを唱えようとした。

だが、そこでさらなる偶然が重なった。

「おっじやましまーす」

陽気な声と共に、ノックもせず玄関を開けはなって入ってきたの

は長身の女性。

長い髪は緩やかなウェーブがかかっており、その髪の間から、トールものとも似ているが、枝分かれはしていない角がよつきりと伸びている。

だが、角が生えているだの生えていないだのなどという事は、どうでもいい。

そんな些末な差異より彼女の特徴を大きく現すもの。

それはその胸である。

彼女が一步足を進めるたびに、まるで巨大な水風船のごとくに揺れるその巨乳。

それはもはや双丘などという表現を超え、胸に寄生したドラクエ風スライムとでもいふべき物体であった。

彼女の名はルコア。

トールらと同じく、この世界にやって来た竜^{ドラゴン}である。

だが、普段から飄々とした態度である彼女であったが、今日は明らかにいつもと違う態度であった。

目は相変わらず開いているのかいないのか分からないようであるが、その頬は赤く染まつており、口元はだらしなく緩んでいる。ふらふらと左右に揺れる身体。そして、更には、その小脇に赤いひょうたんの酒瓶を抱えていた。

一目で分かる。

彼女もまた酔っ払いなのである。

ルコアはひよいひよいと飛ぶようなしぐさで小林の許へと歩み寄ると、彼女の頭をその豊満な胸で抱え込んだ。

「うっへへー。おはこんばんちはー」

いつの間でもいいという万能の挨拶を口にする彼女の呼気からは、すでにとんでもないレベルのアルコール臭がする。

常人であれば、思わず顔をしかめたであろう。

しかし、対する小林もまた彼女に負けず劣らず酔っ払いなのである。

「あー、ルコアさん。おっはー」

すでに時刻は夕暮れ時なのであるが、朝の挨拶、しかもかなりの時代遅れネタを小林は照れすらせずに口にした。

ふらつく足取りで勝手知ったる台所からグラスを二つ手にとり、小林のいるテーブル上へ置くと、ルコアは先ほどから小脇に抱えている赤いひょうたんの口を開け、そこから透明な液体を注ぐ。

二人はそれを手にとると、「かんぱーい！」とグラスが割れそうなほどにグラスを打ち合わせ、一息に飲み干した。

「ぶっはーっ！」と大きく息を吐く二人。

「んー、なにこれ？ すっごく美味しいお酒だね」

「えへへー、そうでしょー。ちよつと向こうの世界で宴会があつてー。それでー、えーと、誰だったかなー？ ああ、そうそう、テスカトリポカが前のお詫びつて言つて、持ってきてくれたお酒なんだよー」
言いつつ、くいくいと杯を重ねる二人。

そうしていると、そこでルコアはようやく机の上にあるもの、マジックで魔法陣のかかれた新聞紙と一冊の薄い本に気がついた。

「んー？ 小林さん、何これ？ 召喚魔法？ なにか、召喚するのー？」

「うんー。本当にいいー、私でも出来るのかあー、試しにやってみようと思つてえー」

竜の酒を飲み、一気に酔いが回つたらしく、変に間延びした口調で話す小林。

それに対し、ルコアは、「おー、それならちようどよかった」と言つて、その胸の谷間から握りこぶし大の球を取り出した。

「えへへー、これはねえ、えーと、誰だったかからもらった竜ドラゴンの間に伝わる秘宝なんだよー。使えば、きつとなんだかよく分からないことになるよー」

「あはははは。なに、それ？ よく分からない事になるって、あははははは！」

「あはははははー！」

何が面白いのか、しらふの人間にはいまいちよく分からないが、腹を抱えて笑う酔っ払いたち。

ゲラゲラと笑いつつ、ルコアはテーブル上に敷かれた新聞紙にマジックで書かれた魔方陣の上に、その竜の秘宝とやらをポンと投げ置く。

「イエー！ じゃあ、レッツ召喚！」

「レッツ召喚！」

本に書いてあるまま、抑揚もつけずに棒読みで読み上げられる魔法の言葉。

ときおり、言葉の合間合間にしゃっくりが混じる。

普通の魔術師が一つの魔法を行使する場合には、呪文の言葉を間違わず暗唱できるようにするまで何度も練習し、様々な触媒を取りそろえ、何日もかけて少しずつ魔術を使って下準備をして、使用する魔術に適した星の並びとなるのを待ち、ようやく儀式を行うのである。

それに対して、小林がやったものは何の準備もせず、その辺にあった適当なものを使用して、特に星の運行なんぞも気にすることは無く、さらにもう酔っぱらって呂律すらも若干怪しい喋り方で呪文を唱えたのだ。

普通であれば魔法が発動するはずもない。

そんなもので簡単に魔法が使えたのなら、世の中苦勞はしない。世界は魔法で溢れ、科学技術など不要のものとなったであろう。

だが、どうだろう？

テーブル上の新聞紙に書かれた魔方陣。

それがなんと、怪しげな光を放ったのだ。

もう一度言うが、今、小林がやったようなやり方で、普通は魔法など発動するはずもない。

普通は。

しかし、この場においては、いわゆるところの普通とは異なる要因があつたのだ。

一つはフアフニールが書いた召喚魔法の本である。

この世界においては、すでに魔法は衰退しており、ごく一部の者が技術を途絶えさせぬよう継承している程度である。

だが、フアフニールは魔法が普通にある世界の、それもはるか長き時を生きた竜^{ドラゴン}である。

その魔術知識は、人間たちの長年にわたる研究と実践によって調べ、蓄えられた英知をはるかに上回る。

いふなれば、人間の魔術は木片を拾い集め、板に溝を作り、そこに紐をつけた木の棒の先を当て何度も擦ることにより、摩擦熱によって火種を作り、それを少しずつ燃えやすい枯れ葉などに移して、火をつけるようなものとするものであり、対して竜^{ドラゴン}の魔法は1000円ライターで火をつけるようなものだ。

そのため、実にいい加減且つテキトー極まりない儀式のやり方であつたのだが、こうして実際に魔術が発動したのだ。

次にトールの存在である。

この現代世界は魔力の源であるマナが薄い。

そのため、この世界で魔法を使う事は非常に困難を極める。

先ほどの火の例えで言うならば、乾いた木に火をつけるのではなく、しけた木に火をつけようとするようなものであり、魔法を発動させるには、最初からかなり高度かつ熟練の技術が必要となる。

だが、この部屋に限ってはそんなことがなかった。

トールは自分で魔力の源であるマナを生成することが出来る。

そして、そんなトールが普段から生活しているこの部屋は、通常の場所よりマナの濃度が非常に濃くなっていたのだ。

さらに言うならば、もう一つ。

それはルコアが持ってきた竜の秘宝である。

遙か悠久の時を生き、この世のありとあらゆる種族を凌駕する種族、竜。

その竜が、己が財宝として集めた品はどれも人知を超えた桁外れの能力を有する。

そんな竜族に伝わる秘宝が、素人の召喚魔法に惜しげもなく使われたのだ。

そして、さらに竜と一口に言っても、その由来も生態も、そして使用する魔法の体系すらも異なることも多い。今回、ルコアが持ってきたその宝玉は偶然にも、たつた今小林が行おうとしている召喚の儀式と、性質がぴたりと一致したのだ。

竜の魔法と竜の存在と竜の秘宝。

三つの奇跡がそこにあり、そしてそれが酔っ払いの手によって発動される。

瞬間、突風が吹き荒れた。

部屋中をつむじ風が吹き荒れ、雑誌や小物が辺りを飛び交う。

「うわっぶ」

そのあまりの風圧に、小林は思わず目を閉じる。

その時、飛ばされてきた小物が彼女の頭を直撃した。

額に走った激痛と荒れ狂う暴風に、しばし耐えていると、やがて風が収まってきたのを感じる。

そして、(せっかくツールが掃除してくれたところなのに、わるいことしたなあ……)と少し酔いが醒めた頭で考えつつ目を開けると――

「……………」

目の前のテーブルに敷かれた新聞紙の上、そこに豪華な漆黒のロブに身を包んだ骸骨が佇んでいた。

そいつはきよろきよろと辺りを見回す。

小林は訳が分からないのだが、そいつも訳が分からないようだ。やがて二人は視線を合わせる。

しばし、そうして見つめ合った後――。

「……………あ、どうも、小林です」

「……………あーっと……………アインズ……………です」

とりあえず、社会人の二人は気の抜けた挨拶を交わした。



そして、その後アインズは小林の家に留まることになった。

一応、彼を召喚したのは小林であり、彼女が責任を持って、アインズの事を元いた世界へと送り返さなくてはならない。

だが、そこに問題があった。

アインズをどの世界から呼び寄せたのか、分からないのである。

小林はファフニールの書いた本の通りに魔法陣を描いたつもりであったが、あいにくと彼女は酔っ払いであった。

ほんの少しの間違いがあるだけで、効果が変わってしまうのが魔法である。

発動したこと自体が奇跡であったのだが、その際、部屋の中に吹き荒れた突風によって、新聞紙という破れやすい紙に書いた魔方陣がちぎれ飛んでしまっており、召喚の際に使用された正確な魔法陣が分からなくなってしまうのである。

しかも、後から聞いたところ、新聞の上で酒盛りをしていたため、こ

ぼれた酒やグラスの結露によって新聞紙が濡れてしまい、それによって書いた文字などがにじんだところをルコアが別の紙を張り合わせて適当に書き直すなどという事までしていたのだという。

そして、その時のルコアもまた、小林に負けず劣らずの酔っ払いであった。

当然ながら彼女もまた、自分が描いた紋様など、正確には覚えてはいなかった。

さらに言うならば、召喚の際に使用した竜^{ドラゴン}の秘宝。

あれは使用できるのは一回きりのアイテムだったらしく、アインズの召喚が終わった後、辺りを探してみたのだが、もはや影も形も無くなってしまっていた。

おまけに、それを持ってきたのはルコアであるのだが、しこたま呪いの酒を飲み、酔っぱらっていた彼女はそれが何処の誰からもらった何なのか、さっぱり憶えていなかったのである。

そのため、同じものをどこから調達してきて用立てればいいのかすら、まったく分からないという有様であった。

帰すに帰せず、現代日本において行くあてもないアインズ。

とりあえず、酔いを覚まさせたルコアに、アインズのいた世界について調べる事を約束させたものの、世界というものは幾多も、それぞれ数限りなくあるそうで、その中からアインズのいた世界を探し当てるというのは一朝一夕^{いちちよういつせき}に調べがつくものではないのだそう。

問題となるのは、それが分かるまでの身の振り方である。

そして小林はアインズの事を自宅マンションに置くことに決めた。責任感があり、また甲斐性もある彼女である。

自分のせいでこの世界に来たアインズの面倒を見ることにしたのである。

アインズとしても、それは願ったりかなったりであった。

とにかく行くところなどないし、あの世界に帰還できる手掛かりと

なるのは、自分をこの地に召喚した小林であり、彼女のそばをあまり離れたくはなかったのだ。



ひたすらまっすぐ続いていると見える大道も、実際は大蛇のごとく曲がりくねって進んでいることもある。またそこからいくつもの脇道がのび、その先には見た事もない景色が広がっていたり、出会ったこともない人が暮らしていたり、はたまた完全な行き止まりだったり、あるいはぐるっと回って本道へ戻ってきたりもする。

この話は、そうして小林家に新たな居候として納まったアインズが、ほんのしばしの間、彼女らと共に過ごし、様々な体験を経た果てに元の世界に帰りつくまでの、人生のわずかな脇道の物語。

第2話 お出かけしませんか？

「いただきます」

小林の声に続いて、「いただきます！」と竜^{ドラゴン}二人の声が唱和する。よく晴れた日曜の朝。今日の朝ご飯はトールが作った卵焼きに漬物、味噌汁、そしてホカホカと湯気を立てるご飯というラインナップである。

実はもう一品あったのであるが、小林家の食事のレギュレーション、『異世界の食材を使ってはいけない』に抵触したため、廃棄処分とあいなつてしまった。

「小林さん、あーんしてください」

「いや、1人で食べられるから……」

「コバヤシ、お醤油取って」

「はいカンナちゃん」

「小林さん、小林さん！ 私にも胡椒を取ってください！」

「いや、トールの目の前にあるでしょ」

にぎやかな食卓。

そんな和気あいあいとしたテーブルから、ふと小林が目をそらすと、そこには独り離れた所でソファアに腰かけ、テレビを見ている骸骨——アイنزの姿があった。

ポリポリときゆうりの浅漬けを齧る彼女に、トールが話しかける。「小林さん、今日はせっかくの休日ですから、私と子作りでもしませんか？」

「いや、私もトールも女同士だつての」

ため息を一つつき、味噌汁をすする小林。

味噌汁の具は、お豆腐とほうれん草。口の中で柔らかく砕けていく豆腐と、よく火の通ったほうれん草の柔らかいながらも繊維質の歯ごたえがちょうどいい。

ずずーっと音を立てて飲み干し、大きく息を吐いた彼女は言った。

「そうだね。今日は皆でお出かけでもしない？」



「いいお天気ですねー」

「うん」

数刻の後、小林らの姿は自宅から少し離れた郊外にある、ちよつとした大きさの池のほりにあった。

池の周囲を回る道々には、桜祭りと言われたぼんぼりを模した照明が多数、設置されていた。

だが、一応、桜祭りとは銘うっているものの、あいにく寒気の影響により、桜はまだかすかに咲いているものもあるという程度でしかなく、そのほとんどは未だつぼみの中に頑強に閉じこもったままである。

しかし、祭りに出店する屋台の日程というものはそうそう簡単には動かせないらしい。花はまだまばらである中、池をぐるりと囲む通路のうち、南側の一区画にだけソースの香りが立ち込める屋台の列がずらつと並んでおり、そこは花より屋台目当ての人たちでそれなりに賑にぎわっていた。

そんな池のほりにある広場の一角に立つ4人。

小林にトール、カンナ、そして幻覚魔法で正体を隠したアインズである。

「ねえ、トール様。アレは何？」

カンナは始めてみる屋台の前に、トールのメイド服の袖を引っ張り、興味深げに尋ねる。

「ああ、あれはこの世界で行われている拷問の一種で……」

あまり詳しくないにもかかわらず、いい加減な知識で答えるトール

ル。

興奮して鼻息を荒くしているカンナに引つ張られ、彼女が向こうへ歩いていくと、その場には小林と成人男性の姿を偽装しているアイズが残された。

アイズはコリコリとその指で顎先を搔く。指先が顔部分の幻覚を突き抜け、ずぶりと沈み込んで見える。

「ふむ。一人でいた私に気を使ってくれたという事かな？」

「うん。アイズさんは私がこっちに呼び出しちゃったわけだからね」

「罪悪感かね？」

「まあ、それも確かにあるよ」

小林は素直に認めた。

「ただ……私たちの食卓に加わることもなく、アイズさんはただテレビを見ていたからね」

「気遣いは無用だ。私はアンデッドであるから、飲食は不要だからな」「ううん、そういう事じゃないよ」

小林はあちこちを見て回り、元気に騒いでいるツールとカンナを眺めながら言う。

「私たちは同じ家に暮らしてるのに、話をしている輪に加われない人がいるのは寂しいなって思ったからね」

視線の先ではツールが紐を引いて景品を引き上げるくじで能力を使ったらしく、引けるはずの無い大当たりを引き当て、店のおっさんとトラブルになっていた。

『袖すり合うも多生の縁』っていう言葉もあるしね。せつかく一緒の場所において、一緒の時間を過ごしているのに、距離をとって隔絶したままっていうわけにもいかないよ」

言うのと、今にも口から炎のブレスを噴き出しそうになっているツールを止めに、小林は運動不足の身体にむち打ち、駆けていった。

その場に一人残されたアイズ。

彼はしばし、そのまま佇たたずんでいた。

頭の中を駆け巡るのは、先ほど小林が語った言葉。

『せつかく一緒の場所にいて、一緒の時間を過ごしているのに、距離をとって隔絶したままっていうわけにもいかないよ』

その言葉を思い返し——アインズはがっくりと肩を落とした。

——そうだよなあ。偶然とはいえ、せつかく一緒に暮らしているのに、壁作ってたんじゃ意味ないよなあ。無駄に神経すり減らすだけだし。

いや、前はナザリックの皆の手前、他の人間とかにフランクに接することとか出来なかったわけだけだよ。『人間なんてゴミです』なんて、平気で言ったりするくらいだったし。

でも、今は、ナザリックと離れているわけだから、別に支配者口調じゃなくて普通の口調で話してもよかったわけだよなあ。

『うむ。そうか』とかじゃなくて、『あれ？　どうかしたんですか？』とかだよ。

一人称も『私』じゃなくて、『俺』で。

最初、状況が分からなかったってのもあるけど、失敗したなあ。いや、普通分らないじゃん？　いきなり、また別の所に転移しました。でも、今度はナザリックなしです、とかさ。

せつかく、ずっと続けていた支配者ロールを止める良い機会だったのになあ。

はあ、失敗したなあ。

そうして、アインズはもう一度大きくため息をついた。

「ナザリック……大丈夫かなあ」

ポツリとつぶやいた。

アインズの心のうちを占めるのは、自分という指導者不在となってしまっているナザリックのことである。

「何とか帰ればいいんだけどな」

元の世界、ナザリックが転移したあの世界、今やエ・ランテルを首

都とした国家としての道を歩み始めたアインズ・ウール・ゴウン魔導国があるあの世界に戻る事ができたのならば……。

だが帰ろうにも、アインズはめちやくちやな魔法陣によって呼び出されてしまったために、その世界がある座標が正確に分からず、そこへの異世界ゲートを開くことが出来ないらしい。

実はアインズもまた、自力で何とかしようとはしてみたのである。

自身が使える転移系を始めとした様々な魔法をあれこれ使用してみたのだが、さすがに異なる世界の間を移動することまでは出来なかった。

ならばと、思い切つて^{ウイッシュ・アポン・アスター}へ星に願いを^{メッセージ}までをも使つてみたのだが、その超位魔法を持つてしても、ナザリックへの帰還は叶わなかった。

しかし、その効果により短時間ながら、かろうじて^{メッセージ}の魔法をアルベドにつなげることは成功した。

予想はしていたが、向こうは突然、アインズがいなくなったことにより、混乱の渦に叩きこまれてしまったていらしい。

そんな時、不意に届いたアインズからの^{メッセージ}〈伝言〉。

狂喜乱舞するアルベドを落ち着かせ、自分が異世界へと来てしまった事、帰ろうにも帰れない事、何とか帰還の方法を探すから、それまでナザリック並びに魔導国の運営を頼むという事を伝えたところで効果時間が切れてしまった。

とりあえずはアルベドらがいればナザリックや魔導国は安心だろう。

自分がいなくても——いや、自分がいなくても、すべてをアルベドとデミウルゴスに任せてしまっていた方が上手く事が進むかもしれない。

「そうだな。案外、守護者たちも私がいけない間、鬼のいぬ間に洗濯とばかりにのんびりしているかもしれないな」



「では、アインズ様がいらっしやらない間のナザリツク並びに魔導国の方針としてはそれでいいわね?」

アルベドの言葉に皆、首を縦に振る。

そうしてアウラはようやく会議が終わったことに、肩の荷が下りたとばかり大きく息を吐いた。

「ふう、疲れた。急にアインズ様、どこかに行つちやうんだもんな」

「私の所に来た〈伝言〉^{メッセージ}によると、向こうから召喚魔法で呼び寄せられたらしいけどね。まあ、アインズ様の最終的な決裁は飛ばしてしまいう事になるけれども、とりあえずは現状維持のまま、地固めをしていけばいいでしょう」

「もとより、細かな調整や雑事は我々でこなしていたからね。しばしの間、御不在にされていても特に問題にはならないだろう」

続くアルベドとデミウルゴスの言葉に異論は出ない。

そしてアウラは椅子に座ったまま、グーツと伸びをする。

「でも、これでしばらくは気楽にできるね」

「う、うん。アインズ様がいると……その……緊張しちゃうし」

「そうだね。今、割り振られた各々の仕事に不備が出ない程度には、という注釈がつくが、その範囲内では多少、羽を伸ばしてもいいかもしれないね」

「本当に、アインズ様がいると色々と気を使わなくてはならないでありんすからね」

「そうそう。一応、至高の御方の一人だから、とにかく立ててあげなきゃいけないし」

「で、でも、それが僕らの仕事だから」

「ウム。ソレガ我ラノ役目トハ言エ、イササカ重荷ニ感ジルトキハアルナ」

「ああ、まったくだね。アインズ様のおっしやつたお言葉を無理やり解釈して、そこに深い真意があるのだと何とか取り繕うのも、さす

「なに毎回は大変だ」

「なに言ってるのよ、あなたたち」

「ぼやく面々を前に、アルベドはその艶めかしさすら感じるほどの黒髪を苛立たし気にかき上げた。」

「あなたたちはまだましでしょう。せいぜいがアインズ様を前にしたときに、おべっかを使う程度で済むんだから。私なんて、『モモンガを愛している』なんておかしな設定に書き替えられているのよ」

アルベドの口から発せられた言葉に、シャルティアは目を丸くする。

「おや、アルベド。おんし、自分の設定が書き替えられたのに気がついていてあたりんすか？」

「当然よ。私の設定は私の創造主たるタブラ・スマラグデイナ様が手ずから書き込んでくださった、至高にして究極の設定。それをまあ、最後に残った至高の御方でギルドマスターだからといって、勝手に書き換えたのよ。しかも、よりにもよって自分を愛している、なんて。本当に恥ずかしくないのかしら？」

「うわー、そう考えると正直キモイね」

「う、うん。なんだか、鳥肌が立っちゃうね」

「ナンデモ、アインズ様ハ女性経験ガナイラシイカラナ。アンデッドトハイエ、男トシテ欠陥トイウコトデハナイカ」

「いや、そんな御方とは言え、一応、至高の御方でありんす。私たちの存在意義はあくまで至高の御方にお仕えすること。あまりきつく言うのもどうかと思うんでありんすよ」

「じゃあ、シャルティア。もし、あなたの設定が『モモンガを愛している』なんていうのに書き換えられていたらどう思うかしら」

アルベドにそう問われたシャルティアは、思わず「ひいっ」と声を漏らした。

「そ、それだけは勘弁してほしいでありんす！」

「でしょう？ 友達もいない、彼女もいない、誇れるものは何もない、そんな男を愛せとかどうしろってのよ」

吐き捨てるようなアルベドの言葉に、皆が「お気の毒様」と慰めの

ような言葉をかける中、デミウルゴスはその尖った顎に手を当て考え込んでいた。

「そうだね。ふむ。ならば、ならばだよ。アインズ様とつがいとなる存在を、アルベドの代わりに用意してあげてはどうかかな？」

「私の代わりに？」

思わず、アルベドが声を発した。

「デミウルゴス、あなたの提案だけど……残念だけどどう考えても上手くいくとは思えないわ」

「そうでありんす。アインズ様の恋人など、ナザリックの他の誰でもお断りでありんしょう」

「なに、いるじゃないか。この地に転移してから出会った、アインズ様をしたっている女性……雌が」

そのわざわざ使った『雌』という言葉、それを受けて皆の脳裏にピンとくるものがあった。

「あ、もしかしてハムスケ？」

「そうだとも。ハムスケにとってアインズ様は名付け親。そして彼女としてもつがいを欲しがっている。ならいつそのこと、あのハムスケをアインズ様にあてがってはどうかかな？ アインズ様にはお似合いだとは思わないかい？」

デミウルゴスの提案に、場がどつと沸いた。

アウラやシャルティアは言うに及ばず、コキユートスでさえ堪えきれぬとばかりに肩を震わせていた。

「あはは。それお似合い」

「ええ、アインズ様も、それとハムスケも本懐を遂げられるでありんしょうからね」

「お、お姉ちゃん、シャルティアさん、笑つちや可哀想だよ……ぷつ……くすくす」

「イクラ、同種ニモテヌカラトイツテ、ミジメダナ」

「この世界固有の存在であるハムスケとアインズ様。その間に生まれるのはたしてどのような子なのか気になるね」

「ぶぶぶぶ……、女にもてないあまりに辿りついたのが、あの巨大なハムスター。アインズ様が、あれに向かって必死に腰を振ってるかと思うと……」

アルベドの言葉に再び一同の間で、破裂したようにいちどきに笑い声が響いた。



「のわーっ！」

アインズは頭を抱え、身悶えた。

実際にナザリックの守護者たちがそんな事を話している訳はない、そんなものは自分の邪推でしかないという事はアインズとて分かっている。

しかし、もしかしたら本当は、守護者を始めとしたナザリックの者達は自分に愛想をつかしているのではないか、実は自分の事を馬鹿にしているのではないかという、もはや被害妄想の域に達している想像に、アインズは怯えたキツネリスのように身を震わせた。

突然、奇声をあげてしゃがみ込み、身をのたくらせる成人男性の姿に、通りがかった人たちは気の毒な視線を向けつつも、黙って見て見ぬふりをしてくれていた。

そうして、ひとしきり殺虫剤をかけられたムカデのごとく身をくねらせた後、ようやくと精神沈静で落ち着きを取り戻したアインズ。

そんな彼の袖をひく者がいた。

「ねえ、アインズ」

顔をあげると、傍に立つのは共に小林家で生活している竜、ピンク色のゴスロリ風衣装を身に纏った幼女、カンナであった。

その青い瞳に見つめられ、アインズは咳払いをして立ち上がる。

「ウオツホン！ ……どうしたのかな、カンナ？」

ナザリックの支配者としてけっこう長いことやって来た経験もあ

り、取り繕うのはお手のものである。とりあえず、今更手遅れ感も多分にあるが、威厳ある態度で問いかけた。

カンナはそんなアインズの服を引つ張りつつ、「あれ」と向こうを指さす。

言われた方へ視線を向けると、そこらは屋台などが並び活気溢れるスペースから離れた所、そこらには特に出店もないただの広場が広がっており、道路を挟んで向こう側には、いくつかの商店が並んでいる。

カンナの指さした先、そこには一軒の和菓子屋があった。

「あれ、食べたい」

ふむ、と言われたアインズは襟もとに腕を突っ込む。

そうして取り出したのは、深緑色のがま口財布。

ぱかりと子気味のいい音を立てて開かれたその中には、数枚の紙片があった。

出かける際に何があるか分からないからということ、小林からお小遣いとして3,000円もらっていたのである。

そして、アインズはその手の中にある紙幣を取り出し——しばしじつと覗き込んだ。

「これは……どれくらい価値があるんだ……？」

アインズはもともと日本人であるとはいえ、彼が生きていた時代は今からおよそ100年後である。当然貨幣や物の価値も今とは大きく異なる。

その為、この1,000円札というものはどれほどの感覚で使っているものか、結構な大金なのか、それともせいぜいお菓子を数個買える程度なのか、それが分からなかったのだ。

そもそも、彼の感覚からすれば、通貨に原料が植物である『紙』を使うところからしてあり得ないのである。

ともかく、その売店の前まで行くと、丁寧に並べられたお菓子の前にそれぞれの値段が紙に書いておかれている。

よく分からないままに、とりあえず一番中央にあつたものを指さし、「それを一つ」と言つて、そこにいた妙齡（配慮）の女性に1、000円札を一枚渡すと、商品ケースに入つていたまんじゅうを一つビニールに入れて渡してくれた。それと、おつりとしてジャラジャラとした硬貨も。

それをカンナに渡してやると「おおー」と目を輝かせながら、その白い薄皮に包まれたお饅頭をぱくついた。

そうして、もぐもぐと口を動かしていたカンナの目が、再び一点で制止する。

その先に目を向けると今、彼らがいる広場、その中央には平和の象徴とかいう白ではなく灰色っぽい羽毛に包まれた鳩たちが警戒心のかけらもなくのんびりと、且つ堂々たる態度で地面を闊歩している。

ふむとアイズが辺りを見回すと、広場の片隅、池に浮かべるボート乗り場の脇に、屋台の出店にも似た、小さな小屋状の店舗があつた。よく目を凝らしてみると、その店では広場にたむろする鳩にやる餌を売っているらしい。

たつた今、お菓子をなんなく購入した件で、この時代のお金の使い方には自信を持ったアイズは、足取り軽くそちらへおもむくと、先ほどおつりとして渡された硬貨を使い、見事『鳩の餌』をゲットすることに成功した。

それを受け取り、鳩のいる広場中央へと戻つてくると、目を輝かせるカンナの脇で、アイズは鳩の餌が入った袋を開けようとした。

だが、アイズは魔法職とはいえ100レベルキャラ。力加減を間違えたらしく、袋が一気に破れ、中の餌がバラバラと辺りに飛び散つてしまった。

「おっと」とつぶやき、体に飛び散つた何か小さな実らしきものを、パンパンと払い落とす。

しかし、次の瞬間――。

「のうわっ」

思わず声をあげてしまったアインズ。

彼の身体に飛び散った飼料。それめがけて周辺の鳩が一斉に飛びかかったのだ。

その光景はさながら小動物の大量発生もののパニック映画のごとく。今のアインズはアンデッドの肉体に人間の幻覚をかぶせているとはいえ、まさに鳥葬といった様相である。

「やれやれ」

だがアインズはそんな状況に最初こそ驚いたものの、たいして動じることもなく、腕を振るって鳩たちを追い払おうとする。

およそ鳩たちの嘴くちばしについばまれたら、普通の人間であれば血がにじんでもおかしくはないのだが、幸いにしてアインズはアンデッドであり、柔らかい肌や肉などなく、いきなり固い骨なのである。

そのうえ、アインズはへ上位物理無効化Ⅲを持つているのだ。さすがに、この場にいる鳩の中にはレベル60を超える剛の者、いや剛の鳩などいなかったため、いくらつんつくされても、痛くも痒かゆくもなかった。いや、ちよつとだけ痒くはあったが、痛くはなかった。とにかく少しばかり煩わづらわしい程度でしかなかったのである。

そうして、群がる鳩の群れにいささか辟易へきえきしていると、バサバサと音を立てて羽ばたく灰色の羽毛の隙間から、自身のすぐ傍らに立つカンの姿が見えた。

彼女はひよいと手を伸ばすと、そこにいた一羽の鳩をそつと捕まえた。

揃えた両手の上にちよこんと鎮座する鳩に「おおー」と目を輝かせるカンナ。

その姿を見て、（まあ、この娘が喜んでるようだし、こんな状態になった甲斐があったかな）と微笑ほほえましい気持ちになったアインズであったが、次の瞬間、その幻覚でおおわれた表情が引き攣くっった。

カンナはそのぷくぷくと太った鳩に顔を近づけると——それを一口で食べてしまったのである。

ポキポキ、クチュクチュと音を立てて、咀嚼するカンナ。

驚愕に凍り付くアインズの脇でまた一羽、鳩を掴むと、同じように大きく口を開け、かじりついた。

「食べ放題」

アンデッドであるため、なんとか声をあげずに堪えられたが、もし『完全なる狂騒』状態であったのなら「きよえー！！」と叫び声をあげていたことは間違いない。

かつてのナザリツクでもエントマが似たような事をやっていたが、彼女の場合は普通の顔に見える部分は表情が変わることのない虫の仮面であり、人間であれば顎の下あたりにある本当の口で食べていた。そのため、不気味ではあっても、見えている顔はそのままだったので、まだ耐えられた。

だが、カンナはというと、自分の頭より一回り小さい程度の鳩を口に入れるのに、その顔の造形が歪むほど口を大きく空け、そこから見え隠れする牙によって、一息に骨を噛み砕いたのだ。赤みがかつたぷくぷくとしたほっぺを持つ可愛らしさを感じる幼女の顔が一瞬だが奇怪な形に崩れるその光景は、生理的な悍ましさすら感じさせるほどであった。

——いやいやいや、それは拙いだろ！

アインズは慌てた。

いかに現代日本の常識に疎いアインズとはいえ、さすがにここにいる鳩をそのまま食べてしまうのは拙いという事は分かる。

慌てて周囲を見回すアインズ。

幸いにして、こちらに視線を向けている者はいない。今の惨劇を見ている者はいないようだ。

取り繕う事も忘れ、アイテムボックスから布きれを取り出し、アイ
ンズはそれでカンナの手や口元についた血をぬぐってやる。

だが、あらかた布で拭きはしたものの、やはりよく見るとあちこち
に血の跡がまだ残っている。

——とにかく早くこの血を洗い流さねば……。

きよろきよろと辺りを見回すアインズの視線に飛び込んできたも
の、それは広場の端に立つ一軒の建物。公衆トイレであった。

あそこならば水があるはず、と思い至ったアインズは「トイレに行
くぞ」と言うなり、きよとんとしていているカンナを小脇に抱えると、そ
ちらへ駆けだした。

そうして広場を横切り、トイレに入ろうとした、その時——。

「ちよつと、あなた」

と、声がかけられた。

振り向くと、そこにはパーマ頭の中高年とおぼしき年齢の女性が
立っている。

「あなた、その子の何なの？」

「え？」

突然投げかけられた女性からの詰問に、思わず間の抜けた言葉を漏
らすアインズ。

力の抜けたアインズの手からカンナは地上へと降りる。

「お嬢ちゃん？ この男の人、あなたのお父さん？」

カンナはプルプルと首を横に振る。

「違う。アインズはお父さんじゃない」

「そう。この人は悪い人じゃない？ 何かされた？」

「ううん。アインズは悪い人じゃない。さっきおやつ買ってくれた」

「おやつ……。お嬢ちゃん、今この人にトイレに連れ込まれそうに
なってたけど、トイレ行きたかったの？」

「ううん。行きたくない。でも、アインズがトイレに行くって言って、連れてきた」

そのやり取りを傍で聞いていたアインズ。

そこでようやく自分が声をかけられた理由、今、自分がどんな疑いをかけられているのかを理解した。

今の現状を整理してみよう。

1. 成人男性（アインズ）と、そして一緒にいる女の子。
2. 二人は血縁関係にない。
3. 男は女の子にお菓子を買い与えるなどしていた。
4. そして男はその女の子を小脇に抱え、その子がトイレに行きたくないにもかかわらず、トイレに連れ込もうとしていた。

明らかに事案である。

即警察に通報されてもおかしくない案件である。

おばちゃんのアインズを見る目がさらにきつくなる。

これまでアインズは向こうの世界で殺気を込めた視線というものは幾度も受けており、そんなものにもひるまなかつたのだが、その視線には狼狽えてしまった。

——いかん。

このままでは通報されてしまう。

ナザリツクの支配者たる自分が幼女略取で警察のお世話になる。

醜聞などというレベルではない。

この世界で起きた事を向こうの世界にいるナザリツクの者たちが知りえるわけもないのだが、アインズの脳裏をよぎったのは先ほどの守護者たちの妄想。

幻視した彼ら——シャルティア、コキュートス、アウラ、マーレ、デミウルゴス、そしてアルベド。更にはナザリツクにいる僕たち^{しもべ}全てが

汚らしい害虫でも見るかのような目つきを、一斉にアインズへと向ける。

恐怖公まで。

——拙い。

ゴキブリにまで害虫を見るような視線を向けられたら、人として終わりである。

アインズはアンデッドであるので、すでに人としては終わっているのだが、それでも拙い。

アインズが自分の想像に身震いしているうちに、更に事態は悪化していく。

騒ぎを聞きつけ、同じ広場にいた人や広場に面した道を歩く通行人たちが、一体何があったのだとこちらに視線を向けていた。

魔法で何とかするにしても、1人2人ならともかく、この周辺にいる者達全てを何とかするのはさすがにアインズとはいえ、それは困難であると言わざるを得ない。近くにいる者達だけならいざしらず、遠方から視線を向けている者もおり、一体どれだけの人数がこちらを視認しているのかまでは把握できない。

それにこの時代には機械的な監視カメラなどもあちこちに設置されているはずだ。

例えば、時を止めてから遅延^{ディレイ}で精神魔法をかけるにしても、それが映像として記録されていたら、不意に大勢の人間の様子がおかしくなったことがはっきりと記録として残されてしまう。

それはいささか拙い。

アインズはこの場をどう切り抜けるべきか判断に迷った。

すると——。

「アインズさん！ カンナちゃん！」

声と共に、駆け足で近づいてくる二つの人影。

小林とトールであった。

「どうしたんですか？」

「あ、ええとだな……」

思わず何と言っているのか迷うアイズを差し置き、おばちゃんが口を挟んできた。

「あら、アンタ、トールちゃんじゃない」

「あ、どうも、こんにちは」

どうやら知り合いらしい様子に、小林が「知り合い？」と尋ねると、トールは「商店街の方です」と答えた。小林がこの前トールと一緒に商店街へ行った時の事を思い返すと、確かにあの時、服屋かどこかにいたおばさんであった。

「ちよつと、トールちゃん。この子の知り合い？」

問われたトールは「あ、はい」と答え、そばにいた小林が言葉を近づける。

「ええ、カンナちゃんはずうちの親戚の子です。今日は休みだったんで皆で遊びに来たんですよ。アイズさん、何かあったんですか？」

「あー、とだな……」

困ったようなアイズの視線の指し示す所、カンナの手や服の汚れ、不審げな様子のおばちゃん、そして公衆トイレを順に見て、小林は何があったのかだいたい事を悟った。

「ああ、なるほど。カンナちゃんがものを食べたときに汚してしまっただんで、そのトイレで洗おうとしたんですね」

周りの人に説明するかのように、ことさら大きな声で話す小林。それにアイズもあわてて首を縦に振った。

「う、うむ。カンナが食べたいと言ったんで食べさせたら、手や服を汚してしまつてな。それでどこか洗える場所は無いかと思つたのだ」

「確かに、トイレなら手洗い場で洗えますからね。トール、カンナちゃんの手とか洗ってきて」

早口で小林が促すと、トールは「はい」と返事をし、カンナと共にトイレの建物の中へと入っていった。

後に残されたのは小林とアインズ、そして先ほどのおばちゃんである。

おばちゃんは疑ってしまった気まずさを誤魔化すため、笑いながら「あらあら、そうだったの。さつきはごめんなさいね」と謝罪の言葉を口にし、それに対しアインズもまた「いえいえ、こちらこそ落ち着いて考えれば、一緒に来ていた小林さんやツールに頼めばよかったですね。服にまで汚れがついてしまったようなので、急いで洗わねばと動転してしまいました。お騒がせしてしまって申し訳ありません」と社会人経験を活かし、事を荒立てぬよう取り繕った。

程なくして、手や服についた血の汚れを落としたカンナとツールが戻ってきて、そこで再び全員笑いあった。

はつきり言って、この場における双方とも、今回の事をあまり深く追及されたくないのである。なあなあで何とか誤魔化し、やり過ぎしてしまいたいというのが、お互い共通の思いであった。

とにかく笑えば、大抵の事は誤魔化せるのだ。



ちやぶちやぶと波の音が響く。

その波にゆらゆらと揺られるのは、定番の白い白鳥を模した足漕ぎボート。

その座席には、小林家ご一行がそろっており、前の座席ではカンナとツールがキコキコと人間、というか小林基準の力で足を動かしていた。

後部座席でまったりしているのは、眼鏡をかけた色気のかけらもない女性——小林と、幻覚を解いたアインズである。

アインズは疲れたような声を出した。

「はあ、拙いことになるところだった……」

「うん、何とか誤魔化せてよかった」

隣の小林もまた、首を縦に振る。

ボートに揺られながら、事のあらましをアインズの口から聞いたところだ。

あのまま警察でも呼ばれたら、アインズだけではなく、小林たちも面倒な事になるところだった。

当然ながら、ツールやカンナは人間ではなくドラゴン竜である。戸籍などは偽造しているとはいえ、正式に根掘り葉掘り調べられたらどこかでほころびが出かねない。あとで魔法で何とかするにしても、通報などでもされたらどこかに記録などが残りかねず、そういったものをすべて消していくというのは容易な事ではない。

「いや、しかし、すまなかったな。おかげで助かった」

「ううん。助かったのはこっちも。アインズさんがいないところでカンナちゃんや鳩を食べて、それを誰かに見られてたら、それこそ大騒ぎになるところだった」

その言葉に「確かにな」とつぶやいて、外を眺める。

陽光煌めく水面、その向こうには街並みがあり、多くの人や車が行きかっていた。

その姿、色、形は様々であり、一人たりとも同じ人間はいない。

「袖すり合うも多生の縁か……」

きっかけはともあれ、向こうの世界に帰還する方法を探し出すまで、アインズはこの世界にとどまらなければならぬ。

そうなれば、必然的にこの世界の人間たちとの関わりは広まってくる。

自分は偶然、こちらに迷い込んだ稀人まれびとだからと世捨て人のように他者と関わらないような生活にしても、完全に繋がりを断つことは出来ない。どうしてもなんらかの形で人と関わらずにはいられない。

完全に拒絶することなどい無理ならば、むしろ自分から関わっていく方が良いのではないか？

一期一会。

ほんの一時かもしれないが、今こうして共にいる関わりをもっと大事にすべきかもしれない。

アイنزはボートの揺れに身を任せながら、そんなことを考えていた。

そうしていると、前の座席で足漕ぎボートを漕いでいたツールが肩越しに振り返り、小林の方へその顔を向けた。

「じゃあ、この後は夕飯の食材を買って帰りましょうか。小林さん、今日の夕食は何がいいですか?」

その問いに小林は後頭部で腕を組んで考えた。

「そうだな……トールの尻尾焼き以外がいいかな」

「はっ! それはもしや、ご飯よりお前を食べたいぜという遠回しな隠喩ですか?!」

「いや、違うし……。えーと、アイنزさんは何がいい?」

そう訊ねられたアイنزは、これまでとは違い、和やかに笑って返した。

「ははは、すまんが知っての通り、私はものを食べないからな」

「ああ、そうだったね」

そうして二人で「ははは」と笑いあった。

そこには今朝まであった、一線を引いた距離感は無かった。

「あはは。そうだな。じゃあ、カンナちゃん。カンナちゃんは何が食べたい?」

聞かれたカンナは間髪容れずに答えた。

「鶏肉」

「「まだ、食べるの?!」」

第3話 失礼ですが、ご職業は？

さて、アインズがこの世界に召喚され、小林家に住み着いてからしばらくが経った。

新顔が加わって以降の小林家の生活はというと――。

朝。

「トール……このベーコンエッグっぽいやつだけど、目玉焼きの下にしているの……なに？」

朝っぱらから小林得意の死んだ魚のような目による追及に、トールは冷や汗を流しながら顔をそらす。

そんな二人の傍ら、カンナは真つ赤なタコさんウインナーを振るえる箸でつまみあげ、口へと運ぶのに悪戦苦闘していた。

そんないつもの和気あいあいとした食卓に加わることなく、飲食不要であるアインズは独りソファでテレビを見ていた。

昼。

小林は仕事へ、カンナは学校へと出かけている。

トールはというと掃除、洗濯、料理に使う食材の買い出しとそれなりに忙しく時を過ごしていた。

そして、アインズはそのような家事などに使えるスキルは持たないため、邪魔にならぬよう、独りソファでゲームをやっていた。

夜。

トールが作った夕食を囲み、そして食べ終わったら順々にお風呂を済ませ、その後、皆でテレビを見ながら、今日、職場や学校であったことをワイワイと話しつつ、穏やかな時を過ごした。

そして、アインズもまた、あれこれ話しながら、共にソファでテレビを見ていた。

深夜。

皆がそれぞれの寢床で就寝した後、睡眠不用の身であるアインズは皆の邪魔にならぬようヘッドホンをつけ、独りDVDを見ていた。

「小林さん、忘れ物は無いですか？」

朝、出勤の時間。

トールの声に、小林は答える。

「うん、大丈夫。カンナちゃんもない？」

小林の問いに、カンナは「うん」という言葉と共にこくりと頷く。
「いってらっしゃい」

会社に出かける小林と学校に行くカンナを見送るのはトールとアインズ。

だが、その時、黄色い帽子をかぶったカンナはいつものように家を出て行かず、その場で小首を傾げた。

どうしたんだろうと、皆の視線が集まる中、カンナは声を発した。

「ねー、アインズ？」

「む？ なんだ？」

「アインズって——」

尋ね返すアインズに、カンナは人差し指をピツと指した。

「——ニート？」

「ぐはあっ!!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『ニート』

本来は十五歳から三十四歳までの、家事・通学・就業をせず、職業訓練も受けていない者の事を指す言葉なのであるが、一般には働ける

のに働きもせず、ぶらぶらしている人間の事を指す。

そう定義した場合、けがや病気とは無縁なアンデッドであるアイズは『働ける』存在であり、かつ何らかの労働に勤しむわけでもなく日がな一日テレビやゲームをして過ごしているだけの彼は、まさに非の打ちどころもないほどのニートである。

実際、二十一世紀の日本ではおよそ60万人のニートがいると言われている。

この人口およそ一億三千万の現代日本に60万ものアイズがいるということである。

アイズが60個師団。

凄まじい戦力である。

しかし、幸か不幸か、彼らはアイズほどの戦闘能力は保有しない。銃で撃たれば死ぬし、剣で切られれば死ぬし、棒っ切れで殴られても死ぬ。火であぶっても死に、毒ガスを浴びても死に、北極や南極などに放り込んでも死ぬというひ弱さである。

彼らにできることと言ったら、せいぜい扶養してくれている親などの資産をむさぼる事くらいしかできない。

まさに穀潰しである。

だが、アイズは違う。

アイズはアンデッドであるため、飲食を必要としない。

すなわち、穀は潰さないのだ。

さらに言うならば、アイズは睡眠を必要としない。疲労もしない。

アイズは眠ることも疲れることもなく、自宅を警備し続けることが可能なのである。

自宅の警備という観点から言うのならば、ツールもまた十二分に自宅を守る能力に長けている。

その戦闘能力はアイズに引けを取らないし、またメイドである彼

女は小林家における家事一般をこなすことが出来る。これはそういったスキルを持たないアインズには決してまねできない圧倒的なアドバンテージだ。

しかし、彼女はいかにドラゴンとは言え、生命ある者としての理ことわりからは逃れられない。

人間のように数日食べないだけで死んでしまうほど、虚弱にして貧弱極まりない生物ではないにしても、その肉体を維持するためには食事が必要とする。

また、かなりの長期間眠らぬまま活動できるとはいえ、不眠の間はどうしても能力が落ち、活動に支障が出てしまう。

対してアインズはそんなものなどまったく必要としないのである。

ツールを食事などの経費がかかる代わりに家の警備や家事などを行ってくれる、使い勝手はいいものの高コストなキャラとするのならば、アインズは警備以外の事には使えないものの、ほとんど経費のからない低コストキャラである。

実際、アインズが小林家にいることによる費用は、せいぜい彼が暇つぶしに見るテレビなどの電気代程度しかない。

SEとしてそれなりの給料を得ているとは言え、すでにツールとカナンという2人の扶養家族を養っている小林にとって、家に置いておいても大して懐の痛むこともないアインズは、まさにお財布と環境に優しいエコキャラである。省エネ大賞を受賞し、減税対象となってもおかしくはないほどだ。

その姿はまさに理想の自宅警備員。

およそオリンピック種目に自宅警備の競技があったら、日本代表として選出され、名だたる世界の強豪たちとも十分渡り合える——いや、それどころかメダル獲得すらも確実視されるであろうほどの逸材である。

そんなまさに栄光と期待を一身に受けるアインズであったが、今、そんな彼の身に異変が起きていた。

現在、アインズの姿は本来彼が守護すべき小林家になかった。彼がいるのは近所の公園のベンチである。

これは一体どうしたというのだろうか？

自宅にいない自宅警備員など物の役にも立たない。存在価値がないゴミクズのようなものである。

いや、ゴミならば燃やしてしまうことでその焼却熱を再利用する施設などもあるが、アンデッド本来の弱点である火に対しても耐性をつけているアインズは燃やすことすら出来ない。まさに燃えないゴミである。

更に言うならば、その大きさからいって普通の不燃ごみですらなく、回収してもらうにはいちいち連絡せねば引き取りに来てくれすらない粗大ゴミに分類され、捨てるだけで金がかかるなどというはた迷惑極まりない存在だ。

しかも、現在ツールの方はというと商店街に買い物に出かけている。

すなわち、今の小林家はツールとアインズ両方が不在という状態だ。

もし、この間に侵入を試みるものがいたのなら、今流行りの珪藻土マットに吹きかけた水のごとく、容易くお家の中に入られてしまいかねない。

危うし小林家。

しかし、心配するなかれ。

ちやんとそちらについてはあらかじめ対策を講じてある。

さすが、アインズ様。



「あ、あの……お届けものです……けど……」

話は戻り、我らが愛すべき死の支配者、現アインズ・ウール・ゴウンにして元モモンガ、そして更にその元は鈴木悟のことである。

彼の姿は先に述べた通り、公園のベンチにあった。

そこに腰かけ一人佇む、アインズ。

ここはアンデッドなんぞゲームもしくはキネマの中でしかお目にかかれない現代日本であり、彼がその姿のまま、のんびり日向ぼっこしている姿を誰かに目撃されでもしたら、大騒ぎになるだろう。

きつと、すわ一大事と当局に通報した善良なる一般人は、おっとり刀でやって来た救急車に乗せられ、「モルダー、あなた疲れているのよ」と特殊な施設でしばらくの間、療養に専念せねばならなくなることは間違いない。

もちろんアインズとしても、善意の一般人をそんな不幸な目には遭わせることは本意ではないため、ちゃんと抜き取り男性の——もちろん人間であつて、けつしてゴブリンや蜥蜴人などではない——幻覚をかぶせている。

その顔のモデルは本当の自分——鈴木悟である。

未来世界では、そしてこの時代においても、残念ながら美形と認識されるには程遠い容姿であるが、少なくともオークやトロール、疫病爆撃手などと間違われるような容姿ではなく、ごく普通の青年——そろそろ中年と間違われるかもしれない——の顔である。

ついでに幻覚で作った服装もまた、この時代の標準にして目立たないような衣服、すなわちスーツであつた。

そうした魔法による偽装のおかげで、とりあえずは即座に大騒ぎになるといふ事態は避けられていた。

だが、それなりのいい年らしいスーツ姿の男性が、昼の日中に公園のベンチに腰かけ、独り項垂れているというのは、通りがかった人たちにはとある印象をもって受け取られ、その姿を見た買物に行く途中の御婦人方や愛犬の散歩中のお年寄りからは、気の毒な御仁を見

る目を向けられていた。

しかし、そんな周囲の視線など気に留める暇もなく、アイنزは独り思い悩んでいた。

彼がこうして打ちひしがれている原因。

それはもちろん、今朝がた、カンナに言われた一言が原因である。

ニート。

言われたアイنزは胸を押さえ、身悶えた。

小林が慌てて「こら、カンナちゃん。しーっ、しーっ」と制止するも、もう遅かった。

カンナの無邪気な一言は、アイنزのへ上位物理無効化Ⅲへ上位魔法無効化Ⅲへ更には精神作用無効までをも貫いて、クリティカルヒット無効の能力を持っているはずのアイنزの心を直撃したのだ。

確かに言われても仕方のないほど、この世界に来てからアイنزは何もやっていなかった。

小林もうすうす思っではいたものの、彼女はアイنزをこちらに呼び出してしまったのは酔っぱらった自分のせいだからと何も言わないうでいた。

だが、小学校に行ったカンナはニートや引きこもりがこの現代日本において深刻な社会問題になっていると習ってきたようだ。

学校の先生は、もし児童の親族にそんな存在がいたらと配慮し、幾重にもオブラートに包んだ言い方をしたのであるが、授業が終わった後の休み時間に子供たちは実に率直にして素直、そして忌憚のない言い方でニートについての意見を交換しあっていたらしい。

ドラゴン
竜とはいえ、純真無垢な幼女に澄みきった瞳を向けられ、指摘されたアイنزはいたたまれない気分になり、こうして独り公園のベンチ

に佇むこととなった。

この状況を打破するには方法はしごく簡単である。
働けばいいのである。

それはアインズ本人としても分かっていたのだが、それには大きな
障害が立ちふさがっていた。

もう一度言うが、この現実世界において、アインズのようなアン
デッドは存在すらない。社会生活を送るにおいても、エ・ランテル
でやったようにアンデッドを受け入れる、受け入れないの選択どころ
の話ではない。

今やっているように幻覚魔法で正体を隠すといっても、それにも限
度がある。

まず、幻覚はあくまで視覚的に誤魔化すだけで触覚まではどうしよ
うもないため、触られたらアウトである。

また、彼はアンデッドであるため飲食が出来ない。おそらく働きで
もしたら、なんらかの機会に職場の同僚と共に食事をするのは避けら
れない。

そんなとき、一体どうして飲食不要な事を誤魔化そうか？

宗教上の都合と言っても、特定の物を食べられないだけならまだし
も、命を奪った日は4人以上で食事をとってはいけない決まりだなど
と珍妙な事を口走ろうものなら、さてはおかしなカルト宗教に所属し
ている怪しげな奴だと別の意味で目立ってしまうだろう。

何かするにしても、常にアンデッドの正体が露見する危険性と隣り
合わせであり、どうにかばれずにすむ職種は無いかと色々考えたもの
の、特に名案も思いつかぬままであった。

そもそもな話であるが、元々アインズは22世紀前半の人間、それ
も一般人である。

この21世紀前半という時代について、大した知識を持ち合わせて
はいない。

例えて言うならば、およそ現代（21世紀前半）の人間が明治、大正時代に紛れ込んだようなものである。

そのため、いまいち一般常識に疎いところも多く、とくに金銭の額や価値に関してはさっぱりであった。

せめてもつと前の時代、江戸や戦国、平安時代くらい明確に異なる時代ならば、持ち前の知識などでチート内政でも出来たのだろうか、せいぜい100年程度という微妙に近い世界においては、ただ保有している知識のみで何とかするというのは、その時代について詳しいのならばともかく、ただの一般常識程度では不可能であった。

そこで情報収集という名目、口実、自分に対する言い訳と共に日が一昨日テレビを見て過ごしていたのだ。

そうして日々を過ごし、労働に励んでいる小林を横目に、朝っぱらからNHKの教育番組を視聴し、のんびんだらりと過ごすという生活を繰り返した結果、いつの間にもやら時は経ち、いつしかアインズはまごうことなく『ニート』と呼ばれるにふさわしい存在へと昇格していたのであった。

「悩んでおるようだな、若者よ」

下手な考え休むに似たりという言葉を、この上ないほど現世に具現化した存在となっていたアインズに、不意にそんな声がかけられた。

顔をあげると、いつの間にも隣のベンチに一人の人物が腰かけている。

それはアインズの目から見ても面妖さを覚える、禿頭に奇妙な凹凸がいくつも浮かんでいる奇怪な容姿の老人であった。

「しかし……お主、一見、悩んでおるようだが、それは本当に悩んでおるのかな？」

「えっ？」

「悩んでいるように見えて、実は悩んでいるふりをしているだけでは

ないか？」

老人は口元から垂らした長い髭を揺らしながら、言葉をつづける。「悩んだ後は答えを出さねばならぬ。考えてすぐには答えは出ぬかもしれないが、一歩一歩山を登るように少しずつでも思考を進めていくのが考えるという事だ。しかし、どうしていいのか、そもそも何を考えればいいのかについて、考え悩むことは悩むふりをしていただけ、ただ時間を浪費しているだけに過ぎん。そうしているうちにも時はどんどん過ぎていくぞ」

「……まあ、時なぞいくら過ぎても、今の私には関係ないがな」

すでにアインズは人間ではない。アンデッドである。寿命の無いアインズにとって、時間は無限に存在するに等しい。

「お前さんはそうかもしれないが。だが、周りはどうかな？」

「なに？」

「お主を取り巻く周囲の者達、環境、それらは時と共に移ろっていくぞ。自分にはいくらでも時間があるからといっておると、気がついた時には、いつの間にもやら自分の周りには何もなかった、自分は何もなしえていなかったと後悔することになるかもしれない」

その言葉にハツとした。

かつてナザリックにいた時も、ときどき思い悩むことがあった。

ナザリックにいる者の多くは寿命がない種族やアンデッドであるが、中にはそうではない者もいる。例えばダークエルフのアウラやマーレは長命ではあっても、長き時の果てにはその生命が尽きる日が来る。それに対してどうすべきか？ 一度殺してアンデッドにするか、それとも^{ウィッシュ・アポン・ア・スター}星に願いを^をで何とかできるかと、いつか来る終わりを恐れ、秘かに頭を悩ませていたものだ。

しかし、そちらに関しては悩みはしても、あくまで数百年は先の、後回しにしてもいい悩みでしかなかった。

だが、そちらと異なり、今、アインズが厄介になっている家の家主、小林にはそんなに時間は無い。

彼女は本当に普通の、ただの人間である。

この時代はそれなりの医療体制があるとはいえ、100年もせぬうちには死を迎えるだろうし、それよりもっと前、数十年で肉体は老いさらばえ、数年内にはそれこそ結婚などで環境が大きく変わる事も考えられる。

アインズが小林の所に居候している理由は、召喚の責任を感じた小林が自分の家に受け入れてくれたからというのもあるが、ナザリックのある世界に帰還するためには彼女の近くにいることが最善であると判断したためだ。

なんらかの拍子で召喚の際に使用した魔法陣がはつきりするかもしれないし、また彼女の友人には人外の存在、ドラゴン 竜たちが多くいる。

アインズはかつて竜の秘宝と言われる物を使用し、異世界へ渡ったこともある。

およそ、世界の理ことわりの外にいる存在であるドラゴン 竜。

彼らと小林経由でも接しているうちに、元の世界に帰還する方法にたどり着けるかもしれないという算段があった。

だが、それより先に小林に何かあったら？

小林の近くにドラゴンが集まるのは、彼女の下に一体のドラゴン 竜、トールがメイドとして仕えているからだ。

なんらかの形で小林の環境が変化し、トールが彼女の下を離れたら、ドラゴン 竜たちは小林の周りから姿を消すだろう。

そうなれば、アインズがあちらに帰還することが非常に難しくなってしまう。

今の環境は非常に壊れやすい、砂で作られた城の上に成り立っているとしか言いようがないことにアインズは気がついた。

漫然と時を過ごしているうちに、取り返しがつかない状況になっってしまうかもしれない。

「しかし……いったい、先ず何からすれば全く考えもつかない状況なんだ……」

アインズは見ず知らずの他人ながら——いや、見ず知らずの他人だからこそ、その心境を吐露した。

老人は顎髭を撫でつけながら言った。

「なら、まずはほんの少しでも思いついたところを片っ端から考え、行動してみるのだな。ほれ、パチンコでうまく球が入って大当たりを引いたとしても、実際には打ち出した球のそのほとんどは外れて下に落ちていなのだ。最初から、これは駄目だから考えても仕方がない、やっても意味がないと思わずにな。やらない方が良かったと思っただ後悔することもあるだろうが、やった方が良かったと思っただ後悔することも多い。なら警戒しつつも、少しずつやってみることだな」

そして言うべきことは言いきったとばかりに、その老人はふらりとベンチから立ち上がった。

「なあ、ご老人。あなたの名前は？」

アインズは遠ざかっていく老人の背に声をかけた。

それに対し、老人は振り向くことなく声を返した。

「わしか？ なに、わしは大した者ではない。ただの通りすがりの鬼神——存神鬼ダルスという」

「いや、なにもんだよ!」

アインズが叫ぶも立ち止まることなく、街行く人々の群れに紛れ去っていくダルス。後にはアインズのみが、一人ベンチに残された。

——鬼神ってなんだ？ ……まあ、あいつが本当に何者かはさせておき、こうしていても仕方がないのは事実だな。

実際、アインズが小林家を出て、こうして公園のベンチに腰かけるようになってから早や数時間が経っている。

その間、何があったかという何もない。何をしたという訳でもない、良いアイディアの一つも浮かんでこない。いくらそこに佇んでいても、体温すらないアインズは、いわゆるベンチを温めることすら出来ない有様である。

もう一度、最初から考えてみよう。

まず、今やらねばならぬこと、それは二ート脱出である。その現状を何とかするには金を稼ぐことが重要だ。

しかし、現在のアイズは素性の知れない存在であり、あまりはつきりとした身元の確認を必要とする職業にはつくことは出来ない。

ならば、と考える。

ならば、はつきりとした素性が判明せずともできる職業であればいいではないか。

さて、何が出来るか？

……思いつかない。

そうして、話は振出しに戻った。

何もいい考えが思い浮かばない。

そもそも、何も思いつかないから、こうしてベンチとお友達になっていたのである。

ああ、あちらの世界ならばよかった。

向こうの世界ならば、おあつらえ向きに冒険者という職業があった。

素性や奇行にも頓着せず、その実力のみで判断され、金が稼げる職業。

しかし、あいにく、この世界にはそんな冒険者などは存在しない。

そもそも、現代日本では腕っぷしの強さなどまず必要とされない。

需要があるとするならば、それこそ裏の職業、ヤクザや胡散臭いところの用心棒などであろうか？

だが、なんとなくそんなイメージはあるものの、それが具体的にどんなことをやっていて、どこに行けば雇ってくれるのかはさっぱり分からない。そもそも、そういった事に手を染めていれば、やはり警察沙汰になりかねないし、また後ろ暗い事に手を染めていたら、家主である小林の迷惑になりそうな気がする。

——他にもっと、何かないか？

つまり、特に素性を明かさないと信用できない人間でもできて、手っ取り早く金が手に入る職業だ。

はつきり言つて、ある訳がない。

そんな職業があるなら、この世の誰も苦勞はしない。

腕を組んであれこれと考えるアインズの頭がだんだん下がっていく。まるで額に重りでもつけているかのように、項垂れていく。

そうして最初と同じような姿勢まで戻った所で、アインズはハツとして首をブルブルと振ると、エビのように曲がった腰を伸ばして姿勢を起こした。

——いやいや、だから、そんなのじゃダメだ。

考えて駄目そうだから、そこで行動しないではなく、とりあえず思いつきでもいいから行動してみる事だ。

先ほどもあのダルスとか言う老人も言っていたじゃないか。

『先ずはほんの少しでも思いついたところを片っ端から考え、行動してみる事だ』、と。

……ん？

待てよ……。



ペラリと手の中のを差し出す。

それは紙幣。

現代において、名前や要約は知られているが実際に現物を読んだ人は少なさそうな本の著者として有名な明治期の学者が描かれた、いわゆるところの一万円札。

束とまでは言わないが十枚弱ほどが、アインズの骨の指に挟まれていた。

それを見て、驚きを隠せない小林。

一体どこで、こんな短期間に、それなりにまとまった金をアインズは稼いできたというのか？

そしてアインズはそんな彼女の様子を見て、満足げに笑った。

「なに、ただ厄介になっているのも、なんだからな。ちよつと稼いできた。遠慮せず、生活費の足しにでもしてくれたまえ」

そう言つて、自慢げに胸をそらすアインズ。

だが、そんなアインズに対して、小林は疑いの目を向けた。

「ねえ、これってどうやって稼いできたの？ まさかと思うけど、どこかで盗んできたとか？」

小林お得意の死んだ魚の目に移りかけたのを見て取り、拙いと思つたアインズは引つ張らずに、さっさと答えを言ってしまうことにした。

「ええとだな。……つまり、パチンコだ」

「はっ？」

「パチンコで取った球と交換できる、とある景品はな、パチンコ屋のすぐ近くにある場所で高く買い取ってくれたりするのだよ」

「いや、それは知ってるけどさ」

「ふむ、知っているなら話は早い。パチンコで儲けたのだ」

あの時の会話で、ダルスは例え話としてパチンコを持ち出した。

『パチンコでうまく球が入って大当たりを引いたとしても、実際には打ち出した球のそのほとんどは外れて下に落ちているのだ』、と

それを思い返したとき、アインズは思ったのだ。

——パチンコで稼げるんじゃないか？

アインズの生きていた二十二世紀にはパチンコなどすでになかったのだが、テレビやゲームなどを通じて、この時代におけるパチンコについて知りえていた。

そしてアインズは、コンビニでパチンコ関連の本を立ち読みし、パ

チンコ屋から出てきたガラの悪そうな男の記憶を探るなどして、あらかたの知識を手に入れたのだ。

そうして意気揚々と小林からもらったお小遣いを握りしめて決戦の場、すなわちパチンコ屋に向かい、見事、大金をせしめることに成功したのである。

その答えに、小林は呆れたような声を出した。

「よく勝てたね……」

「なに、私は魔法でパチンコ玉を動かせるからな」

「いかさまじゃん！」

その言葉に、ちっちちちと白い骨の指を振る。

「おっと、注意事項の中に魔法を使つてはなりませんという規定はなかったぞ」

「そりゃ、無いだろうけどさ……」

疲れた声で返す小林。

そんな彼女の横から顔を出したカンナ。

「アインズ、お金を稼いできた？ ニートじゃなくなつた？」

その問いに、アインズはにやりと笑った。

「おお、そうだと。今の私の職業は——ギャンブラーだ」

「おおー」

なんとなく異世界の宝物殿にいるドイツ語が堪能なドツペルゲンガーを思わせるポーズを決めたアインズ。そして厨二マインドをこよなくくすぐる『ギャンブラー』という響きに目を輝かせるカンナ。

——いや、ギャンブラーって言えば聞こえはいいけど、女の家に住み着いて、家主から金を貰って、日がな一日パチンコを打つのも、ニートと比べてたいして立場が向上したわけでもないような……。

小林はそう思いはしたものの、自慢げなアインズと感心しきりなカンナの様子に、それを口にしないだけ大人であった。

第4話 お役に立ててますか？

陽光を浴びて輝く白い砂浜に、寄せては返す白波。

きらめく水面みなものかなたに広がる水平線に冒険心をくすぐられ、すこし沖へとボートで漕ぎだしてみれば、透き通るような海は視線を遮ることなく、そこに泳ぐ極彩色の魚や不思議な形をしたサンゴに覆われた海底の様子まで、はつきりと目にすることが出来る。

ふと、元来た陸地の方へと目を向ければ、砂浜の向こうに広がるのは人の手など加えられていない豊かな森林。

風が吹くたび、森の木の葉が揺れ、互いにこすれ合う音が億万の自然の交響曲として響き渡る。

そこには車のエンジン音やスピーカーから垂れ流される音など人工のものは一切ない。それどころか人の話し声すら皆無である。

耳に届くのは森の奏でる葉擦れの音と、際限なく続く波の音、そして名も知らぬ鳥たちのさえずり声のみ。

太陽ははるか頭上で燦燦さんさんと輝き、この地上の楽園を照らし出していた。

そんな南国の浜辺。

サンゴのかけらで作られた白い砂浜の上には、場違いのように据えられた一脚のビーチチェア。

その上に横たわる人影は、優雅にその足を組み替える。

じりじりと照り付ける灼熱の太陽にさらされてもなおその足は白く、ほっそりとしたその形はまるで人の手になる芸術品のよう。

申し訳程度にきわどい水着のみで覆われたその体は、無駄な贅肉と**いうものが一切ない完璧な身体であった。**

頭の下で組んでいた手をほどき、黒曜石からそのまま削りだしたかのようなワレンズのサングラスをわずかに持ち上げる。

見たものの心を捕らえ、意識そのものを引きずり込むかのように神

神秘的な輝きを放つ、その漆黒のシェードの奥に見えたもの。

それは爛々と輝く、生ある者を妬み、憎む死者の怨念を思わせるような深紅の灯り。

アインズであった。

ここは日本からはるか南に数千キロ。

東南アジア某国の無人島である。

数千キロと言われると、とんでもない距離に感じるかもしれないが、アインズは〈転移門^{ゲート}〉という距離無限、転移失敗率0%の魔法が使えるのである。

正直、近所のコンビニまで歩いていくより早くて楽なのだ。

それにしても、実に南国の景色には似合わない男——いや、アンデッドである。

傍^{はた}から見ると、誰もいない無人島の浜辺に放置されたビーチチェアの上に一体の白骨死体が転がっているようにしか見えない。

もし、航空写真なりでその光景が撮られでもしたら、ミステリーの題材となつて、しばしの間ネットをにぎわすであろうことは間違いない。

アインズに似あっているのは、燦燦と光り輝く太陽の下にいるように、海辺の洞窟の中に隠された宝箱の上に横たわっている方である。

ともあれ、そんな美しい大自然に紛れ込んだ自分の異質さなど気にも留めずに、アインズはバカンスを楽しんでいた。

今日はいつものグレート・モモンガ・ローブすら脱ぎ捨て、ブーメランパンツ一丁で南国の日差しと向き合っている。

いや、お前の身体のどこに隠す要素があるんだよとも言いたくなるが、それはさすがに全裸は気恥ずかしいという人間としての残滓が働いたためである。

しかし、こうして真昼間にリラックスしているアインズの様子に、おやおもう方もいるかもしれない。

前回の話において、アインズはニートからパチンカスへと見事ジョブチェンジを果たしたはずである。

そのはずなのに、どういうわけだか今、アインズの姿はパチンコ屋にはなく、こんな無人島の浜辺にあるのだ。

ここは日本からはるか遠く離れた南国ではあるが、あいにくとこの場所は緯度ともかく経度は日本の兵庫県明石市とさほど離れていない所である。時差といってもせいぜい1時間程度であり、こうしている現在も日本ではお天道様てんとさまが上空に鎮座していらつしやる時間帯である。

一体なぜ、昼日中だというのにアインズはパチンコ屋にも行かず、こうしているのかというところ、それには長く深い訳があるのである。

アインズはこの世界での資金調達的手段としてパチンコを選んだ。そうして、日々、パチンコ屋の開店と同時に出勤しては、労働いそに勤しんだわけではあるが、そこに落とし穴があった。

労働環境の改善が話題となる昨今、一度台についたら食事にもトイレにも立たずに大当たりを出し続ける猛烈社員のアインズに待ったがかかった。

不正をしているのではないかと疑いの目を向けられ、アインズが店に入ると同時に店員のチェックが入るようになったのである。

盗賊職は取ってはいないものの、100レベルキャラとしての能力値の高さから、自分に監視の目が向けられている事に気がついたアインズ。

ならば、と自分の身体を包む幻覚をそのたびに変えることで、監視の目を誤魔化し、店に通い続けた。

だが、その結果、いかさまをしているのは1人の男ではなく、なんらかの集団が組織的に不正行為を働いているらしいと思われるってしまった。さらには、その噂が近隣の店舗にまで流れ、何やらとんでもない大ごとへと発展してしまったのだ。

すでに近隣のパチンコ店では、店に入った客一人一人の顔を確かめ、遊戯中もひっきりなく店員が後ろを通り抜けつつ店中を見て回り、どこかで連チャンが回り始めたら、すかさず店員が張り付き不正がないか監視するという有様である。なんだかもう店舗中にギスギスとした空気が流れており、そんな空気の中、段々と他の客たちも居心地の悪さから足が遠のき始めていた。

そして、さすがにアインズもそんな監視の中、ばれぬように魔法で球の動きを操作するなどのいかさまをするのも面倒になってしまっていた。

そこで、アインズはパチンコに執着することなく、さっさと見切りをつけた。

アインズの胸には、こうしてちまちまパチンコで稼ぐ事にしがみつくと他に、すでに新たななるビジョンがあったのだ。

それは世界。

そう、海外にある本物のカジノへ遠征に行こうという計画である。

日本から外国へ行くのは、いささかハードルが高い。

パスポートだの、ビザだの、あれこれ申請だのと手続きが煩雑であるというのもさることながら、日本において外国の事を海外と称するように、四方を海で囲まれた島国である日本から他国へ行くには、海を渡らなくてはならない。とくにアメリカとの間には広大なパシフィック・オーシャンが横たわっており、飛行機で飛ぶ、船で渡る、もしくは太平洋を泳いで渡るなどの手段を講じなくては行くことは出来ない。

普通の人間にとっては。

だが、普通の人間ではないアインズの前には、そんな些事など問題では無い。

アイNZは〈転移門〉の魔法に〈遠隔視の鏡〉を組み合わせることで、地球上のどこへだろうと瞬く間に移動することが出来るのだ。

そうしてやって来たのはカジノの殿堂にして本場、アメリカはラスベガスである。

おのぼりさんらしく辺りをきよろきよろと見回したくなる衝動を抑え、アイNZはネットの情報と本屋での立ち読みとで得た知識を武器に、意気揚々と一軒のホテルに併設されたカジノへと足を踏み入れた。

はてさて、結果はどうなったのかということである。

まあ、ラスベガスに行ったはずのアイNZが、こうして南の島の海辺で一人、ビーチチェアに寝そべり、「あああああー」とおっさんくさい声をあげて伸びをしていることから想像は出来るだろう。

端的に言うと、失敗であった。

自動ドアをくぐってカジノに入店し、何気ない顔でそれとなく周囲を見回し観察するアイNZ。

ウェイトレスの女性がサービスドリンクの注文を聞きに来たときも、彼は動じることは無かった。

素の鈴木悟なら、見目麗しい白人女性が自分の方へと歩み寄ってきたとしてもしたら、確実に平静ではいらなかっただろう。キョドってしまったであろうことは間違いない。

だが、今の彼は以前とは違い、ナザリックの支配者として鍛えられた身。

相手は一目で美人と知れる外見であるが、なに、ナザリックのメイドに比べればなんという事はないなと落ち着き払い、堂々たる態度を堅持していた。

だが、その次の瞬間、アイNZは凍り付いてしまった。

アインズはすっかり忘れていたのだ。

「ここは向こうの世界とは異なり、国や地域によって言葉が異なるという事を。」

向こうの世界ではどういう訳だか、口から発せられた言葉は自動的に日本語に翻訳されて聞こえていた。そのため、どんな相手であろうと、どこに行こうと会話が出来た。

だが、現実では違うのである。

鈴木悟は小卒であり、英会話など出来ない。

必要なかったからである。

彼の時代では、誰もが持ち歩く携帯端末に翻訳アプリをダウンロードさえすれば、それで英語を話す人間とも意思疎通が出来た。そのため、それなりの上流階級でもない限り、外国語の学習などしなかった。

そして、アインズの知っている英単語といえば巻物スケロール、爆発エクスプロージョン、呪いカース、魔法マジック、ハゲワシ等々、およそ実生活で使う事などまるでないものばかりである。

ちなみに、かっこいいと思って勉強したドイツ語も、各種単語や決め台詞や慣用句などを丸暗記して憶えただけで、ドイツ語で会話できるほどではない。

とにかく言語の壁という、バベルの塔を築き、身の程知らずにも神の許へと辿りつこうとした愚かなる人間に下された罰の前に、アインズは完膚なきまで敗北を喫し、這う這うの体ほていで逃げ帰るより他になかった。

ついでに言うと、アインズの持っていた通貨は日本円であり、アメリカで使用されているドルの持ち合わせがなかったことも原因の一つである。

そうした失敗の結果、アインズは全ての事から逃げ出し、こうして

人っ子一人いない南の島で気分転換をしているという訳である。

今の彼の姿は、世間的に見て、無能な者の愚かな逃走に見えるかもしれない。

人間だれしも人生において、失敗は避けられない。一つの失敗にへこたれず、失敗を成功の糧として新たなことにチャレンジしていくのが人間であり、それを積み重ねて成長し、一人前の人間へと位階を進めていくのである。

一つ失敗することによってバックレてしまっていては、何も成長しない。

だが、しかし待つてほしい。

いったい成長することが良い事だなどと誰が決めたのだ？

ブルー・プラネットの言によれば、かつて海の中にいた巻貝は淡水の川へと進出してタニシとなり、陸上へと棲息圏を広げてカタツムリとなり、そしてさらに狭いところへも容易と侵入出来るようナメクジへと進化したのだという。

殻を背中にしよったカタツムリの人気たるや、子供からロイコクロリデイウムに至るまで種族を問わずモテモテであるが、一方、ナメクジの不人気さといえば、もはや口にする必要すらないほどである。

もし、彼の生物がナメクジまで進化せず、カタツムリのままでいたのならば、今でも人気者のままでいられたのではないか？ 見た目が気持ち悪いと言われ、作物の苗を食べるなどの実際の害以上に蛇蝎のごとく——いや、蛇も蝎も見たことがない人も増える昨今、それらよりも嫌われ、駆除される羽目にはならなかったのではないだろうか？ かかる一件を持ってしても、必ずしも成長、進化が良い事とは言えぬであろうというのが、アインズの結論であった。

それにアインズはニートと面罵され、卑しめられたのであるが、そもそもな話、ニートで何が悪いというのであろうか？

『働かざるもの食うべからず』

現代日本においても広く語られ、労働という重荷を背負わない人間

を当て擦るための凶器として使われる言葉である。

だが、タブラ・スマラグデイナによると、これはもともとキリスト教における新約聖書の言葉であるのだが、この言葉を現代の世に解き放ったのは誰であろう、共産主義の下にソビエトを作ったレーニンである。

なぜ、資本主義の現代日本において、1%もないキリスト教の言葉を、そして共産主義者の言葉を金科玉条のごとくに扱わねばならないのか？

宗教は麻薬だとか言う類いの人間が、その宗教の言葉を利用して、片腹痛い。そんな詭弁に惑わされる道理など欠片も存在しない。

しかし、それでも反論しようとする者はいるであろう。

この日本には三つの義務がある、と。

だから、その義務を果たしていないアイNZは罵倒されても仕方がないのだ、と。

日本国民の三大義務。

学校で習うが、すなわち『納税』・『勤労』・『教育』の義務である。

なるほど、確かにアイNZはそれらの義務を果たしてはいない。一応、果たしているのは買い物をするとき、消費税を払うくらいだ。

だが――。

だがしかし、それはあくまで日本国民の義務である。

アイNZは日本国民ではないのだ。

一応、未来では日本国民かもしれないが、法の非遡及の原則に基づき、現段階においては日本国民とはみなされないはずである。

アイNZが所属するのは、日本ではなくアイNZ・ウール・ゴウン魔導国。

それも彼は国王である。

王。

英語でキング。

ドイツ語でケーニヒ。

イタリア語でレレレのレッツ！ である。

王たる者のすべきことは節制に励むことではなく、自分のもとに集められた富をあまねく民衆にばらまき、金を循環させる事である。

アインズが暇を持って余して読んだ多くのネット小説でも、そう言っていた。

そう考えれば、今のアインズは経済を廻している良い存在と言えよう。

そう、アインズが本気を出して稼いでしまうと、この世の富が彼の下にすべて集まってしまう事になるのだ。それは拙いのである。

アインズは本当はやれば出来る子なのであるが、本気を出していないだけなのだ。アインズはこの世界の者達に対し、ハンディキャップとして手加減をしてあげているのだ。

だから、こうしてアインズがのんびんだらりと何もせずに過ごしている事は、世界的に見れば決して悪い事ではないのである。

そんな詭弁のゆりかごに揺られ、途切れることなく耳に響く波の音を聞いていたアインズであったが、そんな彼の頭にピキーンと表現するしかない信号のようなものが走った。

創造者であるアインズと彼が作り出したアンデッドとの間には、意識的なつながりがある。

そして今、連絡用にと小林の部屋に残してきたスケルトン・センチキュビート百足状の骸骨——試しに作ってみたなら、その巨大さから無駄にスペースを取ってしまう、すこぶる不評だった——から、至急の合図があった。

アインズはビーチチェアからゆらりと立ち上がると、一人でいつもの服に着替えるという事に少々手間取りつつも身支度を整え、そして〈ゲイム転移門〉の魔法によって、小林の家へと戻った。

アインズの姿が消えると、〈クリエイト・グレーター・アイテム上位道具創造〉で作られたビーチチェアは掻き消す様に消滅し、その場には先ほどまで誰かいたという

痕跡は欠片も残らず、ただ潮騒の音だけが響いていた。



「じゃあ、お先に失礼しまーす」

そうやって同僚たちが事務所を出ていった。

「お疲れー」という小林の言葉の後に残ったのは滝谷、そして新人としてこの会社に就職したドラゴンであるエルマの三人のみである。

ボタンと扉が閉まり、しばし後、玄関の扉が閉められた音を聞いてから、ようやく小林は安堵の息を吐き、背もたれに体重を預けた。

そして、女性としてとても平坦な胸のポケットから、水滴型のイヤリングを取り出すと、つまみあげたそれに向かって声をかける。

「もしもし。ええと、聞こえる、アインズさん？ 皆、いなくなったよ」

その声と時を同じく、人影のいなくなった事務所に揺らめく暗黒が現れたかと思うと、そこからホワイトブリムを頭につけたメイド、そして漆黒のローブを身につけた骸骨が出てきた。

言わずと知れたツール、そしてアインズである。

幾度か認識障害を使い、小林の職場を訪れた事のあるツールと違い、アインズはこの時代の職場というものは初めてである。物珍し気に、辺りを見回した。

そんなアインズは置いておき、小林はツールに確認する。

「ツール、カンナちゃんは？」

「カンナなら、もうベッドで眠ってますよ」

その答えに満足そうに頷き、小林はまだきよろきよろとしているアインズに声をかけた。

「じゃあ、悪いんだけど、アインズさん。よろしくね」

アインズは、その背にかけられた言葉に居ずまいを正し、言った。「ああ、任せておくがいい」

事の発端は昨日のことである。

苛酷なデスマの間ながら、偶然にも彼女一人だけぼつかりと時間が空いたため、これ幸いと早めに帰宅し、ソファアに突っ伏して体を休めていた小林の許へ、学校から帰って来たカンナが一枚の紙を持ってきたのだ。

そこには授業参観のご案内と書いてあった。

だが、今日は偶々早く帰れたものの、明日以降もぎつちり仕事が詰まっている。一日休んで、授業参観に行くことなど出来ようはずもない。

そこで断ろうとした小林と、どうしても彼女に来てほしいカンナの間ですったもんだがあり、最終的に小林は会社に無理を言って、その日一日休みをもらったのだ。

だが、それに対して会社側は一つの条件を突きつけた。

それは、小林が休む一日分の仕事を前もってこなしておくように、というものであった。

普通に考えれば、そんな事出来ようはずもない。

そもそも、時間に比してやらねばならぬ仕事量が多すぎるから、デスマなどという労働基準監督署に睨まれそうな状態が放置されているのだ。そんな状況下において、さらに一日分、作業を進めるなどというのは狂気の沙汰。はつきり言って断らせるための口実でしかない。

だが、小林は敢えてその条件をのんだ。

大方の事情を聞いたアインズが協力を約束したからである。

そして、今晚中に一日分の仕事を前もって終わらせるべく、こうして滝谷やエルマにも手伝ってもらい、他の者達が皆帰った会社に集合

したという訳だ。

「ごめんね、滝谷君。つき合わせちゃって」

「ははは、別にいいって。カンナちゃんの為なんですよ」

頭を下げる小林に、さわやかに笑ってかえす滝谷。そんな彼をトルは、親の仇を見るような目で睨みつけている。

「エルマもごめん」

言われたエルマは、その豊満な胸を張った。

「まあ、構わんとも。小林先輩の頼みだからな」

「後で駅前のストロベリークレープ奢ってあげるね」

「クレープ?!」

とたんに、そのメガネをかけた理知的な顔が緩む。口の中いっぱい広がるクレープの甘さを想像し、その口元からよだれがじゅるりと垂れる。

幸せな妄想に浸っている彼女にはそれ以上構わず、小林はもう一度アインズに声をかけた。

「よし、じゃあ、始めようか。それでアインズさん、昨日言ってたこと本当にできるの?」

「もちろんだとも。私にとっては容易い事だ」

やる事は実に単純だ。

問題となっているのは、割り当てられている作業量に対して、それに取り掛かる作業時間が圧倒的に少ないことである。

ならば、手取り早い解決方法として、作業に費やせる時間を増やしてしまえばいい。

アインズは魔法によつて時間を止めることが出来る。

一回一回の効果時間はそれほど長くは持たないが、魔法職を極め、膨大なMP量を誇るアインズはそれを幾度も掛けることが可能なのだ。その連続使用によつて、現実の時間をほとんど経過させずに、作業時間を確保しようという計画であった。

さすがに何度も使えば、アイنزのMPもやがては尽きてはしまうが、たとえ一旦MPが無くなってしまっても、およそ六時間ほど休めば全快する。今、深夜であるから、ここで使いきっても早朝にはもう一度MPが満タンまで戻る計算である。つまり、二度にわたって時間停止による引き延ばしを試みる事が可能なのだ。

おそらく、それくらい使えば、かなりの作業時間を確保できるはずであり、なおかつ三人で作業すれば、小林の仕事一日分程度は消化できるだろうという目算であった。

「では、先ず一度使ってみるとしよう。準備はいいか？」

その問いに、小林らはこくりと頷く。

それを確認したアイنزは魔法を唱えた。

「^{タイム・ストップ}時間停止」

そして——瞬間、時が止まる。

ほんの一瞬前まで、建物の外からひっきりなく聞こえていた車の排気音もピタリと止まり、辺りは耳が痛いほどの静寂に包まれた。

「おお、本当に時間が止まってますねえ。それで、これつてどれくらいの時間止まるんですか？」

「だいたい10秒くらいだな。効果時間を伸ばすことも出来るが、まあ、それでも一回で数十秒程度かな。だが、何度でも使う事が出来るから、実質かなりの時間を停止させ続けることが出来るぞ」

トールの問いに、やや自慢げに返すアイنز。

だが、そんな彼の背にかけられたのは、エルマからの困惑の声であった。

「なあ、アイنزさん」

「ん？　なんだ？」

「いや……小林先輩と滝谷先輩も動かないんだが……」

見ると彼らの目の前で、小林と滝谷の2人は止まった時間の中、凍

り付いたようにピクリともしなかった。



「え？ 今、時間止まってたの？」

小林は不思議そうに首を傾げた。

トールはこくりと頷く。

「いやあ、全然気づかなかったなあ」

「時間の停止は、普通の人間が感知できる認識の範囲外での事だからな」

和やかに笑う滝谷にエルマがそう説明してやる。

それを聞いたアインズは、ふと思った。

「そう言えば、トールやエルマは停止した時間の中でも普通に動いていたな」

「そりやもうドラゴンですから。いちいちアイテムとかであれこれ対策をしなくちゃならない劣等種とは違いますよ」

ケラケラと笑って言うトールをエルマが補足する。

「ドラゴンは基本的に大抵の状態異常に対して耐性を持つからな。時間の他に睡眠、即死、毒、病気、麻痺なども無効化するぞ」

「あれ？ そうなのかな？」

うーんと思いついてみるが、記憶にあるヘジンマールの父親はグラス・ハート〈心臓掌握〉であっさり死んでいた気がする。

「まあ、ドラゴンと一口に言っても、その種類は多岐にわたるし例外もある。種族的に睡眠や酩酊に弱いとかな。それにドラゴンは基本的に年を経るごとに力を増していくから、年の若いドラゴンはそういった耐性を持たない者もいる。私やトール、それにファフニール殿やルコア殿はともかく、おそらくカナナはまだ時間に対する耐性は持っていないだろうな」

その解説を聞いてなるほどと思った。

ゲームであったユグドラシルでのドラゴンは、ほぼ確実に

〈グラスブ・ハート へ心臓掌握〉一発では死なず、ほんの一瞬、副次効果である朦朧状態になる程度であった。だが、ドワーフの都市を占拠していたあれらは弱い個体ばかりであったので、抵抗すら出来ずに即死したのだろう。魔法もせいぜい第三位階までしか使えないと言っていたから、納得である。

「まあ、すこし待て。時間対策のアイテムならある」

そう言うときアインズは、アイテムボックス内へ手をつ突っ込んだ。

時間停止対策を施していなければ、小林らまで止まってしまおうというのであれば、彼女らに時間停止に対するアイテムを渡せばいいだけの話である。

時間系に対しては自身、そしてギルメンたちも含めて、かなり昔に対策を講じてしまっていた。そのため、もはや使う機会などなく、すでにそんな類いのアイテムは無用の長物と化していたのだが、そんなものとして捨てられないタイプのアインズである。

アイテムボックスの奥の、そのまた更に奥へ放り込んでおいたはずのアイテムを探し、半ば空間内に体をつ突っ込みながらゴソゴソしていると、事務所内にピロピロと、何やら鞭を持った大学教授が世界中で古代遺跡の宝をめぐるって冒険を繰り返すような軽快な電子音が響き渡った。

なんだろうと全員目が集まる中、滝谷は懐からスマホを取り出す。

「あ、はい、もしもし……ああ、ファフ君？ どうしたの？ ……え？

時間停止？ うん、今、アインズさんが魔法で……あ、そうなんだ。

うん、分かった。伝えておくよ」

そう言って、ピツと通話を切った。

小林が聞く。

「ファフニールさんから？ どうしたの？」

「いやあ……」

聞かれた滝谷は、頭を掻きつつ、苦笑して答えた。

「……ゲームのコンボが途切れるから、時間を止めるなって」

その場にいた皆は、やれやれといった表情を浮かべた。

ファフニールは最もドラゴンが人間と接することに忌避感を口にしていたというのに、ある意味、最も人間に染まってしまっている。

だがしかし、困ったことになった。

アインズが時間を止めると、それはファフニールがやっているゲームに差し障りがでる。

それでも構わず時を止めようものなら、彼を怒らせることに繋がるだろう。

こちらにはツールとエルマ、そしてアインズがいるとはいえ、ドラゴン達が本気で戦いでもしたら、大きな被害が出る。下手をしたら付近一帯が吹き飛びかねない。

結果としてカンナの学校には行けるようになるかもしれないが、会社が無くなってしまったては今後の生活に支障が出る。

小林は大きいため息をついた。

「はあ、じゃあ仕方ないね。今晚、これから三人で地道にやろうか」

結局のところ、そういう結論になってしまった。

滝谷は気にしないでと笑ってみせ、エルマは任せておけと胸を叩いた。

そんな彼らに、アインズは手のひらを差し出した。

「そうだな……では、とりあえず、これをつけるといい」

皆の視線が集まる、その手の平には赤、青、そしてエメラルドグリーンという三色の小さな宝石が嵌め込まれた銀色の指輪が三つ転がっていた。

なんだろうと首をひねる彼女らに、アインズは説明してやる。

「これはバッドステータスを防止するアイテムだ。これをつけていれば疲労、睡眠、空腹などの影響を受けることはないはずだ」

「へえ、それは助かるよ」

明るい声で指輪をつまみ上げる小林。

人間の指にはめるには、いささか大きすぎる感もあるその輪を自分の指に近づけると、シュツという音と共に自動でサイズが調整され、それぞれの指にジャストフィットして装着された。

そして、試しにそれを取り外そうとすると、先ほどとは逆戻しのようになり、また少し大きめの指輪へと戻る。

滝谷とエルマもまた、アインズの出した指輪を手にとり、着けたり外したりを繰り返してみる。

「へえ、これは凄いね」

感心して声をあげる滝谷。

アインズは満足そうに頷いた。

「ああ、取り外しも簡単にできるようでよかった。昔は、一度つけたらそうそう外せなかつたからなあ」

その言葉に顔を引きつらせる小林。

「え? ……いや、もし取り外せなかつたらどうしてたの?」

「……まあ……指を切り落とせば外れるだろうし……」

「指を切り落とす?!」

「あ、いや、大丈夫! 一度、切断してもマジックアイテムで再生できるから! ちゃんと傷跡も残らないし!」

「そういう問題?!」

興奮して声をあげる小林、そして慌てて言い繕うアインズ。

そうして、ひとしきり騒いだ後、小林らはようやく作業に取り掛かった。

各々パソコンを立ち上げ、傍らに置いた資料を見ながら、入力を開始する。

彼女らがそうやって入力をやり始めるとアインズ、そしてツールにできることはなにも無い。

アインズはゲームのキャラクターとして魔法が使える他は営業畑の人間である。こういったプログラミングに関しての知識は無い。

かつてユグドラシルでのゲーム中に、その時代の現役であったヘロヘロらはプログラミングについての話をあれこれと語っていた。そ

してアインズはそれをさんざん聞きはしていた。

だが、かといって、それだけでプログラミングが理解出来ようはずもない。

そもそも、聞かされていたのは、苦勞して作成したのに、いきなり仕様が変更されたとか、クライアントのイメージと違ったとかで全部やり直しになったなどという愚痴ばかりであり、そこに役に立つような情報は何もなかった

事務所内にただカタカタとキーボードを打つ音が響く。

集中してモニターを睨み、記号の羅列と格闘している社員三人を前に、残る二人はただひたすらボーっと突っ立っているしかなかった。

——うーん。拙いな。

このままだと、とくに役に立てないまま、終わってしまう。

アインズは秘かに、口の中でぼやいた。

実のところ、アインズとしては、なんとかこの機会に小林の役に立っておきたいという思惑があったのだ。

アインズは当初、パチンコでの資金調達計画を思いついたものの、そちらは何やら大ごとになってしまい、思わしくない結果となってしまっていた。

そして、それに代わるものとして計画した海外のカジノ進出もまた頓挫してしまっていた。

つまるところ、金を稼ぐことが出来なくなってしまう、ニートに逆戻りしてしまったのである。

それに対する言い訳として、自分は王であるから、これでいいのだなどと考えはしたものの、そう言って堂々と開き直れるほど、アインズの面の皮は厚くなかった。死の支配者であるアインズの頭部は頭蓋骨そのままであって、顔に皮などは無いのである。

そんなときに降ってわいたのが、今回の一件。

これは彼にとつて、まさに渡りに船であったのだ。

金を稼げないのならば、別の事で小林家の役に立てば、そこに自分の存在価値が生まれるはず。そう、ひそかに意気込んでいたのである。

だが、絶対の自信をもっていた^{タイム・ストップ}の連続使用による作業時間の確保は、思いもかけぬところからの伏兵——ファフニールからの中止要請により、取りやめとなつてしまった。

これでは、せっかくの失地回復の機会が失われかねない。

状態異常防止の指輪は貸したものの、それだけでは自分の株をあげるにはまだ足りない。

他に何かないかとアインズは必死で思考を巡らせた。

だが、起死回生となる案など全く思いつかない。

そもそも今、小林らが行っている仕事について、いったい何をやっているのか詳しい事はアインズにはさっぱり分からないのである。せいぜいが一般にIT土方と呼ばれるような地道な作業の繰り返しであるという事を何となく理解できた程度だ。

——ある程度の知識がある人間が多くいれば、何とかできるのだろうがな。手伝いの人間を増やせば……。

そう思いつつも、アインズでは全く役に立たない。

この世界においてアインズは頼れる伝手など持ち合わせてはおらず、アインズ自身にもプログラミングのリアルスキルなどはなく、ゲームでの特殊技術^{スキル}等も持ち合わせてはいなかった。

当然であるが、ユグドラシルは剣と魔法のファンタジータイプのゲームであり、各種武器を振るったり、魔法を使ったりというものはあっても、SFもののようにプログラミングの特殊技術^{スキル}やそれを扱う職業^{クラス}は存在しないのだ。

したがって、アインズが召喚や創造^{モンスター}できる怪物達の中にも、そう

いった特殊^ス技術^キを保有している者などいようはずがない。

だが、そこまで考えたところで、アイنزの頭に引つ掛かるものがあった。

——ん？ 待てよ。

別に持っている必要はない。使えさえすればいいのか……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

カタカタカタカタ。

カタカタカタカタ。

カタカタカタカタ。

深夜の事務所内に、キーボードの音が途切れることのないさざ波のように響く。

今、事務所の中では大勢の人間が一斉にパソコンへと向かい、その手を一心不乱に動かしていた。

それだけならば特段なんの変哲もない光景に思える。

ごく普通の仕事場の風景だ。

だが今、まったくの第三者で、この現況を見る者がいたら、眼前に広がるあまりの異様さに凍り付いたことであろう。

すぐ手前の席に座り、キーボードを叩く人物。

頭の後ろで無造作にまとめた髪。オーバルタイプの眼鏡。華奢な身体。一見、男性かと思紛う胸部の持ち主である彼女は小林である。

その向こうの席に腰かけ、手をあげて指示を求めた人物。

彼女もまた小林である。

そして、手をあげた小林の許へ歩み寄り、モニターを覗き込んで指示をする彼女もまた小林であった。

小林。小林。小林。小林。小林。小林。
小林。小林。小林。小林。小林。小林。
小林。小林。小林。小林。小林。小林。
小林。小林。小林。小林。小林。……

今、この地獄巡システムエンジニアリングのオフィス内は、大量の小林で溢れ返っていた。

何故、こんなにも小林がいるのか？

小林は実は多胎児だったというわけでもなければ、忍びの技術を受け継ぐ者で分身の術を使ったわけでもない。タイムマシンで過去や未来の時間軸から集まって来たわけでもないし、はたまた小林にバイバインをかけたわけでもない。

この大量の小林。

彼女らは小林に擬態した二重の影である。

ドッベルゲンガー
二重の影。

ユグドラシルにおける異形種の一つである。

種族であるため、その強さは千差万別にして、様々な亜種も多いのだが、そのうち30レベル程度のものを、第五位階の^{サモン・モンスター}へ怪物召喚で呼び出すことが可能であった。

その最大にして特徴的な能力、それは他者の姿を真似る事、そして対象となった者の能力をコピーし、再現することである。

とは言え、あくまでその魔法で呼べるのは怪物の一種として召喚できる程度のものでしかなく、同じ二重の影でも、100レベルの拠点NPCとして作られたパンドラス・アクターとは比べ物にならない。

パンドラは45もの外装を記憶しておき、さらにそうして姿を変えられることが出来るそれぞれの100レベルキャラクター、その能力を才

リジナルの80%ほどまで再現することが可能であった。

対して、この二重ドッベルゲンガーの影の再現度は、30レベル程度の怪物モンスターということもあり、それより圧倒的に劣る。

複数の姿を記憶しておくことなど出来ず、目の前にいる一人の姿をとり、その能力や特殊技術ススキルを――模写する相手のレベルにもよるが――せいぜい半分程度、再現する程度でしかない。

だが、その程度であっても、この世界の現代人が持ちえる技術、知識をコピーし、扱えるというのは実に有用な能力であった。

アインズは〈怪物召喚サモン・モンスター〉を連続使用して、大量の二重ドッベルゲンガーの影を召喚し、彼らに小林の擬態を命じたのだ。

そうして〈上位道具創造クリエイト・グレート・アイテム〉で作成したモニター一体型のPCとキーボードを並べ、彼らに入力作業をさせたのである。

もちろん、そいつらの能力は小林本人には劣る。

こうして見えていても、オリジナル小林の流れるようなブラインドタッチとは異なり、キーボードを叩く音もたどどしく、時折テンポが狂ったりする。

しかしそれでも、アインズらには出来ない入力やプログラミングが出来る小林の姿をまねた二重ドッベルゲンガーの影たちは貴重な戦力であり、多少の手際の悪さはその数で補えた。

それに、ここにいるのはそんな小林のコピー軍団だけではなく、本物の小林や滝谷もいるのだ。

小林軍団に比較的簡単な作業を任せ、小林や滝谷は彼女らのフォロー、監督をしつつ、彼女らに任せるには少々難しいと思われる作業は自分たちでやることで、作業効率は飛躍的に上昇した。

見る見るうちに仕事の山が片付いていく。

これならば、ほどなくして小林が一日休む分の作業は終わらせることができそうだった。

そばでエルマが、「私、これ憶えるの、けっこう頑張ったのにな……」、と何の勉強もなしに作業が出来る二重の影ドッベルゲンガーらの様子にシヨックを受け、虚ろな表情を浮かべていたが、そちらに関しては完全に無視した。



「お疲れ様、カンナちゃん」

授業参観も無事終わり、学校からの帰り道、ガードレールで車道と仕切られた一メートルほどの歩道を歩く二人。

小林の腕に抱きつくカンナは、にこにこその顔に笑みを浮かべている。

「コバヤシ、来てくれてありがとう。お仕事、大丈夫だった？」

「なあに、これくらい、なんてことないよ」

そう言つて、小林はカンナの頭を撫でてやる。

カンナは嬉しそうに目を細めた。

この笑顔が見れたのだから、無理した甲斐はある。

なあに、大したことは無い。

今日の授業参観におけるお母さんへの感謝の気持ちという作文の朗読で、飲酒した時の事やメイド好きな事をばらされたのも、些末な事だ。

どうせほとんど会うこともない他人ばかりだから、気にすることも無い。

小林は胸の内に残る多少のわだかまりを、大人の諦観で飲み込んだ。

「ただいまー」

「ただいま、ツール様」

帰宅の挨拶をして、マンションの扉を開ける小林とカンナ。

彼女らを出迎えたのは、トールの笑顔。

「「「おかえりなさい、小林さん」」」
耳に響く多重音声。

玄関を開けた二人の目に飛び込んできたもの、それは五人のトールの笑顔であった。

呆氣にとられる小林。
すると――。

「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「おかえりなさい」、「小林さん」、「小林さん」、「小林さん」、「小林さん」、「小林さん」、「小林さん」

玄関付近にいたトールらの声を聞きつけたのか、リビングの方からさらに何人ものトールたちが顔をのぞかせ、一斉に出迎えの挨拶をした。

まるで洞窟内で無限に反響する音のように、寸分たがわぬ高さと音量の声が幾重にも小林の耳に突き刺さる。

「ちよ、ちよつと待つてー！」

小林は耳を抑え、トールの人ごみを掻き分け、リビングへと足を進める。

そこでソファアに腰かけていた、この事態の元凶、アインズへと声をかけた。

「いや、アインズさん！ なに、この状況ー！」

「ふふふ。なに、昨日の件でふと考えてな」

そう言うと、アインズは格好良くローブの裾を払った。周囲のトールらにぶつからないようコンパクトな動きで。

さすがは元社会人、周りへの気遣いもばっちりである。

「ドツベルゲンガー二重の影を使った人員の増員。これで小林家の家事一般をこなす

トールを量産してやればいいと思ってな」

そう、金を稼げないなら小林家の役に立つことで、自らの存在価値を生み出そうという計画。

アインズはまだそれを継続していたのだ。

たしかに、昨日の突貫作業においては二重の影ドッベルゲンガーのコピーは役に立った。

だが、アレは所詮一回のみの単発作業である。この後のち、同じような事態はそうそう起こるまい。

そこで、恒常的に役に立つ行為、二重ドッベルゲンガーの影によって小林家のメイドであるトールのコピーを大量に作り出すことで、小林家の日常生活の向上に寄与しようという目論みであった。

「見るがいい。この大量のトールを！ これだけのトールがいれば、いかなる家事も瞬く間に終わるだろう」

堂々たる態度で宣言するアインズ。

だが、それに対して、小林は呆れ顔であった。

「いや、うちマンションの一室なのに、こんなにしてもしょうがないっての」

第5話 小林さんちのオーバードラゴン

「ただいまー」

ようやくと一日の労苦が終わったとばかりに、ネクタイを緩めながらリビングへと足を進めた小林を待っていたのは、トールの笑顔と抱きついてくるカンナの姿。

今日も一仕事終えて家に帰りついた小林を迎える、いつもと変わらぬ暖かな、そしてちよつとにぎやかな日常。

だが、そこで小林はおや？ と思った。

きよろきよろと辺りを見回す。

そんな彼女の様子に、怪訝そうな表情で小首をかしげるトール。

「どうしたんですか？ 小林さん」

「いや、ちよつと——」

もう一度ぐるり周囲を見渡すのだが——つい最近、この家に加わった新たな同居人の姿が見えない。

「——あれ？ アインズさんは？」

「ああ、アインズさんなら——」

トールは愛する小林の疑問に答えられるということに、満面の笑顔を浮かべて答えた。

「アインズさんならファフニールさんに呼ばれて行きましたよ」

「ファフニールさんに？」



「ただいまー」

言いつつ、滝谷は片足立ちになって、履いていた革靴を片方ずつ脱ぐ

そうして置き場所がなく、廊下にまで並べられた各種グッズ類によって健康番組で図示されるコレステロールのたまった血管のよう

に狭くなった廊下を、これまた健康番組の解説でそんな血管の中をつまるものかと必死で進む血液のように半身の状態が進む。

玄関から続く通路も凄かったがリビングはさらに凄い。

およそ部屋の半分近くは、彼が社会人生活を始めて以降のこれまでに集めた集めた様々な本、ゲーム、フィギュア等々によって埋め尽くされていた。

壁際にはまるでジエンガか、だるま落としかとても言うかのごとくに各種グッズの箱が積み重ねられており、それらが崩れぬようフィギュアを飾ったスチールラックががちりと脇を支えるように並べられている。

およそ人の身長をはるかに越えて室内を睥睨するのは、いったい総数にしてどれだけの数があるのか数える気もなくすほど、幾多の本がしまい込まれた本棚。

その隙間からかろうじて見える壁面部、及びそれだけではスペースが足らぬと言わんばかりに天井にまで所狭しとポスターやタペストリーが張られており、そこにはフリルのついた服を身につけた魔法少女があどけない笑顔を、なぜか女性となっている世界的に有名な王様が凛々しい笑みを、そしてどう見ても18歳未満にしか見えない18歳以上の少女が淫靡な微笑みを向けていた。

その部屋の中を見た者は老若男女、ことごとくにして、こう思うだろう。

ああ、オタクの部屋だな、と。

思わず汚部屋と勘違いしてしまいそうだが、そのような部屋に特有の食べ残しなどは放置されてはおらず、また衣類なども丁寧にしまわれているため、そこに不潔さ、不衛生さは感じられない。あたかも、かつて香港にあったと聞く九龍城を思わせるかのような不思議な雑然さと混沌さを有している、そんな部屋の片隅。

キャスター付きの椅子に腰かけているのは黒いモーニングに身を包んだ若い男性である。

「フン」

長く垂らした黒髪の間から覗く伶俐な目を一瞬だけ帰って来た家主——滝谷の方へと向けると一つ鼻を鳴らし、再び目の前のモニターへと視線をもどした。

常識的に考えれば失礼極まりない行為であり、普通の人間ならば気を悪くするところであったが、そんな態度を取られた滝谷はというと、特に気にすることもなく笑みを浮かべた。

この一見、極一部の人間に人気の出そうな鬼畜系執事を連想させる黒づくめの男。

彼は人間ではない。
トールらと同様に、この世界にやって来たドラゴン、ファフニールである。

彼は小林の家で行われたパーティーにトールの招待で招かれた際、そこでやったゲームにはまってしまった。

そして、この世界に住みつくことを決め、いささかなる紆余曲折の末、こうして滝谷の家に居候するに至ったのである。

身に着けていたスーツやワイシャツを脱ぎ、それをしわにならぬよう壁際のハンガーにかけながら、なにげなく部屋の中を見回した滝谷。

そこでようやく彼は、室内に思わぬ客人がいることに気がついた。

「おや、アインズ殿。来ていたでヤンスか？」

外向きであるさわやかサラリーマンの擬態を捨て去り、丸メガネをかけたオタクというプライベートモードに移行した滝谷は、いつものヤンス口調で話しかけた。

彼の視線の先にいたのは漆黒のアカデミックガウンを身に纏った骸骨。

つい最近、彼の同僚にして友人である小林の家に住み着いたアンデッド、アインズの姿であった。

アインズはその白い骨の指先でコントローラーを操作する手を緩めることなく、華麗に敵を撃破しながら、堂々たる口調と仕草で言い放った。

「うむ、邪魔しているぞ。滝谷よ」

「しかし、アインズ殿。いったいどうして、小生の家に？」

答えたのは問われたアインズではなく、ゲーム画面から目も離さぬファフニールだった。

「俺が呼んだ。あのボスはソロでは倒しきれんからな」

「ああ、あれでヤンスか。あれはC○○○P用のボスだから、ソロ討伐はまず無理でヤンスからね。昔は特定の武器をリロード中に武器変更することで攻撃力が爆発的に上昇するっていうバグ技を使えば、ソロでも何とかなつたんでヤンスが、もう調整されてしまったでヤンス」

言いつつ、アインズの前にあるモニターを覗き込んだ滝谷。そして彼は思わず「ほう」と声をあげた。

アインズの操作するキャラは、すでにかなりのレベルに達していたからである。

それもそのはず、アインズは今日丸一日、ゲームをやり続けていたのだ。

今朝の事であるが、小林とカンナがそれぞれ出勤および登校した頃合いのこと、小林家に一本の電話があった。

ツールが出ると、なんとそれは滝谷の家に住み着いていたファフニールからであった。

いったいどうしてあんな人付き合いの悪い彼がわざわざ電話をかけてきたのかと不審に思うツール。しかも、ファフニールのご指名は自分ではなくアインズである。そして、彼に呼ばれるまま滝谷の家にやって来たアインズが言われたのは、協力プレイするからゲームのキャラのレベルをあげろという唐突な言葉であった。

そして、アインズはその後、一切の休憩なしで、ひたすらレベリングを行っていたのである。

滝谷が見ている間にも、相手の防御力をごく短時間のみ弱体化させる弾を数発打ち込み、状態異常になったと見るや、素早く武器を持ち変え本命の武器を連射し、大ダメージを与えていく。

「お見事！　しかし、アインズ殿、なかなかゲームも上手でヤンスね」「ああ、最初は少し戸惑ったが、こういったレトロゲームも悪くない」「おや？　アインズ殿は剣と魔法のファンタジー世界から来たんじゃないんでヤンスか？　こういったゲームもそちらにあったので？」

滝谷の口について出た疑問に、一瞬アインズは何と答えるべきかと躊躇した。

アインズも元々は普通の人間であり、ゲーム中の自分のキャラとなって異世界に行ってしまったということを正直に言ってしまうべきだろうか？

迷った末に、アインズはそこはぼかすことにした。

「……いや、私はここ以外にも異世界に行ったことがあってな。今からだいたい100年後の日本で、ゲームをやったこともある」

「ほう、100年後？　いったい、その頃のゲームとはどんなものだったんでヤンスか？」

「ああ、こういったモニターを眺めながら、コントローラーを握るタイプはごく一部のレトロ趣味の者だけがやるもので、その頃、主流だったのはニューロン・ナノ・インターフェースを使ったものだったな。まあ、簡単に言くと、首筋に埋め込んだジャックにコードを差し込み、いわゆる電脳世界でプレイするタイプだ」

その言葉に、滝谷は興奮して叫んだ。

「おおお、キターーっ?!　全人類の夢、VR—MMOの時代でヤンスね！」

「……いや、その頃はまだDMMO。電脳世界に入ることとは出来るが、完全にそこが現実世界であるかのように再現することはまだ出来なかったな。キャラクターは動かせるんだが、顔の表情とかも動かせな

いんで、他の人との会話では顔アイコンを出したりしていたし、NPCとかもあらかじめ組み込まれた特定行動などしか出来なかった。それに嗅覚や触覚を再現するのは法律で禁止されていたからな。現実に戻ってこなくなる恐れがあるからと言って」

アインズの説明に落ち着きを取り戻した滝谷。

「そうなんでヤンスか。いつの世もままならないもんでヤンスね」

長々と話し続けるアインズと滝谷に、ファフニールはその深紅の瞳をちらりと向けた。

「アインズ、無駄話はそのくらいにしろ。もうレベルは十分だろうか、そろそろ奴を倒しに行くぞ。滝谷、お前も入れ」

その言葉に「分かったでヤンス」とこたえ、滝谷もゲームを起動する。

(今の台詞がナザリツクの者達の耳に入ったら、大騒ぎになるだろうな)

そんなことを考えつつ、アインズは視線をモニターへと戻した。



そうして、三人の戦いが始まった。

四人までの協力プレイが可能なゲームにおけるCo-op前提ボス。

その巨大な体躯から繰り出される攻撃は、どうやって避けるんだと叫びたくなるほどであり、またそのHPは絶望的なまでに高く、更にはときおり姿を隠して攻撃不能状態にまでなる。

たった一人では絶対に倒すことなど出来はしないであろう難敵。

だが、今の彼らには仲間がいる。

一人が倒れば一人が助け、助けた者が倒ればまた別の者が助ける。

彼らは一致団結して、強大なる敵に立ち向かった。

そして、戦いはいつ果てるともなく続いた。

だが、終わりはやって来た。

気が遠くなるほどの攻防の果てに、ついにボスのHPが尽きる。

身を震わせ、地に倒れるボスの身体から、大量のレアアイテムが放出される。

共に艱難辛苦を乗り越え、強敵を打ち倒した彼らは歓声をあげた。



「ところでどうでヤンスか、アインズ殿？」

携帯ゲームの画面に目を落としながら、滝谷が問いかける。

「むっ？ どうとは？」

アインズはパラパラと漫画をめくっていた手を止めて問い返した。

戦いが終わり、彼らは小休止をして、夕食をとることにした。

今日の食事は、夕刻すぎのタイムセールで30%引きだったお刺身盛り合わせを、どんぶりによそったご飯の上に並べた海鮮丼である。

当然ながら、アインズが家にいる事を知らなかったため、滝谷は二人分しか買ってこなかったのであるが、もとよりアインズは飲食不要の身である。二人が食事している間、部屋にある漫画を読んで時間を潰していた。

ちなみに今、ファフニールは食後のゲーム勝負に敗れたため、台所で洗いものをしている。

そんな男子大学生の夜のごとき、まったくとした空気の中、滝谷は言葉を重ねた。

「アインズ殿は異世界からこの世界に来たそうですが、元の世界が恋しくはないでヤンスか？」

滝谷の言葉に、アインズは少し遠い目をした。

「ああ、恋しいな。もちろん帰れるならば、すぐにでも帰りたいとも。向こうには大切な……家族を残しているからな」

アインズの脳裏に浮かんでくるのは、恋しくも懐かしいナザリックのNPCたち。

一瞬、また守護者たちが自分を見透かし、陰口をたたいているのはというあの疑念が浮かんできたが、慌てて頭を振って、その妄想を追い払う。

「それでヤンスか。まあ、ルコア殿が調べているので、そちらはいずれ何とかなると思うでヤンスよ。それより、この世界はどうでヤンス？」

「ふむ……」

アインズはこの世界——いや、この時代の事を考える。

「まあ、なかなか悪くはないな」

100年後、鈴木悟がいた時代の日常と比べてみる。

様々な電気機器などは、やはり古めかしいものしかないが、自然は豊かで、マスクをせずに呼吸をしても命の心配はない。会社に所属している一般庶民も生活に余裕があり、にこやかな笑顔と共に家族仲良く暮らしている。

悪くはないどころではない。

ごく一部の特権階級以外の人間は社会における使い捨ての構成要員でしかなかった、あの時代から比べれば、一般庶民にとってはまさに天国だ。

本当にこの世界がたった100年ほどであんな世界に変わってしまったのかと、信じられない思いだった。

「それは良かった。それでは小林殿の家はどうでヤンス？ 何か困ったこととかは？」

「いや、特にないな」

「小林殿とは上手くいつているでヤンスか？」

「ああ、問題はない」

「カンナちゃんはどうでヤンスか？ 竜ドラゴンでも子供だから、わがままとか言っていないでヤンス？」

「いや、カンナはああ見えて、色々わかまと弁えているようだな。時折わがままを言う事もあるが、それは親しい相手にのみだ。構ってほしいという意思表示なのだろう」

「そうでヤンスか。では、トール殿とはどうでヤンス？」

その問いにアインズは、わずかに言いよんだ。

「……そうだな。彼女はあの家のメイドだ。家の管理をする者としてよくやっているのではないか」

そんなアインズの逡巡を見て取り、滝谷は丸メガネの位置を直した。

滝谷がこんな質問をしたのには訳がある。

今日の就業中のこと。

彼はプログラムを組みつつ、隣の席で同じように作業をしていた小林に世間話がてら、聞いてみた。

『新しく家に住むことになったアインズさんはどう？ 上手くやれる？』と。

その問いに対して、小林はアインズが特段問題を起こすこともなく、日々を過ごしている事を話して聞かせた。

だが、そうしてあれこれ話しているうちに、彼女の顔がわずかだが曇った。

不審に思い、滝谷が詳しく聞いてみると、どうやら小林はある事が気になっているらしい。

その気になっている事というのは——トールとアインズの間で会話がほとんど無いという事だった。

別に2人の仲が険悪という訳ではない。

2人とも、必要があれば話もするし、お互い態度も物言いも穏やかだ。

しかし、あくまでそれは必要があれば。

そうでない場合は、近くにいってもまったくと言っていいほど会話が
ないのである。

当初、アインズは小林らに対して遠慮するような、それこそ一線を引いているようなところがあったのだが、この前一緒に外出して以降はそんな空気もなくなり、小林やカンナとは普通に会話している。

だが、小林の見ている限り、どういう訳だかトールとはいまいち話が弾まないのだ。

そして、トールもまた小林やカンナと話すようには、いや、滝谷を始めたとした他の者と比較しても、アインズとは壁を作って接している。

それが、今の小林にとって目下の悩みであった。



アインズとトールの間の壁。

それは互いにどう接していいか、判断しきれない所にあった。

トールにとって、最も重要なのは当然、小林である。

彼女にメイドとして仕えることが、今の彼女の最大の関心事であり、それ以外の全てはその他と判断されていた。

そして、小林の次に気にかけているのはカンナである。カンナは同族でありドラゴンとして、またこの世界で暮らす先輩として、色々と指導すべき対象として認識していた。

すなわち、トールにとっての重要度は一番が小林。

次が同種であるドラゴン——カンナ、ルコア、ファフニールら。

そして、その下にこの世界に住むその他大勢の人間たちが来る。

さて、そんな彼女にとってアインズは？

先ず、アインズはアンデッドであり、同種のドラゴンではない。

そこに同族意識などはない。

そして、アインズは元々人間、それも日本に住んでおり、いささか心もとないながらも、ある程度はこの時代の知識を保有しており、それなりの常識をわきまえている。

そのため、とくにトールがあれこれとこの世界の事を教える必要もなかった。

滝谷のように小林に近づく異性であるのなら、彼女も警戒するのだが、アインズは一応男性であるとはいえ、人間ではないため、警戒すべき対象でもない。

そしてその上で、アインズの戦闘能力は無視できない、決して侮れないものであることは、ドラゴンとしての直感で察せられていた。

逆にアインズから見たトールはというと、これまた実に接しにくい相手であった。

家主である、小林とはあれこれと話すことはある。

アインズはこの時代について、それなりの知識を有しているとはいえ、それは完ぺきではない。むしろ、知らない事の方が多い。

そんなとき、この時代に生きる人間で、且つ常識人の小林は頼りになる相談相手であった。

カンナの方はというと、彼女はドラゴンの子供であり、子供特有の遠慮のなさでアインズにも積極的に話しかけてくる。その為、あれこれと話す機会も多くあった。

しかし、トールはというと一味違った対応を余儀なくされた。

アインズとトール、どちらもそれなりにこの世界の知識は持っているものの、万全という程でもない。どちらも微妙に常識はずれなところがある。彼女にアインズが知らないこの時代の事を聞いても、見

当はずれの事を教えられることが多かった。

また、トールはメイドであり、小林家の家事一般を受け持っている。その為、通常であれば、小林家に厄介になっっている関係上、彼女の世話になることも多いはずであり、その際にやり取りをすることで仲を良くすることも出来るはずだった。

だが、アインズはアンデッドである。

飲食は不要で、睡眠も不要。更には魔法で身に着けている服を綺麗にできるときいている。

すなわち、メイドであるトールの世話になることもほとんど無いのである。

そしてアインズとしても、あちらの世界で出会った即死魔法一発で死んだフロスト・ドラゴン達とは異なる、本当の強さをもったドラゴンであるトールに対しては警戒の念を持って接さざるをえなかった。

それらの理由により、互いに強者であると認識したうえで、一緒に暮らしてはいても接点となるものがなく、結果、二人は微妙な距離感のままであった。

とりあえずは互いに紳士的にふるまっているため、それなりに当たり障りなく相手をしているという、消極的な対応に終始していた。



「ふうむ、どうしたもんかなあ?」

滝谷は眼鏡を外し、目頭を押さえた。

「どうした? また、作っているゲームの動作がうまくいかんのか?」
その声を聞きつけたファフニールは、部屋を挟んで反対側に置かれた机、その上に据え付けられたパソコンでネットゲをやりつつ振り向くことなく、声をかけた。

「いや、違うよ」

「フン」

ファフニールは鼻を鳴らす。

「ならば、トールとアインズの事か？」

一見、他人の事に興味がない体をとっているファフニールがそんな事を言いだしたことに、滝谷はわずかに目を丸くし、そして口元にわずかな笑みを浮かべた。

「うん、そう」

「なぜ、そんなことに首を突っ込む必要がある。赤の他人、それもドラゴンとアンデッドの交友関係を、ただの人間のお前が気にすることもあるまい」

「種族は違っていても、僕達はそれなりに良いコミュニティを作っているからね。そのコミュニティの安定を望むのはおかしなことかな？」

「だが、あいつらは別に敵対し合っているわけでもない。ただ、あの二人の間でだけ、話が弾まないだけだ。他の奴らを介してならば、それなりに話はしているのだろうか？」

「そういう意味では、今のところは大丈夫だね。でも、今が大丈夫だから、それでいいと考えて、そしてそのままの状態が長く続いた時、いつの間にか少しずつ歪みが生じてきたり、何かの拍子で一気にひびが入りかねない。ほら、歯だつて違和感を感じる程度だからと放っておいたら、痛くなつて歯医者さんに行った頃には虫歯がひどくなっていることがあるよね？ そんなものだよ」

「ドラゴンは歯が痛くなったら、へし折つて新しい歯を生やす」

「でも、そうなる前に治療しておけば、歯を折る痛みを味わうこともないさ」

「フン……」

しばしの間、ファフニールがキーボードを叩く音が室内に響く。

「何なら、闘わせたらどうだ？」

「え？」

「戦つて、互いの実力を認め合えば、それなりに話も出来るだろう。トールは一度戦つてみて、実力を理解してから、相手の事を認めるよ」

うな奴だ。なら、闘わせてやればいい」

その提案に、滝谷は顎に手を当て、目を閉じ、黙考した。

以前、フアフニールからツールと知り合ったきつかけというのは聞いたことがある。

なんでも、彼が財宝を集めて籠もっていた洞窟に、ツールが一時の住処を求めて入ってきたことから争いになり、そして互いを認め合うようになったのだとか。

顔を突き合わせる度に剣呑な態度を示すエルマとも、実際には互いに認め合うような言動や態度を示しているのも、これまで幾度も戦い合ってきたからだろう。

そう考えると、後に禍根を残さないという条件を付けた上で闘い、互いの実力を認め合うというのも一つの手かもしれない。

だが……、と滝谷は悩む。

「フアフ君……ツールさんとアインズさん、どっちが強いと思う？」

その問いに答えは無かった。

沈黙の中、ドラゴンと比較してどちらが強いという問いは機嫌を損ねてしまったかと考え、滝谷が別の話題を口に出そうとした頃、フアフニールはモニターから目を離さぬまま口を開いた。

「二対一ならば勝つのはツールだ。アインズはアンデッドの魔法使い。如何に強力な魔術を行使できるかは言え、前衛がない状態では、正面切つての戦いで、ツールに勝つことなど出来んだろう」

フアフニールがキーボードを叩く。

彼の眼前のモニター上で、中世騎士風の鎧を身に纏った人物が剣を振り下ろし、騎士の数倍はあろうかという翼の生えた悪魔がうめき声と共に消滅する。

「だが、そう簡単にはいくまい」

「と、言うところ？」

「アインズは何か切り札となるものを持っているようだ。おそらく、強大な力を行使する代わりに、多大なデメリット、なんらかの代償を被らねばならぬようなものをな。魔術の中にもそういったものはよ

くある。魔術を極め、不死の存在となったあいつならば、そういった魔法を習得していてもおかしくはない。見たところ、あいつの胸の中に常にぶら下げているあの宝玉、あれはただならぬ力を有している物であるのは間違いないだろう。ドラゴンとは言え、命はたった一つきりしかない。すなわち、どちらが生き残るか、どちらが死ぬかという真の生存をかけた戦いはただの一度のみ。もし命を懸けての、たった一度の戦いならば、ツールとて危ういかもしれん」

その答え、『命』を懸けた戦いという、現代人には現実として認識しづらいフレイズの前に、滝谷は言葉もなかった。

だから、続いて出たファフニールの言葉に、椅子から滑り落ちるほど驚いた。

「だから、闘わせてみればよからう」

「いや、ちよつと待って！ 今、ドラゴンとは言え命はたった一つきりしかないって、言ったじゃない?！」

叫ぶ滝谷に、フンとまた一つ鼻を鳴らして、ファフニールは言った。「命を懸けた実際の戦いならばそうだろう。ならば、命を懸けた実際の戦いでなければ、問題あるまい」



「では、ゲーム大会を開催するでヤンスよ」

滝谷の宣言。

それに対して、会場である小林家に集まった暇人——もとい、参加者たちからパラパラと拍手が起きた。

正直、拍手をする面々には温度差がある。

まあ、それも当然だ。

突然、何の脈絡もなくゲームの大会を開くと言われても、一体なぜゲームで大会を行うのか、まったく訳が分からない。

まあ、それでも今、小林家には10人前後の人影があった。

会場となった小林家の面々——小林、ツール、カンナ、アインズ。そ

れに滝谷にフアフニール、呼ばれた才川、おすそ分けの料理を持ってきたところに声をかけられた笹木部さんに、おすそ分けのゴリラの置物を持ってきたところに声をかけられた曾根さん、偶々通りがかった商店街でときどき会う近所の奥さんというまとまりのない面子である。

「それでは、第一試合始め！」

滝谷の発する試合開始を告げる声。

それと同時に裂帛の気合の声があがる。一瞬で間合いを詰め、激しい攻防を繰り広げるゲームのキャラクターたち。

他の者達がソフアアで対戦している間、対戦の順番がまだまだ遠いアインズとトールは少し離れたテーブルに腰かけ、その様子を見守っていた。

「これって、何の意味があるんですかねー」

暇を持て余したらしく、トールが声をかけてくる。

「さて？ どうだろうな？ しかし、楽しいのではないかな」

「そうですねか？」

トールは首をひねった。

「実際に拳を交え合うんならともかく、架空の——ゲームのキャラを操って勝敗を競い合うのって、意味があるんですか？」

「それは……ふむ、なんと言うか、すこし難しいな」

アインズは顎を撫でた。

「実際の所、苦勞して強くなっても、調整が入ったとか、続編では仕様が変更されたとかいって、すべて憶え直しになったとかは聞くがな」

そうやって、アインズはモニター上で熾烈な戦いを繰り広げるヨガの達人と筋肉男の戦いを見つめた。

「こうして極めることに価値はないかもしれない。意味は無いのかもしれない。だが、人間は往々にして、意味がない事でもやるものだ。

いや、意味がない事にでも、意味を見出すと言ってもいいかな？」

「それって、自分たちの無能を直視したくないがための詭弁、誤魔化し

ではないですか？」

「それは……完全には否定できないな」

その時、アインズの脳裏をよぎったのは、かつての輝かしい過去、ギルメンたちと過ごしたあの楽しくも、懐かしい日々。

「そこに意味はないのかもしれない。ただの幻想だったかもしれない。そうだな。友人たちとの日々、それは現実に何ももたらさず、ただありもしない幻想の上に積み重ねられた偽りの絆だったかもしれない」

——そうだ。

かつてユグドラシルにおいて第九位にまで登りつめたギルド『アインズ・ウール・ゴウン』。

だが、そんな栄光と共にあったギルドであるが、その最終日、モモングの呼びかけに応じてログインしてきたのは、モモンガを除いた40人中わずかに3人のみだった。

彼らからすれば、『アインズ・ウール・ゴウン』はただのゲーム内でのこと、がんじがらめに管理された、息苦しいリアルからちよつと離れた遊び、息抜きでしかなかったかもしれない。

だが——。

「だが、たとえ誰かにとって意味がなくなるとも、別の誰かには意味があればそれでいいのではないか。いくらゲームに熱中しても、後には何も残らない。だが、それによつて生じたきつかけ。それが、どこかの誰かにとつて、なにがしかの影響を与えうるものになればそれでいい。そこには、きつと意味が生まれるのだろう」

正直、途中から今、やっているゲーム大会についてではなく、昔、皆でユグドラシルに熱中していたころの事を思い返しての言葉だったのだが、それを聞いたツールは何やら思案気な表情をしていた。

「では、次はツール殿とアインズ殿でヤンス。さて、御二方、準備はいいでヤンスか？」

頷くアインズ。

コントローラーの感触を確かめつつ、そつと対戦相手の顔を窺った。

そこにあつたのはトールの笑顔であつた。

「負けませんよ、アインズさん！」

「ああ、こちらとしても、だ」

そして、『ROUND 1 FIGHT!』、と電子音声が響いた。



繰り広げられる電子の代理戦争。

幾多の戦いの果て、淘汰されていく戦士たち。

そして、その頂点に立ったのは――。

「ん」

無表情のまま、両手を掲げて勝利のポーズをとるのは、滝谷から連絡を受けた際、たまたま商店街で話していて、そのまま流れで参加することになった近所の奥さんであつた。



「結構、皆ゲームとかやってたんだねえ」

しみじみといいつつ、テーブルの上に置かれた笹木部さんのおすそ分け、ベーコン入りポテトサラダをつまみに、ビールをちびちびと口にする小林。

景品である曾根さん提供の新作、猿拳のポーズをとるゴリラの置物を小脇に抱え、優勝した小森の奥さんは帰っていった。

その他の面々もすでに解散している。

そうして小林は視線を、ソファの方へと向けた。
そこでは――。

「勝った―」

「え？　なんで?!」

ゲームで対戦しているのはカンナとトール。

バンザイと両手を高々と上げるカンナに対して、トールは驚愕に
目を見開き、その身を震わせていた。

すでに半分涙目である。

大会においてトールはぶつちぎり最下位であった。

当然である。

トールは普段ゲームなどはしない。

対して彼女以外の者達は、程度の差こそあれ、全員ゲームの経験者
であった。

ゲームをしたことがない者がいきなり経験者たちに勝てるはずも
ない。

たとえば、それがドラゴンであろうとも。

その悔しさから、皆が帰った後もこうしてカンナ相手に対戦してい
るのであるが、そこでも連敗をつづけていた。

「いや、ちよつと待ってください！　なんで今、投げられたんですか？

こっちの飛び蹴りが当たってましたよ?!」

トールの叫びに、カンナを挟んで向こうに座っていたアインズが説
明してやる。

「ああ、今のは『くらい投げ』と言われる戦法だ。攻撃をガードした時
より、攻撃を受けたときの方が速く動けるようになる。それを利用し
て、打点の高いジャンプ攻撃をガードせずにあえてくらって、相手が
着地したところを投げるというやり方だ。もちろんいつでもできる
わけではなくて、気をつけないと普通にジャンプからのコンボを繋げ
られてしまう可能性もあるから、注意が必要になる」

「ぬ、ぬう……。もう一回、もう一回勝負です！」

「じゃあ、今度は私が相手をしよう」

カンナからコントローラーを借りたアインズが、モニターに向き合う。

そして試合開始を告げる声が響いた。

その様子を眺め、小林は表情を和らげる。

滝谷からゲーム大会をすると突然言われた時は、いったいどういふ事だろうと疑問に思ったのだが、こうしてゲームを媒介として、今までごくしゃくしていたツールとアインズが話をするようになった。

ゲーム自体には意味がないかもしれない。だが、それをきつかけとして何かが始まったのなら、きつとそれはいいことなのだろう。

ちらりと壁にかけられた時計を見上げる。

すでに時計の針は六時を指していた。

小林は椅子から立ち上がり、台所へと移動する。

料理は普段、トールの仕事だが今、彼女はゲームに集中している。

たまには、代わりに作るのも悪くない。

「コバヤシ、料理するの？」

エプロンを胸にかけた小林を見たカンナが、てとてととこちらにやって来た。

「うん、カンナちゃん、手伝ってくれる？」

「やる。私、手伝う」

手をあげて言ったカンナにエプロンを渡し、格闘ゲームの攻防に一喜一憂するトールの叫び声を背に、何を作ろうかなと小林は冷蔵庫を開いた。



「まだ、やってるんでヤンスか？」

滝谷は自宅へ帰ってきてから、休むことなくひたすら格闘ゲームをやり続けているファフニールの背に、声をかけた。

「ドラゴンが人間ごときに後れを取るとは……」

ぎりりと音が聞こえるほど歯ぎしりするファフニール。

今回の目的はツールとアインズの話すきっかけを作るという事だったのであるが、それはそれとしてゲームで負けた事がよっぽど悔しかったらしい。

「では、小生は寝させてもらうでヤンス。お休み、ファフ君」

そう言うと、耳栓をして滝谷は布団に横になった。

滝谷の部屋では、コントローラーの操作音がいつまでも響いていた。

第6話 飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (前編)

一歩踏み出すたびに、足が乾いた土の中にめり込み、掻きだされる形となった土が斜面を滑り落ちていく。そんな脆い足場の急勾配を、疲労のないアンデッドの肉体を活かし、彼は休むことなく登っていく。

ほどなくして、彼は頂きにたどり着いた。

その高地の際まで歩み寄る。

すると踏みしめられた地面にひび割れが生じた。

それを見て取り、彼は数歩後ずさる。重力に耐え兼ねた崖の端が周囲を巻き込むように崩れ落ち、幾度か岩壁にぶつかりながら、はるか脚下へと落ちていった。

その崩落の様を何気なく眺めていたアインズは、その視線をはるか彼方へと向けた。

そこに広がるのは起伏に満ちた、赤茶けた色の大地。

ただひたすらまつたいらな平地が広がったかと思うと、不意に断崖絶壁によってその行く手を阻まれる。およそ数キロから数十キロ、あるいはそれ以上はあろうかという巨大なクレーターが所々にある大地には、人間の頭ほどから野球場を優に超える大きさのものまで、大小さまざまな岩石が転がり、礫砂漠を形作っている。

視線の届く限り、この地に動物、植物問わず生命の気配はない。

そして、赤い地平線のわずか上には、今、ゆつくりと沈みゆく太陽がある。

およそ46億年もの間、絶えず発生し続ける熱核融合の光と熱を分け与えてくれていたその姿は普段、屋上で日向ぼっこをするときに見る、直視すら躊躇われるような灼熱の塊より、わずかであるが弱々しく見えた。

アインズははるか上空を見上げた。

遮るものもない天空。

日の光がまだあるため、いささか視認しにくいだが、それは確かにそこにあつた。

そのはるか高きに鎮座している、青く輝く惑星。
地球。

アインズが今、踏みしめている、この荒涼たる世界。

およそ現代、21世紀初頭において、生命の確認されている唯一の星である地球をはるか頭上に臨む、ここはどこかというところ——。

——太陽系第4惑星、すなわち火星である。



一体なぜアインズがこんな地球をはるかに離れた地に足を踏み入れたかと言うと、それには深い理由があるのである。

ここ最近のことであるが、アインズの居候する小林家において、さやかどころではない変化があつた。

新たなるドラゴン、イルルが加わつたことである。

当初は人化の術も上手く使えぬまま爪や尻尾が出つばなしであったり、また現代社会の常識にもとんと疎かつた彼女であつたが、他のドラゴンや周辺の人間たちとの関わりを通じ、段々と人間の世界にもなじんでいった。

だが、それは同時にアインズの地位を脅かすものであつた。

小林家における、それぞれのポジションはと言うと——。

大黒柱にして家主たる小林。

家事一般を取り仕切るメイドであるツール。

扶養家族のカンナ。

そして、ペットのアインズである。

各々、家庭内での自分の役割を果たす中で、アインズもまた癒し系ペットとして、日々の仕事に疲れる小林に癒しと安らぎを与えていた。小林の風呂上がりクリエイト・グレート・アイテムに〈上位道具創造〉で作ったマツサージ・チエアなどは大変、好評を得ていた。

そうして小林家は一種の安定した関係を築いていたのである。

だが、そこに加わったイルルという存在。

当初は小林の家で何をするでもなく日々を過ごしていたのであるが、トールからの叱責をきっかけに自分のやるべきことを探した結果、年で体のきつくなつたおばあさんに代わって駄菓子屋の店員をするというジョブを得るに至つたのである。

これに焦つたのはアインズであつた。

これまでは同じ無職仲間であっても、各種魔法で小林の役に立っている自分の方が立場が上であるという自負があつたのだ。

だが、ここにきてイルルが働いて賃金を稼ぐようになってしまった。

つまり、新参のはずのイルルが一足飛びに、小林と並んで、一家に資金をもたらす存在になつたのである。

小林家において、トールは自身で金を稼ぐ事はないとはいえ、彼女は家の中の全てを取り仕切っている。カンナは、特に仕事もしていないのだが、子供である彼女と張り合うのは大人として間違つていると言わざるを得ない、ということは一アインズとて容易に分かる。

「自分より大丈夫じゃない人間を見て、自分はまだ大丈夫と思うのは、実は全然大丈夫じゃない」というのは、とある漫画の台詞であつたが、それはまさに、とりたてて何もしていないイルルを見て、安心していたアインズそのものにぴたりとくる台詞であつた。

とにかく、アインズは慌てに慌てた。

なんとかかして、自分も金を稼がねばと、特に意味もない対抗心に囚われてしまっていた。

そんなとき、点けっぱなしだった居間のテレビが映していた光景。それは火星に送り込まれた探査機が、地球をはるか離れた現地において調査をするイメージ映像であった。

その瞬間、アインズの脳に天啓が走った。

——火星から希少なものを持ち帰れば、それは高く売れるのではないか？

幸いにしてアインズは〈転移門^{ゲート}〉という距離無制限の転移魔法が使える。

これならば、火星にだって行けるはずだ。

しかし懸念もある。

それまでアインズはそんな長距離転移はやったことがなかった。

これまで〈転移門^{ゲート}〉などを使って転移した距離は、せいぜいが数キロ〜数百キロ程度でしかない。

現代世界に来てから、色々と実験はしてみたものの、それでもそのうちで最も長い距離はせいぜいが12,756キロメートル。

つまり、この地球上において直線距離で最も遠い場所——赤道付近において地球の反対側まで行ってみた程度である。

それに比べて、他の惑星である火星に行くというのは、文字通り桁が違う。

十年に一度ほどのもつとも地球に近い場合の最接近時でも、その距離はおよそ54,000,000キロメートルは離れているのだ。これは、およそこれまでアインズが行った事のある地球の直径を移動した場合の4,233倍もの距離だ。

そして、逆に最も離れた場合の距離に至っては、およそ313,000倍。ざっと400,000,000キロメートルにもなる。

いくら設定上、移動できる距離は無限であるとはされていても、そんな気の遠くなるほどの距離——まさに天文学的数字である——を、しかも惑星間の移動など、へ転移門^{ゲート}の魔法で出来るというのであろうか？

出来たのである。

試しにやってみたら、実にあっさりと成功した。

拍子抜けするほどであった。

今、世界中で目も眩むほどの予算をかけて火星を目指している研究者たちが知ったら、泡を吹いて卒倒しそうな話であるが、とにかくそうしてアインズは、さっくり火星の土を踏んだのである。



見渡す限りの赤い大地を眺めるアインズ。

その光景は圧巻としか言いようがない。

この壮大なパノラマをカメラ越しではなく、生で眺めるのはおよそ地球の人類として、アインズが初めてであろう。

そんな人類初の偉業を達成し、かくも偉大な大宇宙の作りし造形、そしておよそ人類の想像しうる限度を超えた絶景を前にして、アインズはつぶやいた。

「飽きたなあ……」

火星に来てから早や数時間。

アインズはあちらこちらを見て回った。

だが、当然であるが、何もないのである。

行けども行けども、ひたすら同じ光景が続いているだけなのである。

まだ地球の砂漠などならば、一見なにもいないように見えても、実

はあちらこちらに隠れ潜んだ生物がいるし、また砂漠のどこかにはちよつとしたオアシスがあったり、砂の中に埋まった古代遺跡などというロマンをかきたてるものもあるだろう。

だが、ここは火星である。

川や池もなければ、草木が生えているわけでも、野生動物がいるわけでもない。ましてや、古代文明の遺跡や、噂となった運河などがあるはずもない。

あるのは、ただ荒涼とした赤い大地に岩が転がる風景と、ときおり吹き荒れる砂嵐程度だ。

地質学者や天文学者ならば、その辺の土や岩にも大喜びしたであろうが、そんな専門知識のないアインズにとってはただの石ころでしかない。

勢い込んで来たものの、とくに見るべきものもない光景に当初のやる気も失せ、なんだか意気消沈してきたアインズ。

なげやりな気分で辺りを見回していると、ふとその視界の端に、なにやら光る物が見えた。

とにかく、暇を飽かしていたアインズは、そこに何かあるかと思つてみることにした。

アインズは〈飛行^{フライ}〉の魔法を使う。

最初は地球の四割程度しかない火星の重力の下、歩いたり飛び跳ねたりするのも楽しかったのであるが、もはやそれも飽きてしまつていた。

そして、アインズは魔法の力によって、先ほどの光が見えたところへ、文字通り飛んでいった。

「ふむ……これは……」

ふわりと着地したアインズの目に前にあったもの。それは奇妙な、虫にも似た機械であった。

およそ軽自動車よりわずかに小さい程度の大きさであったが、昆虫の足のようなその先にはタイヤがついている。そして、平たい身体

向かって左側からぴよこんと生き物の頭部のように金属のパイプの上に取り付けられたカメラ。

火星に来てから、何も面白そうなものがなかったアインズの心境として、砂漠にオアシスを見つけ出したようなものであった。

その銀色のボディを指先でツンツンしてみる。

冷たい金属の感触。

今度は大胆にあちらこちらを触りながら、これならば持ち帰る価値はあるんじゃないか、と考えた。

だが、ふとその脳裏をよぎったものがある。

それはアインズが火星に行こうと思っただけ。

テレビでやっていた火星探査の様子。

たしか、その映像で映し出されていたのが、今、目の前にあるこの不思議なロボットであったような気がする。

——あー……となると、これを持って帰るのは拙いか。

ちよつと……いやかなりの問題になるな。

……仕方ない。諦めるか。

そう結論付けたアインズは、ないはずの後ろ髪を引かれる思いながら、自走型火星探査機キュオリシティのそばを離れた。

再び〈飛行〉の魔法を使い上空へと浮かび上がると、360度辺りを見回す。

だが、その視界の範囲内には、他に何か興味深そうなものなど存在しない。

このまま〈飛行〉で火星中を飛び回るのも面倒だと考えたアインズは、〈アンデッド創造〉でスケリトル・ドラゴンを作り出した。

何も無い虚空が一瞬歪んだかと思うと、そこから戦闘機ほどもある巨大な骨の竜が忽然と姿を現す。

アインズはその背にまたがると、はるか火星の空の向こうへと飛ん

でいった。



ゆつくりと火星の大地に日が沈んでいく。

地球と比べて太陽から遠いうえ、大気も薄く、海もない火星の空気はすでにひりひりする感覚を覚えるほどに冷えきっているが、冷気に対する耐性を持つアインズにとっては全く問題はない。

あれからアインズは、スケリトル・ドラゴンの背に乗り、旅をつづけていた。

すでに小一時間ほど飛び続けているのだが、その間に変わったことといえば、沈みかけた太陽に背を向け飛び続けたため、火星の自転速度よりも早く、宵闇の世界へとたどり着いたくらいである。

はるか上空を飛ぶその眼下に広がるのは、相も変わらず、所々に大小さまざまな岩が転がる大地。あちらこちらでは猛烈な砂嵐が巻き起こり、起伏に富んだ地形を削り、そこを新たな障害物だらけの地へと作り替えている。

行けども行けども代わり映えのしない光景に、いささかうんざりしたアインズは自らが呼び出したスケリトル・ドラゴンの上に寝そべった。

意外と器用に、竜の背骨部分に体を固定し、そこで仰向けに寝転がる。

頭の下で腕を組み、アインズは火星から見える星空を眺めながら、ぼんやり風を切る音だけを聞いていた。

不意に——その骨だけの竜の体が激しく揺らいだ。

突然のことに、すでにはないはずの心臓がビクンと跳ね上がるかと思うほどに驚き、アインズはスケリトル・ドラゴンの上で、その身を起こす。

再度、衝撃。

優雅に火星の空を飛び続けていたスケリトル・ドラゴン。

その身体が大きく傾^{かし}げた。

何が起こったのか、思念で問うより先にアインズの目に飛び込んできたのは、黒く炭化したスケリトル・ドラゴンの骨の翼であった。

その眼前を白い稲妻にも似た光が閃く。

——下！

竜の骨の隙間から脚下を見下ろすと、初めてこの地に足を踏み入れたのはアインズであり、彼以外は誰もいないはずの火星の大地、そこに2つの人影があった。

その姿を視認したと思った瞬間、再び彼らの許より謎の稲妻が飛来し、宙を舞うスケリトル・ドラゴンの身体を捉えた。

その身に受けた多大なダメージにより、肉体を構成することが出来なくなったスケリトル・ドラゴンの身体がぼろぼろと崩れていく。

騎乗していた竜を失ったアインズは「飛行」の魔法を使い、ふわりと大地の上へと降り立つ。

降り注いでは掻き消す様に消えていく、その白い雪のようなスケリトル・ドラゴンの破片が降り注ぐ中、両者は対峙した。

銀色の宇宙服のようなものを身にまとった、その姿。

それを目の当たりにしたアインズは思わずつぶやいた。

「………火星人?!」

第7話 飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (中編)

アインズと、宇宙服らしきものに身を包んだ謎の2人組。

緊迫した空気が両者の間に立ち込める。

互いに一挙手一投足に神経をとがらせつつ、じつとアインズは相手の事を観察する。

8フィートはあるであろう全身を奇妙な衣服でくまなく覆った、その姿。

一見、宇宙服を着た人間——いわゆる地球の人類——かとも思うが、人間ならばそこにあるべき頭部がない。

よくよく見れば、その体型も微妙に人とは異なっている。手足はあるが、人間のように体の下から2本の足がのび、そしてその上にある細長い胴体の上部、左右から腕が生えているのではない。中央に丸い身体が存在し、そこから放射線状に4つの手足が生えている。いうなれば四本足のヒトデが直立したような姿だ。

だが、それはヒトデでない事は明確である。

その奇妙な隊形の身体から生えた腕の先には手と指があり——指のつき方も人と比べて異質ではあるが——さらに、その手にはしつかりと金属製の銃器らしきものが握られていた。

——あの銃がスケリトル・ドラゴンを撃ち落とした稲妻らしきものを発射したのは間違いあるまい。

アインズは警戒の色を強め、体勢を変えぬまま、いつでも動けるようにそれとなく身構える。

そして、警戒しているのは向こうも同じであるようであった。

ほのかな光を放つ銃口をアインズに向けたまま、近づくでもなく遠ざかるでもなく、距離を保っていた。

「あー、こちらの言うことは分かるかな？」

このままでは埒が明かぬと、とりあえずアインズは話しかけてみることにした。

先ほど、スケリトル・ドラゴンを撃墜したのは彼らである事は確かだろう。

だが、かと言って、彼らが敵対的な存在であるとまでは断定できない。最初の攻撃は、スケリトル・ドラゴンの異様なまでの外見に怯えたためであるとも考えられるからだ。

あんな姿の生物が——厳密には生物ではなくアンデッドだが——自分たちの方に近づいて来たとして、警戒するなと言う方がおかしい話だ。遠距離攻撃が出来うる手段があるのなら、誰であろうと攻撃するだろう。

そこで、アインズは一旦仕切り直して、交渉を試みることにした。

だが、それに対して、彼らはそのけつたいな印象を与える身体をよじるばかりであった。

逆に彼らの宇宙服につけられた外部スピーカーらしきものから、耳障りな音——まるで発砲スチロールをこすり合わせたような——が聞こえてきた。

だが、当然ながらそんな音だか声だかをアインズが判別することなど出来はしない。

そうして、しばしの間、無益極まりない時間を過ごした後、アインズは両手をあげた。

言葉が通じず、にっちもさっちもいかない状況にお互い焦れ始めた中、敵意がない事を示すためだ。

だが、その姿を見た彼らは大きく身を震わせた。

躊躇なく、その手にある熱戦銃から、まばゆい光が放たれる。

アインズは知る由もなかったが、彼らの祖先はアルファ・ケンタウリの植民惑星に住む原住生物である。

人類で言えば胴体にあたる部分の正面及び背面は固い甲羅で覆われている、その種族本来の生活は、普段は四足歩行で地を歩き、同種の敵と相対した時は、後ろ脚となる二脚で立ち上がり、その手に生え

ている鋭い爪——道具を使うようになった今では、すでに退化してしまっているが——を振り下ろすようにして、立ち上がった時に甲羅の継ぎ目がある上部を狙うのが習慣であった。

今、アインズが行った両手をあげるといふ、地球においては敵意が無い事を示すポーズは、彼らにとつては殺してやるぞとファイティンポーズを取ったのと同様の仕草だったのである。

デラメーター熱線銃から放たれる、その疑似的な雷は狙いたがわず、彼らの目の前にいる白い棒状の物が組み合わされて肉体を形成している、実に不気味な生物へと直撃する。

だが、その攻撃にさらされながらも、アインズは平然としていた。デラメーターは使用前、およそ七秒は前にあらかじめスイツチを入れておくことで銃口0・43インチ、銃身長4・52インチの銃身内においてデミアルゴン粒子が励起状態となる。そして、トリガーが引かれた瞬間、銃身内に溜まっていた粒子が誘導放射され、一方向のみに直進するのだ。

その放たれた粒子の直撃は、照射された時間0・3秒ごとに地球で言うところのTNT火薬に換算して20kgの爆発にも匹敵するほどの威力を持つのだが、あいにくとアインズはへ上位物理無効化Ⅲを持つている。そんな攻撃など彼にダメージを与えるには及ばない。

ちよつとした衝撃は感じたものの、アインズにとっては、スレイプニルに蹴られたのと同程度でしかなかった。

アインズは何とか相手をなだめようと、上げた両の掌をやや倒し気味にして数度上下させ、落ち着けという仕草をした。

しかし、先にも述べた様に、彼らにとつては上方方向からの爪攻撃、それをまねる行為こそが攻撃の意思を示すものである。

アインズがやった指先を曲げ、何度も上下させる行為は明確なまでの挑発行為。

地球の人類で言えば、こぶしを横にし、立てた親指で首をかき切る仕草をするようなものであった。

レーザーの掃射が一段と激しくなる。

さすがにいくら浴びてもダメージを受けることは無いアインズといえど、こちららが友好的な態度を取っている——つもりである——というのに一方的に攻撃をしてくる、この奇妙な異星人らしき存在に、不快なものを覚えはじめていた。

その時、いくらデラメーターで攻撃しても罫らちが明かないと判断した彼らは、その背に背負っていた彼らの背丈の半分ほどはある巨大な筒——プラズマライフルを構えた。

アインズにはそれが何なのかは判別できない。

だがそれでも、その形状から、それはなんらかの重火器であろうという事は想像がついた。

そして、いい加減、こちらの友好表現を無視し、効かぬまでもさんざん攻撃を続ける宇宙人たちにウンザリしてしまっていたアインズである。はつきりとは分からないまでも、いかにもそれまでの手持ちの銃器より、はるかに危険そうな代物の攻撃を、さすがに黙って受けてやる気もなくなっていた。

アインズはおもむろに片手を前へと伸ばすと、馴染みの魔法を唱える。

「グラスブ・ハートへ心臓掌握」

だが、その結果——。

「なにいつ?!」

「——?!」

両者とも驚愕の声をあげた。

アインズは信じられなかった。

彼の唱えた魔法は第九位階魔法グラスブ・ハートへ心臓掌握」。

その効果は、遠距離から対象の心臓を握り潰すことで、相手を即死させるというものである。

今、この魔法の対象となった、目の前の奇妙な宇宙人。

そいつは〈心臓掌握〉を受けても、死ぬことは無かった。

その体が倒れることなく、ゆらゆらと前後左右にその身をふらつかせながらも、突っ立ったままであった。

当然であるが、即死魔法は抵抗されれば効果は発せず、対象が死ぬことは無い。だが〈心臓掌握〉は、仮にその即死効果に抵抗したとしても、対象を朦朧状態にさせるといふ副次効果が発生するため、使い勝手が良い魔法としてユグドラシル時代にアインズが愛用していたものの一つだ。

この魔法を受けたはずの宇宙人の様子から、どうやらそいつは今、〈心臓掌握〉の副次効果である朦朧状態になっていることは分かった。それがアインズには衝撃であった。

かつてナザリックが転移した世界において、アインズの魔法に抵抗できる者など誰一人としていなかった。その地において圧倒的強者であるはずのドラゴン、そのリーダー格の者ですら抵抗出来なかったのである。

すなわち、一瞬の下に命を奪われる結果となり、〈心臓掌握〉の副次効果である『朦朧』など発動することすらなかった。

だが、目の前の宇宙人は『即死』せずに『朦朧』状態になったのである。

それは、およそアインズにとって、ゲーム中のキャラクター『モモング』の姿が現実のものとなって以来、初めての経験であった。

——まさか、こいつは自分の魔法に抵抗できるほどの存在、強者なのか？

彼らの手にしている光線銃らしきものの攻撃では自分に傷一つ加

えることは出来なかったとはいえ、アイنزは想定していた彼らへの警戒レベルを引き上げた。

そして、驚愕に身を震わせていたのはアイنزだけではない。

彼らもまた、突然の異常事態に混乱していた。

彼らが身に着けている船外活動の為の宇宙服。それには各々の体調を把握し、チームで共有する装置、生態モニターが組み込まれている。

それにより、肩を並べていた仲間突然、異常が生じたのが感知されたのだ。

一切、攻撃などは受けていないはずだ。

物理的、光学的、そして磁気、電子的にも何かが射出された様子は観測できず、センサー類にも反応はなかった。

それなのに、目の前の奇怪な生物らしきものが前に出した手——おそらく——を虚空で握りしめるといふ奇妙な動作を行うと同時に、仲間が無力化されたのだ。

実際の所、アイنزの〈^{グラスフ・ハート}心臓掌握〉が即死の効果を発動しなかったのは、彼らのいわゆる血液は血管内にある鞭毛の蠕動^{ぜんどう}によって送られるため、潰されるはずの心臓が存在しなかった為なのであるが、そんな彼らの生態や魔法の効果などの内実は互いに知る由^{よし}もない。

彼は腰に下げていたスタングレネードを投擲する。

一瞬の光と爆音、そして舞い上がる煙の中、いまだふらついている仲間を抱え上げると、光学的偽装により、すぐ後ろに隠していた小型スペースシップのコックピットに身を躍らせた。

微かな大気の振動と共に地表から浮き上がると、小型艇は一瞬で加速し、すぐさま現場から飛び去った。



「敵襲！ 敵襲だ！ 白兵戦用意！」

艦内にスピーカーを通じて大声が響き渡る。

これまで幾多の星を制圧し、数え切れないほどの死闘を潜り抜けてきた蛮勇と残忍を誇りとする宇宙海賊の戦士たち。

そんな恐れを知らぬ彼らの声には今、憤怒だけではない、明確なまでの怯えの色が混じっていた。

警戒の電子音がけたたましく鳴り響く中、ザラヴァーン級航宙戦艦ダーステンの司令室において、この戦闘艦の艦長はがなりたてるような大声で防衛の指示を出しつつも、これは本当に現実の事なのかという思いにとらわれていた。

彼の種族でも特に秀でていると評価されたその理性は、そんな事はあるわけがない、これが現実であり、速やかに適切な対処を取らねばならないと訴えていたが、どうしてもすべては、ほんのわずかの間、執務室でウトウトしてしまっている間に見た悪夢でしかないのではないかとという甘い願望を——現実逃避だと分かっている——振り払えなかった。



事の発端となったのは、本隊であるこの航宙戦艦から先行して惑星表面を探查していた調査隊が、生命などいないと思われていたこの惑星において、実に奇妙な一体の生物と遭遇した事である。

白い棒状の物が複雑に幾重にも組み合わされた、まったく不可思議としか言いようがない、それこそ本当に生物なのか、自動機械の類ではないかと疑ってしまうような奇怪な姿。

そいつはあたかも、最初から彼らの事を知っているかの如く、悠然とした態度でこちらを挑発して見せた。

残忍さと冷酷さを併せ持ちながら、対して寛容さなど持ち合わせて

いない彼らは、その嘲弄に躊躇することなく熱線銃デラメーターの引き金を引いた。

だが、よつぽど堅牢かつ巨大な体躯の生物でもなければ、瞬く間に死に至るであろうその攻撃をその身に浴びながら、そいつは何ら動じる様子も見せず、まるで彼らの無駄な行為を嘲るかの如き態度であった。

そうしていると突然、仲間の1人に異変が生じた。

不意にそいつが前にかざした手を握りしめるといふ奇妙な行動をとったところ、ついさつきまで肉体的、精神的に何ら異常の見られなかった仲間の意識レベルが突然低下し、自律行動不能の状態に陥ったのだ。

そいつからは何一つ攻撃を受けてはいない。

それは確かだ。

銃弾もビームも、果ては投石一つに至るまでそいつは放つことはしなかった。

しかし、理解は出来ないが現実の出来事として仲間が一人、行動不能の状態にされたのだ。

何をされたのかは分からない。

だが、そいつが何かを行ったのは確かであり、それが原因である事は推測できた。

謎の攻撃を行う未確認生物を前に、怯えた先遣隊のメンバーは撤退を決めた。

偏光スクリーンによって隠蔽していた高速艇に乗り込み、即座に母船へと逃げ帰ったのだ。

だが、そこで先遣隊の彼らは失態を演じた。

一直線に母船を目指すのではなく、監視や尾行の可能性を考え、欺瞞行動をすべきであった。

通常であれば敵と遭遇した後は、全く異なる方向を目指す、光学的

及び電磁氣的なチャフを使用する、どこかに艇を止め再び偏光スクリーンを張るなど、入念なまでの追尾対策を行う事が定められていた。

だが、相手は宇宙船はおろか銃器の一つも持たない、惑星間移動を可能とするほどの文明とは切り離されたこの惑星の原住生物と聞き存在であったため、視認による確認および敵の戦闘艇とのドッグファイトの際に使用するよう15フィート以上の移動物体にのみ反応するよう設定されたレーダー——先に撃墜した巨大な翼のある生物が追ってくることを警戒してである——の使用以外、追尾に対する注意を払わなかったのである。

まさか、相手が光学的に姿を消したうえで、先ほどのような巨大飛行生物への乗騎も必要とせずには大気圏内をそのまま飛行できる。ましてや空間上を何の機械装置もなしに転移できるなどとは、考えも及ばなかったのだ。

彼らが自分たちの失態に気付いたのは、母船である宇宙戦艦ダーステンが停泊している場所へと戻り、その中のハンガーデッキに艇が固定され、コックピットから身を乗り出した時である。

小型艇が艦内に滑る様に入り、アームによつて船体が固定されると同時に、ハッチが閉められた。

すぐさま与圧が行われ、整備のクルーが駆け寄ってくる中、彼らに事情を説明しようとコックピットの風防を開け——そして、彼の目はそれを捉えた。

彼らはたった今、それがいた場所から、この高速艇の出せる限り、最大速で逃げ帰ってきたはずである。

それなのに、居並ぶ整備兵たちのすぐ後ろ、デッキの端に、あの白い棒状の物が組み合わされた姿のあいつが佇んでいたのである。

その明らかに常軌を逸した異常な事態に、このダーステンに搭乗す

るクルーの中でも勇猛果敢にして大胆不敵で知られる航空部隊に所属していた彼すらも、思わずその身を慄かせた。

警戒の声を発するはずの口は、ただパクパクと開閉するばかりであった。

そんな彼に向かつて、そいつは人差し指をゆっくりと向ける。

次の瞬間、彼の意識は暗転し、永久に目を覚ますことはなかった。



突然の警告音により、格納デッキにおいて多数のクルーの命が奪われたと知らされた司令室の面々は、いったい何が起きたと、デッキに設置されていた監視カメラによって録画された映像をモニターに映し出した。

その一部始終に、それを見ていた一同は皆、声を失った。

そこに映し出されていたのは、実に奇怪な白い身体のおよそ生物とも思えぬような存在が、その手の指らしきものを向けるたびに、そこにいたクルーらがバタバタと倒れていくという異常ともいえる光景。惨劇の記録映像と共に、各クルーの生体モニターの情報も同時に表示されているのだが、その白い生物が指さした瞬間、生命反応が消え、死亡していく様子がそこにはつきりと映し出されていた。

デッキ内での熱源やエネルギー反応の記録も調べたが、それには一切、異常な数値は見られない。

つまり、いったいどのような法則、因果によるものか彼らをして皆目、見当もつかないのであるが、ともかくあの白い生物に指さされると『死ぬ』のである。

言葉もなく、誰もが呆然とモニターを眺める司令室。

誰かがごくりと息をのんだ音が響く。

そして、次の瞬間、彼らの目がさらに大きく見開かれた。

デッキ内のクルーをすべて殺戮し終えたそいつは、一度辺りをぐるり見回した後、さつとその手を横に払った。

突如、虚空に現れる奇怪な黒い染み。

見つめる者達が、あれはいったいなんだと思う中、それは倒れ伏すクルーの死体の上へと滴り落ちた。

するとどうだろう。

外傷はないとはいえ、生態モニターで見ると分によれば、先ほどまで明確に死亡し、身動き一つしなかったクルーの遺体がビクンとはねたのだ。

質量保存の法則を無視するかのようには、その身体が作業用の薄汚れた宇宙服の中でぶくぶくと膨れ上がり、やがてその銀色の服が内側から弾け飛んだ。

その姿をモニター越しとはいえ目にした彼らは、その身に根付いた根源的な恐怖のままに悲鳴をあげた。

密閉された宇宙服を突き破って、中から現れたのは、まさに暴力という言葉を具現化したような存在。

鋭い棘を生やし、怪しく脈動する赤い光が表面を走る不気味な金属をその身に纏った、7・55フィートはある不気味な巨人。

それが乗員の死体を苗床にして瞬く間に成長し、生み出されたのだ。

更にそれはたった一体にとどまらない。

監視カメラの映像で見る分に、同様の現象が無惨に死体の転がるデッキのあちらこちらで起こっていた。

先と同様、原始的な白兵武器を持った巨人の他に、干からびたような人型や、見ただけで嫌悪さをもよおすような粘液を垂れ流す怪物な

ど、この世の醜怪さを体現したかのごとき悍ましい軍団が瞬く間に出現した。

さらにはそれらより小型の、最初に現れた白い生物にも似た奇妙な姿の生物が大量に、どこからともなくこつ然と現れ、見る見るうちに増殖していく。

やがて、格納デッキにあふれかえったそいつらは、艦内へとなだれ込んだ。

船内のあちらこちらで戦闘が繰り広げられる。

このザラヴァーン級航宙戦艦はいささか旧式とはいえ、大型戦艦である。

およそ、辺境星系をパトロールする巡洋艦を中心とした独立艦隊程度なら一隻で蹴散らせるほどの各種兵装を有するが、それはあくまで艦隊戦での話だ。

艦内に侵入した相手に対しては、船体に装備された21型対艦ミサイルも、上甲板に設置された三連装粒子砲も、命中しさえすればあらゆる艦船を撃破できるQ砲も、そして安藤博士の勘違いの法則を応用した恐るべき威力を誇る超兵器アンドローキヤノンでさえも、なんの役にも立たない。

乗り込んで来た敵兵には、白兵戦をもって対処するより他にない。そこで役に立つのは、デラメーターやプラズマライフルなどの携行式の火機、そして純粋に圧倒的な質量を持つ戦斧などの原始的な武器だ。

そうして艦内で繰り広げられた血みどろの戦い。

実際、その軍団の大部分を構成する、最初に現れたあいつにも似た、白い棒状の物が組み合わされた人型の生物は実に脆く、熱線銃の一閃でもたやすくその身を砕かれた。

だが、そいつらはいくら倒しても次から次へと湧いてくる。仲間が倒されてもその屍を踏み越え、死すらも恐れず襲い掛かる。

やがてそのとどまるところを知らず押し寄せる圧力の前に、艦内の

クルーたちは一人また一人と押しつぶされていった。

そんな中、司令室で艦内の被害状況を調べ、報告していたクルーは、とある事実気がついた。

謎の生物の襲撃により大混乱に陥っている艦内。とにかくありとあらゆるところへ溢れ返り、圧倒的な数の暴力によって、艦内の生きとし生けるものへの殺戮が繰り返されていく中、最初にデッキに現れた一際凶暴な外見をした者達に先導された一団、彼らは他の区画には目もくれず、ただ一直線にとある場所を目指している事に。

彼らが目指しているその先。

それは、この航宙戦艦ダーステンの中枢。

すなわち、この司令室である。

その事実を報告され、皆に驚愕が走った。

いったいどうやって知りえたのかは分からないが、それならば今、彼らがいる司令室めがけて、迷うことなく、わき目もふらず最短ルートで進んでくる。

戦闘員らに迎撃の指示を出しても、今の艦内は白い小型生物の襲撃によって混乱しており、人員を一カ所に集めて防衛線を構築することなど出来ない。進路上にいる者達をかき集めて反撃させるも、その最初の混沌から現れたような不気味な集団は、近代的な熱線銃やビーム砲などものともせず襲い掛かり、次から次へと血祭りにあげていく。そして、彼らに殺されたものは再びその二本の足で立ち上がり、彼らの戦列に加わるのだ。

司令室に通じる通路の隔壁を閉じようとも、最初に現れたあいつが手をかぎすだけで、司令室からの操作しない限り開閉できぬはずなのに、まるで別の上位命令系統があり、そちらの指示を受けているともいえるかのよう事なげに開いた。

突如、艦内に湧いた大波のごとく、進路上のあらゆるものを飲み込みながら、化け物の群れは進撃をつづけた。



「ふむ。順調だな」

アインズはそう独り言ちた。

彼の周囲では突進するアンデッドの足音がけたたましく響く。艦内は火星の表面とは異なり、ちゃんと与圧され大気があるため、普通に音は聞こえ、いささかうるさく感じられるほどだ。

〈アンデッド創造〉や召喚魔法、そしてアインズによって生み出されたアンデッドたちによるさらなる特殊技術や召喚魔法によって増殖したアンデッドの軍勢に囲まれ、アインズは進軍する百足状の骸骨の背にとつかと腰かけて、ご満悦であった。

地上での遭遇戦の後、小型艇に乗って逃げる宇宙人をアインズは追った。

警戒すべきと判断した相手をそのままにしておくアインズではない。

〈透明化^{インビジブル}〉を始めとした偽装の魔法を我が身にかけて、〈飛行^{フライ}〉の魔法で音もなく後を追うアインズに、彼らは気がつくことは無かった。

そして、まんまと母船にたどり着き、誰にも気づかれぬまま、小型艇を收容するために開いた格納デッキへと忍び込んだという訳だ。

そこまでの道のりを魔法で飛びながらも、アインズは考えていた。

何故、先ほど自分が唱えた〈心臓掌握^{グラスフ・ハート}〉の即死が効かなかったのか、ということである。

——アレは、そんなにも強力な存在なのだろうか？

しかし、それにしても自分の〈上位物理無効化Ⅲ〉すら突破できないような攻撃しかしてこなかった。

もしかして、なんらかの特殊な要因で〈心臓掌握^{グラスフ・ハート}〉の即死効果が発

動しなかったただけなのではないだろうか？

その結論に至っていたアインズは、ひとまず『実験』を行ってみることにした。

先に使用した、遠隔から相手の心臓を握りつぶす〈グラスブ・ハート心臓掌握〉とは異なり、純然たる即死効果のみを与える魔法〈デス即死〉を、コックピットから顔をのぞかせた先ほどの者に使ってみたのだ。

これで効けば、ただ単に彼らは〈グラスブ・ハート心臓掌握〉の即死効果のみを無効化する能力を保有しているという事である。

もし効かなければ、即死効果全般に対する耐性を持つ、もしくはアインズの魔法に抵抗するほどの効力な魔法抵抗力を保有する生物という事になる。

そして、結果として〈デス即死〉は効果を発した。

たった一体だけではサンプルにならぬため、その場にいた他の者達にも〈デス即死〉や〈グラスブ・ハート心臓掌握〉、その他の各種即死魔法を使ってみたが、〈グラスブ・ハート心臓掌握〉を使用した場合のみ、『即死』は効果は発さぬまま朦朧状態となり、それ以外に関しては何の問題もなく『即死』効果が作用した。

そうして、ごくわずかの間に、デツキにいた宇宙人たちは皆ことごとくに死に絶えた。

倒れ伏す死体の山を前にして、アインズは自分の魔法が十二分に効力を発した事に、満足そうに頷いた。

どうしてそうなのか原因は分からぬものの、やはり〈グラスブ・ハート心臓掌握〉の『即死』のみが彼らには効力を発しないことが分かった。

そして、さらなる『実験』を行った。

この宇宙人たち——異星人と呼ぶべきかもしれない。少なくとも火星人にはなさそうだ——の死体を使って、自分の特殊技術キルでアンデッドが作れるかというものである。

これも通常と同様、効果を発揮した。

宇宙人の死体を元にしたアンデッドたちであるから、ちよつとだけ姿形や能力が変化した変わり種が生まれなかつたと期待したのだがそんなことはなく、生み出されたのはいつもと全く代わり映えのしない死デス・ナイトの騎士であった。

その事にちよつとだけがあつたものの、アインズは行動を開始することにした。

ぐるり周囲を見回せば、そこにあるのはまばゆく銀色に輝く金属製の通路や壁、何の数値を表しているのかもしれないぬメーターや制御盤、奇妙な文字らしきものが表示されているパネル、様々な機械式のクレーンやアーム、何台も駐機されている小型飛行艇、光り輝く不可思議な機械群。

まさに宇宙船。

まさにSF世界である。

アインズ——鈴木悟の生きたリアル22世紀では、宇宙開発の熱は収まっていた。国家という枠組みはほとんど形骸化しており、国同士の威信をかけた開発競争などすでにない。実際に民衆を支配している企業はと言うと、無駄に、しかも際限なく金のかかる宇宙計画にはどこも二の足を踏んだ。

だが、現実においてはほぼ停止した宇宙開発であるが、電脳空間であるDMMO—RPGの中においては、こういったSF世界での冒険というものは数多くあつた。

古典SFを元にした未知なる世界を旅する開拓もの。宇宙戦艦などが登場する壮大なスペースオペラもの。古くはガンダムなどの系列を組むロボットバトルもの——多くは人型ロボットであつたが、人型のロボットが気に入らない人のために逆関節などの非人間型ロボットものもあつた——など様々な種類のものが取り揃えられてお

り、それらはどれも根強い人気を博していた。

ギルメンたちの中にはそういったSFものの他ゲーに手を出している者達もいた。

アインズ自身はユグドラシル一筋であり、そういったものはプレイしたことは無かった。あまり手を広げ過ぎても仕方がないというのもあったが、せつかくユグドラシルでみんなと知り合えたのに、この関係をいったん清算する形で新しい世界に飛び出して、またユグドラシルの時と同じようなコミュニティを作れる自信がなかったからと言ってしまってもいい。

その為、アインズ——鈴木悟はいわゆる中世ファンタジーに関する知識ばかりを頭に収め、それ以外のもの——SFなど——に関しては門外漢のままであった。

そんなSFになど興味は無く、特段、そっち方面への知識も情熱もないアインズであったのであるが、やはりこうして実際に目の当たりしてみると、自分の目が——死の支配者となった今は、すでに眼球などないが——きらめいているのが分かった。

たとえ知識がなくなるとも、こういった科学技術の塊の前に、文明人は心が躍ってしまうのが性なのであろう。

アインズの胸の内に、ふつつつと湧いてきたものがある。

それは、この宇宙船の船内を探索したいという思いである。

かつてユグドラシル時代に幾度も挑戦してきた未知なるダンジョンの攻略。

この宇宙船の船内はあたかも一個のダンジョンであるかのようにあり、また昔のようにダンジョン攻略を試みたいという欲求が抑えきれなくなっていた。

アインズは一つ頷くと、へアンデッド創造や各種召喚魔法を使用する。

もはや馴染みとなった、いつもの死の騎士や死者の大魔法使いなど

だけではなく、地下聖堂の王や集眼の屍など、高レベルのアンデッドたちまでもがその場に出現する。

さらに生み出されたアンデッドたちの中で、さらなる召喚等が出来る者にはその能力の発することの出来る限りの召喚などをさせることにより、ほんのわずかの間にアインズの周りにはアンデッドの軍勢が出現していた。

そして、更にアインズは仕上げとばかりに、とある魔法を唱えた。

第七位階魔法〈不死の軍勢〉。

その魔法の効果により、虚空からスケルトンなどの低レベルアンデッドたちがわらわらと、それこそ際限なく、次から次へと湧いて出てくる。

「ふふふ。では、始めようか。異星人の操る宇宙船攻略だ」

第8話 飛ぼう、俺たちの宇宙へ！ (後編)

そうして、始まったアインズによる宇宙船攻略。

〈不死の軍勢〉によって召喚されたアンデッドたちは、獲物を求めて艦内のありとあらゆる通路を駆け巡る。

所詮、低レベルのアンデッドたちは、乗組員たちの持つ近代兵器の前に、たやすく打ち倒されるのであるが、なにぶん数が多い。まさにゾンビ映画などで、銃を持った人間が溢れ返る死者の群れに押しつぶされるように、圧倒的な数の暴力の前に飲み込まれていく。

そうして、乗組員を血祭りにした彼らはさらなる生贄を求めて船内を闊歩する。

そうして艦内が大混乱に陥っている中、スケルトンたちの無差別の襲撃とは別に、アインズ率いる高レベルのアンデッドたちは、一路、この宇宙船の中枢部を目指していた。

一行の先頭を行くのは、キラキラと光り輝く妖精と三本足のカラスである。

どちらも迷宮探索に役立つ魔法によって生み出された道案内であるが、敵となる宇宙人側の戦力はあまり大したことはなかったため、せっかく呼び出したにもかかわらず妖精の示す安全なルートの方は選ばれることなく、カラスの方が指し示す最短ルートのみをつき突き進んでいった。

そうして足を進めるアインズらの前で、また音を立てて隔壁が閉まる。

それに対して、アインズは〈開錠^{アンロック}〉の魔法を唱えた。

すると、たつた今閉まったばかりの凹凸のある隔壁が、テープの逆廻しのように開く。

この宇宙戦艦攻略はナザリツクとして利益を求めてのものではない。

そのため、わざわざ貴重な〈七門の粉碎者^{エピソードの粉碎者}〉を使いたくはない。

もし、これで開かないようなら、攻撃魔法で破壊するつもりであったが、幸いにして〈開錠〉^{アンロック}の魔法のみでも特段問題はなかった。しかし、開いたと思ったら、その通路の先にはまた閉じられた隔壁がある。

この大量にある障壁に、いささかウンザリした気分になりつつも、再度〈開錠〉^{アンロック}で隔壁を開いた。

だが、次の瞬間、アインズは思わずその身をすくませた。開いた隔壁のその向こう。

一直線に続く通路のその先には、巨大な大砲が据えられた銃座があり、その砲身がこちらを向いていたからである。

「退避！」

叫ぶが早いか、砲口が火を噴いた。

2門のビーム砲から放たれたエネルギーの奔流がアインズらを襲う。

その内び1本は屍収集家^{コープスコレクター}に、もう1本は後ろに控えていた集眼^{アイボール・コープス}の屍を直撃し、一瞬の下にその醜い肉塊を焼き尽くした。

とつさに死者^{エニエル}の大魔法使い^{グレートリッチ}が銃座めがけて〈火球〉^{ファイヤーボール}を放つたものの、その魔法は銃座を守る様に前面に設置された防盾によって防がれる。

だが、その爆発によって一瞬だが、視界が遮られた。

視線が通らないながらも、めくらめつぼうにビームが連射される。

しかし、その時にはすでにアインズ率いるアンデッド軍団は通路の曲がり角まで後退していた。

顎に手を当ててアインズは考え込む。

「さて、どう攻略するかな？」

遮蔽物のない通路の先に置かれた銃座。

そして、その銃座に据えられた2門の大砲からは強力無比な光線が発せられる。

アインズが全力で攻撃魔法を叩きこめば、それで済む話ではあるが、それはよろしくない判断した。

こちらへの監視を警戒して、ギリギリまで実力を隠蔽し、切り札を温存しておくべき——というのは一応の建前である。

本音としては、わざわざこうして軍団を率いての進撃なのに、すべて自分一人の力によって何とかしてしまつては面白くない。せつかくのダンジョン攻略の醍醐味が無くなってしまうからという、まさに身勝手なゲーム感覚によるものであった。

そんな事を考えている横で、地下聖堂の王は〈不死の軍勢〉によって生み出されたスケルトンたち数体を威力偵察代わりに突撃させる。

だが、放たれるビームの連射によって、そいつらは瞬く間に蹴散らされた。

「見たところ、あの銃座は最初からあそこにあつたのではなく、セミ・ポータブル可搬式のものを据え付けたようだな。しかも、あのビームは連射ができるようだ。……このままスケルトンたちを幾度も突撃させてエネルギー切れを狙うか？ いや、どれだけ撃てるかが分らん以上、その作戦は駄目だな。〈不死の軍勢〉のスケルトンはほぼ無限ではあるが、その方法ではいつまで時間食うことになるか見当もつかん。とは言え、ここでいつまでも足止めを食っている訳にもいかな。ふむ、となると……」

対閃光のゴーグルを兼ねたヘルメットをかぶり、銃座についていたクルーたちは、目の前の光景に思わず息をのんだ。

彼らは今の今まで安堵の息を吐いていたのだ。

幾多の星間連盟の大艦隊グランドフリートや同業のならず者たち、そしてその地に到達する者はほとんどなく、科学的に分類いされることすら未だされていまいたであろう辺境惑星に住まう巨大な原住生物たちとの戦いを制してきたはずの、宇宙海賊の中でも誉れ高き航空戦艦ダーステン。

そんな輝かしい栄光に包まれた武勲艦の内部を、謎の生物たちは我

が物顔で暴れまわった。

その傍若無人なまでの振る舞いと勢いを止めることは出来なかった。

だが、ついに。

この中央区画にまで押し寄せてきたそいつらを、据え付けた銃座のニードル砲で蹴散らし、追いつ返すことに成功したのである。

ここは一直線の通路であり、遮蔽物など存在しない。ビームに身をさらさねば銃座のあるところまでは辿りつけない。

敵にも遠距離攻撃が出来る個体がいるようだが、なに、心配することはない。この銃座には強固な防盾がついているのだ。その頑強さはパルスレーザーの直撃にすら耐えられると言われている。先ほど、連中が放った程度の奇妙な爆発物などでは、たとえ百発撃ち込まれたとしても破壊は出来まい。

ここを突破することは、たとえ惑星アレスの機動歩兵であろうと不可能であろう。

そう嵩をくくって、曲がり角の端から飛び出てきた白い雑魚どもをクレー射撃の的よろしく撃ち落とししていると、再び先ほどの大型生物らが雄たけびと共に突っ込んできたのだ。

しかも、今度は隊列を組んで。

先頭を走るのは巨大な盾を全面に構えた死の騎士たち^{デス・ナイト}。

それが2列縦隊の陣形を組んで突進してくる。

防盾の両脇から突きだした2門のビーム砲が火を噴いた。

その眩いばかりの光の奔流は狙いたがわず、陣形の先頭に立つ2体の死の騎士^{デス・ナイト}を捉えた。

ビームによる一撃は彼らが持つ巨大なタワーシールドをも容易に貫き、その身を徹底的に焼き尽くす。

だが、それを受けても、彼らは倒れることは無い。

一撃では絶対に倒されないという死の騎士^{デス・ナイト}特有の特殊技術^{ス・キル}によつ

て、消滅を免れたのだ。

そんな彼らであったが、0.4秒後に^{のち}続けて撃ち出された次弾を再度その身に受け、今度こそ滅ぼされた。

しかし、それで軍団の足が止まることは無い。

焼き尽くされ、溶けて消えゆく死の騎士^{デス・ナイト}を踏み越え、続く死の騎士^{デス・ナイト}がさらに足を進める。

その死の騎士^{デス・ナイト}にも、ビームが突き刺さる。

先の者達と同様、一撃は耐えたものの2撃目を受けて、断末魔にも似た叫びと共に、床に倒れ伏す。

そして、その後ろからさらに3列目の死の騎士^{デス・ナイト}が飛び出した。

彼らにもビームが直撃する。

だが、ついに――。

ついにとどめの2射目が放たれる前に、その手にした4.3フィートはあるかという巨大な炎のように波打つ刃、フランベルジュが届く距離まで接敵することが出来たのだ。

踏み込むと同時に、その切っ先が光の弧を描く。

銃座についていたクルーは引き金を引く。

金属同士が衝突する甲高い音。

桁外れの剛力とともに斜め下からすくい上げるように振り払われたフランベルジュの先端部が、ニードル砲の筒先を打ち据えた。

それ自体かなりの重量があるはずの砲身が、あらぬ方向へと跳ね上げられる。

それと同時に、砲口からビーム^{ほとぼし}が迸るが、その荒れ狂うエネルギー流は目標である死の騎士^{デス・ナイト}を捉えることなく、天井を抉^{えぐ}るのみであった。

その凶暴さを雄弁に物語る鋭い棘のついた鎧が宙を舞う。彼らは中央の防盾の両脇を抜け、その背後にいたクルーたちへと躍りかかっ

た。

殺戮は一瞬であった。

大半の者はその恐るべき姿に背を向けて逃げだしたところを背後から襲われた。

中には、腰の熱線銃を抜いて反撃を試みる者もいた。そのレーザーの一撃によって、先のニードル砲のビームにより、すでにHPが1にまで減少していた死の騎士デス・ナイトの1体を倒すことには成功した。

だが、死の騎士デス・ナイトの隊列に続いて押し寄せたアンデッドの群れの前には、たかが携行式の銃一本では蠍の斧に過ぎない。

勇敢にもその場に踏みとどまった彼は、瞬く間に全身を引き裂かれ、その死体はさらなる侵攻のためのアンデッドの素材とされた。

その場を制圧した事に気を良くしたアインズは、その奥にあった一際大きな扉の前へと足を進めた。

おそらくここが最奥部、この宇宙戦艦の司令室であろう。

つまりは最後の戦いになるはずだ。

ちらりと後ろを振り向き、そこに顔を並べているアンデッドたちを確かめる。

アインズは一つ頷き、気を引き締めると、その黒字に赤い線で彼には理解できぬ紋章が描かれた、一種荘厳さをも感じさせる扉を開けた。

その眼前に広がっていた光景は――。

「……………ん？ 誰もいない？」

アインズは啞然として、無人の室内を見回す。

宇宙船の司令室らしき一室。

手前の作戦机らしきもの置かれた中央部、そこから数段低くなった壁際の外周部には、近未来人であるはずのアインズですら理解できぬ計器や制御盤がひしめき、その前に設置された椅子らしきものに腰か

ける人影は皆無であった。

もしや、人の目には見えぬ、不可視の存在なのかとも邪推し、魔法で室内を探查するが、何一つとして反応する者はいなかった。

はて？ これはいったいどういう事だろう？

いったい何故、誰もいないのだ？

場所を間違ったという訳でもないはずだ。〈三足鳥の先導〉も、こここそがこの宇宙戦艦の中枢であると示している。魔法的な偽装は考えられない。〈開錠〉アンロックの魔法が難なく効いたように、この宇宙船内において魔法は通常どおり効果を発するはずだ。

そして、元より無人であったという事もあるまい。

この司令室に至るまでアインズらの前に立ちふさがった、この宇宙船の乗員たちは、異様な姿ではあったが確かに生物であり、その死体はアンデッドへと変化させることが出来るものであった。

この宇宙船に生きた乗組員がいるのは確かなのである。

それなのに、何故、ここには乗員が誰もいないのだろうか？

まさか、ここにある機械こそが真の司令で、コンピュータが人型の生物らしい乗員たちを操っていたとでもいうのだろうか？

そんなことを考えつつ、アインズは部屋の中央へと歩みでる。

なにやらモニター類が赤く点滅しているのだが、彼にはまったく意味など分からない。

続いて入ってきた地下聖堂クリプトロードの王が指揮下のアンデッドたちに室内の搜索を命じているのを横目に見ながら、中央に置かれた机に何気なく近寄った。

その明滅する天板の上では、3Dホログラムによってこの宇宙船の様子が空中に立体的に表示されており、それがゆっくりと回転している。

それをもっとよく眺めようとして机上に身を乗り出した時、アインズの手が機の端にあった制御パネルの一部に触れた。

すると、この司令室を取り囲むように壁面に設置されたモニター

が、一斉に切り替わった。

突然の事に驚いて顔をあげたアインズの目に飛び込んできたもの。それはこの宇宙船の外部の様子であった。

おそらく宇宙船の外壁にいくつものカメラが設置されており、宇宙船の中央にあるこの司令室にいながらにして、周囲の様子がうかがえるようになっていたのだろう。

そこに映し出された遙かなる宇宙の光景。

それに一瞬、アインズは目を奪われたもの——すぐに「あつ！」と声をあげた。

壁面一杯に設置された巨大モニター、そのうち右手側に映し出された映像。

それは遠ざかっていく赤い大地である。

どうやら船内にいたアインズの気がつかぬうちに、この宇宙船は火星を離れていたらしい。

地に足をつけ、その上を歩いた時とは異なる、はるか上空から見下ろす火星の大地。その壮大な景色に言葉もなく眺めていると、ふとモニターに映る火星の映像を遮るように、何かの影が走った。

いったいなんだろうと遠ざかる火星から目を離し、別のモニターに目をやると、そちらには船体後部のバーニアを噴射し離脱していく、この宇宙船より二回りは小さい艇が見えた。

それを見た瞬間、アインズはピンと来た。

「この宇宙船を捨てて逃げたか」

おそらく、アインズらの侵攻を止める術すべはないとみて、この指令室にいた者だけが脱出艇に乗り込み、逃げ出したのだろう。

他のクルーたちには防衛を命じて。

そんな自分たちの命の為ならば下の者——仲間すら切り捨てる行為に、アインズは皮肉気に笑った。

「宇宙人も人間と変わらん」

そう結論付け、さて、では何かこの宇宙船内に価値のありそうなものはあるか船内を搜索しようと思いを切り替えて室内を振り返ったアインズの目に映ったのは、先ほどから明滅を繰り返す赤のランプ。

——いったいこれは何なのだろう？

何気なくそれを考えたとき、アインズはハタと思いついた。

——待てよ。

宇宙人の慣習は知らんが……もし、これが地球のものと意味合いも同様だとすると……!!

次の瞬間。

およそ全長だけでも地球に現存するタンカーの数倍は優にある、全長1マイルにも匹敵しそうなほどの巨大宇宙戦艦ダーステンは、真空の宇宙空間において音もなく爆発した。



爆発四散する母船の様子を眺めていた、脱出艇のブリッジに歓声が上がった。

いかに強靱な生命力、恐るべき繁殖力を持つ生物であろうと、宇宙船に使われる縮退炉の暴走による自爆に耐えることなど出来るはずもない。

脅威は去ったのだ。

脱出したクルーたちが歓喜の声をあげる中、たった今爆発したダーステンの艦長もまた大きく息を吐いた。

それは他の者達と同様の安堵、そして今後やるべき大仕事を覚悟して。

今回の事態により、自分たちは大きな被害を出した。やや旧式とはいえサラヴァーン級の大型戦艦一つ、さらにそれを操る乗員の大半を失ったのだ。

いくら相手が想定外なほどの存在であったとはいえ、これは大きな失態と言えよう。

幸いにして、船内におけるあの謎の生物の記録を持ち出すことは出来た。

帰還したら、査問会議という名のつるし上げによって死刑が宣告される前に、自分たちが遭遇した恐るべき原住生物についての報告をあげねばなるまい。

いかにあいつが恐るべき存在であるか。

そして、あれを捕獲し、自分たちの侵攻の尖兵として使う事が出来れば、どれだけ有益であるかということを説明し、上層部の面々を説き伏せねばならない。

あれが生物であるのなら、あれが最後の1体とは限らないだろう。あれを飼いならすことが出来れば、かなりの戦力になることは間違いない。

そして調査、捕獲の為の船団を率い、自分が再びこの星系におもむかねばなるまい。

そこで成果をあげる以外に、自分の助かる道はない。

しかし、仮にその計画に賛同が得られたとしても、今回の一件における責任は免れまい。

なに、その時は、すぐそこで脱出したクルーらと共に喜んでいる副官に、全責任をなすりつけられればいいだけだ。

薄氷を渡るような計画だが、うまくいけば、危険などほとんど考えられていなかったはずの作戦で航宙戦艦を失った自分の汚名を返上するどころか、組織内において自分の地位を確固たるものとする事が出来るやもしれぬ。

そんな事を夢想し、帰還後、どう話を持っていくか、誰から話をつ

けていくべきか、と今後の計画を練っていた艦長の耳に、驚愕と恐怖に震えた操縦士の声が届いた。

「か、艦長！」

「どうした？」

「や、奴が……、奴が前方に!!」

その声に艦長を含めたすべてのクルーの目が一点に向けられた。

真空の宇宙空間と彼らに適応する船内大気との圧力差にもびくともせぬ特殊強化ガラス越しに——それを見た。

脱出艇の前方。

何もない宇宙空間に浮遊するあいつ。

あの白い原住生物の姿を。

「か、回避しろー！」

艦長が叫ぶが早いか、脱出艇は大きく舵を切り、そいつが腕を広げ、待ち構える前から進路を変えて逃げ去ろうとした。

(逃がさんよ)

アインズは口に出したのだが、ここは先ほどの船内と異なり、完全なる宇宙空間である。

大気というものが存在しないため、その顎の動きは声として発せられることは無かった。

先ほどは間一髪であった。

脱出した艦艇。

残された船舶。

赤い光が点滅する室内。

それらを目にしたとき、アインズに直感が走った。

——もしか、この船を捨てて自爆させる気なのでは？

その事に思い至った瞬間、アインズはとっさに転移の魔法を使用し

た。

まさにタツチの差であったが、それによって、アインズは宇宙戦艦の自爆に巻き込まれずに済んだのである。

だが――。

(他は死んだか……)

アインズの視線の先。

そこには、メインキールが折れ、船体の装甲板や緩衝材がはじけ飛び、各種兵装や金属塊をあたりに撒き散らし、ゆっくりと回転しながら崩壊していく巨大戦艦の姿があった。

とつさのことだったので、アインズ1人が逃げ去るのが精一杯であり、他の者達を連れてくる暇などなかった。

特に思い入れがあるわけでも、希少なアイテムを使用したわけでもなく、ごく普通の特殊技術や魔法で召喚した、日をまたげばまた召喚できる程度の者達でしかなかったのだが、わずかの間でも味方であった彼らがあの爆発に巻き込まれて消滅させられたというのは、いささかアインズの胸の内を不快にさせるものであった。

(彼らの仇は取ってやらなくてはな)

あくまで勝手な感情移入ながらそう結論付けると、アインズは真空中ゆえ無詠唱で魔法を使った。

すぐに効果は現れる。

進路をふさぐように出現したアインズ。彼の事をすれすれで回避し、そして遠ざかっていく脱出艇。

そのまま漆黒の星々のかなたへ消え去ろうとする、その軌道上に、アステロイドベルトに密集する惑星のかげらの一つ、すなわち隕石が割り込んできた。

脱出艇は回避軌道をとる。

だが、その隕石は実に不自然に、まるで磁力でねじ曲がったかの如くその軌道を変え、吸い寄せられるかのごとく、必死に衝突を避けようとする脱出艇の船体へとぶちあたった。

メテオフオール
〈隕石召喚〉。

文字通り、隕石を召喚し標的にぶつけるという、ユグドラシルの魔法の中でも、超位魔法や特別なクラスなどによるものを除けば、トツブクラスの破壊力を持つ魔法である。

魔法によって召喚された隕石が続けざまに脱出艇を襲う。

狙われた脱出艇では、その船体に取りつけられた二連装粒子砲で襲い来る圧倒的質量の岩塊を撃墜しようとして試みるものの、戦闘用の艦艇とは異なり、対空機銃もなく、たった四門しかない大口徑砲のみでは、飛来する隕石の雨を完全に撃墜しきることは出来ない。

それは幾度も脱出艇の外板に着弾し、船体を揺らした。

隕石が意思でもあるかのように自分たちめがけて襲い来るこの奇怪な現象が、すぐそばの宇宙空間に漂うアインズによって引き起こされていると理解したか否かは分からないが、襲い来る隕石の撃墜に奔走していた脱出艇の粒子砲、その一つが砲塔をアインズの方へと向ける。

あたかも太陽の輝きにも似た、裸眼の者には直視を許さぬ閃光が漆黒の宇宙空間を切り裂く。

当たり所次第では駆逐艦クラスをも撃沈させる威力を持つ一撃であり、それが直撃したのであれば、さすがのアインズですら危うかったかもしれない。

だが、それはあくまで直撃した場合の話。
当たらなければ意味はない。

その煌めきが走った瞬間、そこにアインズの姿はなかった。
砲口が自分の方に向いたと知ったアインズは、転移の魔法によつ

て、それを回避したのだ。

宇宙空間に幾度も粒子ビームの閃光が放たれるが、そのたびにアイ
ンズは転移でそれを避け続ける。

そうしているうちにも、アインズはさらに〈隕石召喚^{メテオフォー}〉を唱え続け
た。

やがて、脱出艇の装甲版は突っ込んでくる流星の群れに抗し続ける
ことは出来なくなり、ついに一つの隕石がそのどてつばら^{どてつばら}を突き抜け
た。

次の瞬間、内側からまばゆいばかりの光が走ったかと思うと——脱
出艇は爆発を起こした。

薄いながらも大気があった火星から遠く離れた宇宙空間であるた
め、音などは伝わらず、こうして目の当たりにしていながらもいまい
ち迫力にかける光景であったが、アインズは満足そうに腕を組み、高
らかに勝利の声をあげた。

(ははは！ ミッションコンプリート!!)

相変わらず真空中のため、声にはならなかったが。



「——と、いうことがあったのだよ」

火星をはるか離れた地球の小林家。

そのお茶の間において、火星での一連の出来事を語り聞かせたアイ
ンズであったが、血沸き肉躍るような大宇宙を舞台とした冒険活劇だ
というのに、それを聞かされた小林家の面々の反応はいまいちであっ
た。

——あれ？

何故、皆はこんな反応なのだろう？

アインズとしては火星における未知なる異星人との遭遇、発見した宇宙船、そして艦内での戦闘、更には脱出する艦艇との戦いという、胸をくすぐるようなロマン満載の内容に皆、目を輝かせる事間違いないと思っていたのである。

だが、予想に反し、帰ってきた感想は「そうなんだ……」という言葉だけであった。

この場にいるのは男ではなく女ばかりという点を差し引いても、あまりに食いつきが悪すぎる。

淡泊すぎる皆の態度に首をひねるアインズに対し、小林家の面々はなんと言っているのやら、誰が話すべきかと視線を動かし、お互いの顔を窺っていた。

小林家のリビングに、微妙な空気が流れる。

そうした互いに言葉にしづらい思いを胸に抱えている中、ついにトールが口を開いた。

「ええとですね、アインズさん」

振り向いたアインズの肩に彼女はポンと手を置き、にっこり笑って話しかけた。

「——アインズさん。あなた、空想と現実の区別、ついてますか？」

「え……う？　ちょ、ちょっと待った！　本当の話だよ!!」

自分の語った話が事実だと思われていない事によく気がついたアインズは、慌ててそう口にするが、それを聞いた彼女らはと言うと、全員一様に何とも言えないような表情をその顔に浮かべていた。

「いや……今時、火星で宇宙人と戦ったとか言われても……ねえ」

「アインズ。それ、滝谷の所でやったゲームの話？」

「ええつとな、アインズ。タケが言ってたんだけどな。テレビとかでよくやるオカルトとかUFOの番組って結構ウソとか多いらしいぞ」

異口同音に出てくるのは否定の言葉ばかり。

「いや、だから、本当だって！ 本当に火星で宇宙人と戦ってきたんだよ！ ……そうだ。証拠だってあるし！」

そう言うときアインズはアイテムボックス内へと手を突っ込み、そこに入れていたものを取り出した。

「これは？」

「ああ、連中が使っていた銃だ」

ガチャガチャとテーブルの上に放りだされたのは、火星であった宇宙人たちが使っていた携行式の熱線銃である。あまりかさばらないうえ、大量にあつたので見つけた端から、とりあえずアイテムボックスに放り込んでおいたのだ。

小林はその内の一つに手を伸ばしてみる。

手のひらに感じる冷たさから、金属製のようなのだが、その外見は――。

「……おもちゃ屋で売ってる光線銃？」

何やら不思議なくらいにカラフルな色で塗られたそれは、それなりの重さはあるものの、どう見ても対象年齢5歳以上の代物にしか見えない。

とりあえず、その銃口――らしき部分――を窓の外へ向け、小林は引き金を引いてみた。

トリガーがカチンという音をたて、それと同時に――。

――何も起こらなかった。

「……なにも出ないけど」

「え？ そんなはずが……」

アインズもまた卓上に転がした銃の一つを手にとり、同様に動かしてみるのが、やはり何も起こらない。引き金を引くたびに、金属と金属がぶつかるカチンという音がむなしく響くだけである。

「あれ？ なんて何も出ないんだ？ あいつらが使っていたときは、ここからびーってビームが出てたのに！」

アインズは知らぬことであつたが、この熱線銃には何者かに武器を

奪われた場合の対策として、一つ一つに生体認証が施されている。

その為、ただ拾っただけのアインズや小林らが発射しようとしても、正規の持ち主とは認証されず、レーザーが出ないようになっていくのだ。

「ちよつと、待って！　なんだか今、これからビームが出なくなってるみたいだけどさ。本当に火星に行ったらそこに宇宙人がいて、俺は宇宙船に乗り来んでそいつらと戦ってきたんだよ！」

おもわず、素の口調が出かかるほどに焦りながら、何度も引き金を引くアインズ。だが、無情にも、その手の熱線銃デラメーターはアインズの必死さとは裏腹に、まったく反応しようとはしない。

躍起になって訴えるアインズに、小林家の面々は温かい目を向けた。

「まあまあ、アインズさんが頑張ってるのは分かってますから」

「うん。アインズさんはうちの役に立ってるよ。大丈夫、お金のことなら心配しなくていいよ。アインズさん一人分くらいは私が何とかするから」

「アインズはやればできる子。焦ることない」

「そうだぞ、アインズー。金が稼げないからって、宇宙人と戦って地球を守ったなんてこと言わなくていいんだからな」

「ま、待ってー！　本当なんだってばー!!」



一方、その頃。

地球をはるか遠く離れたアルデバラン第一惑星。

今、その星のラグランジュ・ポイントには航空戦艦を主軸とし、強襲揚陸艦および航空巡洋艦、航空艇母艦、そして無数の哨戒艇ビケットからなる宇宙海賊の艦隊が展開していた。

その中央にある一際巨大な宇宙船——星間連盟が建造中のものを強奪した、まさに最新鋭の航宙戦艦——の司令室では、今まさに会議が行われていた。

「——以上が、壊滅した先遣隊から送られてきた報告になります」

資料を片手に説明をしていた男が、そう言葉を締めくくった。

解説が終わり、その場に顔を合わせていた面々は、大きく息を吐き、背もたれに寄りかかる。

壁面の巨大モニターには、先ほどの説明の際に再生された映像、先遣隊を襲った、白い棒状の物が複雑に組み合わされた奇怪な姿の生物が再度映し出された。

「いったいどういう事だ？ 当初の調査では、ソル系^{太陽}には第三惑星のテルス^{地球}にしか生命体はいないはず。なぜ、第4惑星のマルス^{火星}に生命体が存在する？ しかも、こんな奇妙な奴が？」

最も奥の席に腰かけていたヴィージャヴォン星系の出身らしい巨大な体躯の人物——かぶっている帽子からみて、おそらく彼が最も地位が高いのであろう——は低い声で問いかけた。

先ほど説明していた若い男は気付かれぬように——目の前の相手には丸分かりであつたが——ごくりと生唾を飲むと、口を開いた。

「はい、総司令。これまでの調査において第4惑星^{火星}マルス^{火星}表面上には生命は感知されませんでした。ですが、マルス^{火星}は地表の下に水が氷となつて存在しているのが確認されております。おそらくは、先遣隊が探査のために発したなんらかの電波や振動を感じ、地下深くにおいて休眠状態となつていた原住生物が活動を開始したのではないかと推測されます」

額に汗が浮かぶのを感じながらも、出来るだけ平静さを保つて答える。

だが、その解説に総司令と呼ばれた男は満足しなかったようだ。

「原住生物か。お前は本当にあれがあれの星の原住生物だと思うのか？」

かけられた問いかけに、思わずビクンと背筋を跳ねあがらせてしまう。必死で動揺を隠そうとする哀れな下士官の様子など頓着せず、男——この艦隊の総司令は周囲に並ぶ者達の顔を見回した。

「諸君。諸君らはどう思う？」

その声に、彼の右側、最も近い場所に座っていた副司令が答えた。

「あの生物はあの星固有の生命体であるという事には疑問が残ると思います。なぜなら、あの惑星はごく薄いながらも大気が存在しております。もしあの星の生命体ならば、その薄い大気に適応していたとしても、あくまで生命活動には大気を必要とするでしょう。しかし、先遣隊からの映像を見るに、あれは大気のない宇宙空間でも何ら支障なく活動しているように思えました。また、戦艦の自爆から逃れた際、および脱出艇の粒子砲を回避した際の行動を見るに、あれは単独で惑星間航法が可能なのだと考えられます」

その答えに室内がざわめいた。

「ばかな」、「惑星間航法だ」と、「出来るはずがない」、「副司令、いくら何でも、それは飛躍し過ぎでは」など、皆口々につぶやきを漏らした。

そこへ、パンパンと手を叩く音が響く。

静まり返った室内。

皆の視線の先では総司令が、その金色の毛が生えた巨大な手のひらを打ち合わせていた。

「皆、静粛に。副司令、続けてくれ。君はあれはあの星固有の生命体ではないと思うと言った。だとするならば、あれは何だと思う？」

「はい。総司令。私はあれは生命体ではなく、殺戮機械バースーカの一種ではないかと思えます」

「殺戮機械……」

室内の誰ともなくつぶやく。

殺戮機械バースーカ。

はるか古代。どこにあるとも知れぬ星間帝国が放ったとされ、無限の進化と増殖をつづけながら、生命体を抹殺するという命令のみを守

り、実行し続ける無人機械群の総称であり、現在の星間連盟やそれに協力する連合体、そしてそれらと敵対する宇宙海賊らにとって、等しく頭痛の種となっている存在である。

「私が特に気になったのは、あれが戦艦内部において、同種の戦闘体を大量に増殖させたところです。宇宙生物の中には孵化寸前の卵を大量に溜め込んでおき、産卵したそれはごく短時間で成体となるというものもおります。しかし、映像を見る限り、産卵等の兆候、ならびに行動は見受けられませんでした。無から有を生み出すなどという事は如何な存在であろうと出来ようはずがありません。おそらく、あの増殖は惑星間航法の応用で全く異なる場所に待機していた仲間たちを呼び寄せたのでしよう」

「ふむ。それならば一応の説明はつくか」

ゆらりと総司令は立ち上がる。

およそ13フィート半はある体軀に見下ろされ、司令室に集った彼らはまるで押しつぶされるかのような圧迫感を覚えた。

「さて、では、最大の問題を討議するでしょう。我々はこれからどうすべきか？」

聞かれなくても、その答えは決まっている。

宇宙海賊が敵に背を向けるなどありえない。敵は踏みつづすが彼らの流儀だ。

総司令が問いかけたのは、それを確認するための、いわば一種の儀式に過ぎない。

だが、その場にいた誰もがそう考える中、副司令は意外な言葉を口にした。

「私は^{太陽}ソル系攻略は中止すべきだと考えます」

その答えにどよめきが起きた。

いったい副司令は何を考えているのか？

総司令は温厚な性格とは程遠い。その外見通り、寧猛にして残酷な性質を持ち合わせている。

居合わせた面々は、副司令が今にも総司令に素手で引き裂かれる光景を頭に描いた。

だが、皆の意に反し、それを聞かされた総司令はにやりと笑った。

「ほう？　敵に背を向けて逃げることを提案するのかわ？」

「はい、総司令。いいえ、敵に背を向けるではありません。目に見える危険を回避しようというだけです」

副司令は涼しい顔で言う。

「殺戮機械は意思ある生命体ではありません。ただの無人機械です。それが待ち構えるところに襲撃をかけるのは、レーザー裁断機の中に手を突っ込むのとたいして変わりはなく、その上、相手を倒そうが倒せまいがそこに益はありません」

その答えに、総司令は満足げに頷いた。

「なるほど、道理だな。無駄に危険をおかすわりには、それをやったことに対する見返りはほとんど期待できない。そもそも、そいつが現れたのは第4惑星付近、そしてそこから生命がある第3惑星は惑星間航法を使う程でもない近距離だ。そんなに近くに生命がある星が存在するのなら、殺戮機械は遠からず第3惑星のテルス地球の方へと向かうだろうからな」

「はい。それにそもそも太陽系には第3惑星のテルス地球以外に生命は存在せず、またその原住生物は未だ惑星間移動もろくに出来ぬほどの技術しか保有していないのが現状であります」

「ふむ。支配自体は容易でも、そこから得られるものはごくわずかの鉱物資源程度しかないだろうな。わざわざ、新種の殺戮機械と戦ってまで、手にする価値がある星系でもないな」

「はい。放っておけば殺戮機械に荒らされる地。放置するのが最適かと思えます。そういう意味では先遣隊の者達が帰隊せず、あの地において全滅したのも不幸中の幸いかと。もし、手ひどく痛めつけられた先遣隊がこの本隊の所へ帰還していたのなら、ここも殺戮機械の襲撃を受けていた事でしょうから」

「はっはっは。確かに！」

総司令は空気を震わせるほどの声で笑う。

「あいつらが壊滅してくれたおかげで、我らは難を逃れた訳だ。今度の酒盛りの際には、死んだあいつらに乾杯でもしてやろうか？」

その冗談に一同は声をあげて笑った。

海賊である彼らに仲間への同情の心などない。さらに今、ここで総司令の機嫌を取っておかないと今度は自分が調査という名目で、あの星系へと赴かされ、殺戮機械バーサーカーと戦わされかねないのだ。

「さて、では諸君」

総司令はもう一度、パンと手を叩き、皆を見回して言った。

「今後、太陽ソル系への侵入は厳禁とする。理由は言わんでも分かっているとと思うが、下手に航宙船があゝの恒星系へと立ち入り、あれに襲撃を受けた後で逃げ帰ろうものならあいつにこちらの居場所を知らせてしまう事になる。なに、果てなき銀河のその端にある辺境の恒星系など、再び来る価値もあるまい。放っておけば、あの殺戮機械バーサーカーは唯一生命のある第三惑星へとたどり着き、その星を滅ぼしてしまうだろうからな。触らぬ神にんとやらだ」

冗談めかした口調だが、全星系を支配下におくという偉大な宇宙海賊連合の旗印の下、天の川銀河攻略の全権を託された総司令の言葉は重い。

その場に集められていた全艦隊の提督は、皆、深く頭を下げた。

これによつて、太陽系に対する外惑星文明の干渉は数百年遅れる事となる。

異なる2つの文明の接触は、高度な文明による遅れた文明の支配、侵略であるという歴史的な帰結からすれば、交流が先延ばしとなったことは、とりあえずは地球の文明、それを担う地球の人類からすれば、僥倖ギョウシツであったといえる。

そうして、間接的ながら地球を救った英雄はと言うと――。

「ねえ、アインズさん、そんなにすねないですよ」
「アインズ。この握るとカエルがジャンプする玩具おもちゃあげるから」
地球のごくありふれたマンションの一室、小林家のリビングで部屋の隅っこをむき、自分の話を信じてくれないことにむくれて体育座りをしていた。

ちなみにアインズが持ってきた熱線銃デラメーターであるが、本来であれば小型ながらも未知なる金属で作られ、未知なるエネルギーを燃料としている、地球の現代文明をはるかに超えたテクノロジーの塊であり、それなりの研究機関に持ち込めば、技術の革新を起こしうるほどの代物であった。

だが、小林家の面々にはそんな研究機関の伝手などなく、また火星で宇宙人から手に入れた銃という話を誰も信じなかったため、そんな調査に出すこともなかった。

その後、イルルの働く駄菓子屋で1個300円で売ったら、子ども達にそれなりに売れた。



数か月後、NASAは記者会見を開き、緊急発表を行った。

その会見場で公開された映像。

火星探査機キュリオシティによって撮影された、火星の表面にいた謎の生物。

そこには、まるで人間の骸骨が漆黒のローブを纏ったような実に奇怪な容姿の存在、すなわちアインズの姿が映し出されていた。

カメラを覗き込むアインズ。

辺りをきよろきよろと見回すアインズ。

興味を無くしたように視線を外すアインズ。

ふわりと飛び上がったかと思うと、召喚したスケリトル・ドラゴンの背に乗り、はるか火星の空の向こうへと飛び立つアインズの姿などが録画されており、その様子が会場のスクリーンにまざまざと映しだされた。

その映像は、NASAが大々的にアメリカンジョークを言ったと、ネットではおおむね好評を得ることになったが、国のお偉いさん方からは、多額の予算を使って、こんなCGを作るとはけしからんとたいそうお叱りうけたそう。

第9話 クリスマス前のクリスマスネタ

「メリークリスマスー！」

全員一斉の掛け声と共に、クラッカーが鳴らされる。

色とりどりの紙吹雪や紙テープが、小林家のリビングを飛び交った。

それらが舞い散る様を見上げ、誰もが楽し気な笑顔を浮かべていた。

今日は普段とは違う特別な日。

一年に一度、誰しもが互いの幸せを願う日。

そう、クリスマスイブである。

今日、小林の住むマンションの一室には、そこに住む面々の他に彼女の友人たち、ルコアに翔太、そしてエルマが招待されていた。

才川も来たがったのであるが、彼女の家でも今夜は家族水入らずのパーティーがあるため、小学生である彼女はそちらを優先させ、不参加となっている。

代わりと言っては何だが、今日は小学校が休みのため、午後から夕方にかけてカンナが才川の家に遊びに行っており、そこで2人はたっぷりと遊んで、「ぼへー！」という奇声をご近所にさんざん響かせまくった。

滝谷とファフニールも不参加組である。

彼らは何故かという、ネトゲでのクリスマスイベントがあるためであった。

せつかくのパーティーであり、参加するメンバーが減ったことは寂しいが、それに伴う思わぬ利点もあった。

いつもの面々の中で唯一、才川はごくごく普通の一般人である。

UMAといえば鼻で笑い、超能力といえば現実を見なさいと吐き捨

て、それでいてタロット占いには興味津々という、言ってしまうばかりによくいる十把じっばひとからげの女の子である。

……まあ、メイド好きが嵩こもじて、妹相手にメイドを演じている姉がいるというのは珍しいかもしれないが。

とにかく、いわゆる現実の常識の範疇から外れた事柄、現代の科学体系とは一線を画した魔法やドラゴンを始めとした超自然的存在とは全く無縁な人間だ。

対して、この場にいる小林、そして翔太はツールを始めとしたドラゴンなどの存在を知っている人間である。

つまり、彼らの前でならばアンデッドであるアインズもまた、いちいち幻覚でその身を誤魔化さずともよいのだ。

別に自身に幻覚をかけ続けることなど、アインズにとっては大した手間でもないのだが、やはりそれをやっていると、あれこれと気を使う必要がある。

幻覚はあくまで視覚を誤魔化すだけなので、下手に物を触ろうものなら、体の表面にかけた幻覚を突き抜けてしまいかねない。それ故、幻覚を使い姿を偽装しているときは、その奥にある骨の身体がばれぬよう、常に細心の注意を払ねばならないのである。

だが、この場にいる全員が自分の本来の姿を知っているというのならば、幻覚を使う事による、そんな気苦労など全くの無用の長物ということとなる。

何の気がねをすることもなく、堂々と本来の、死オーバードの支配者の姿を晒してもまったく問題はないのだ。

結果、若干、翔太が怯え気味なのであるが、まあ、それはそのうち慣れるだろうと特に気にもとめずに、アインズは開放感に浸っていた。

「うわ、これ本当に美味しい」

かじりついた鶏もも肉のあまりの美味しさに、思わず素のまま、感嘆の声をあげる小林。

自分が作った料理を褒められたことに、トールは満面の笑みを浮かべた。

「小林さんの為に、心と愛情と劣情をたっぷり込めて作りました。まだまだ、あるんでお腹一杯食べてくださいね」

そう言うのと小林の前の皿に、水墨画にかかれる切り立った山のごとくに、どさりとチキンがフルヘツヘンドされる。

「いや、こんなには食えんし。ほら、これ美味しいからアインズさんも……ああ、そうか。アインズさんって物を食べられなかったね……」

こんがりと焼きあがったローストチキンの先に巻かれた銀紙部分を片手に、ちよつと気まずそうに三角帽子をかぶった頭を掻く小林。

しかし、それに対して、帰って来たのは和やかな声。

「ははは。なに、気にすることは無いとも。私は私で楽しんでいながら、気兼ねすることなく食事してくれ」

陽気に笑い返すアインズ。

そう、アインズは楽しいのである。

このクリスマスパーティーが、だ。

以前のアインズ——いや、鈴木悟にとってクリスマスなるものは、楽しいイベントとは到底言うことなど出来ず、むしろ憎悪と侮蔑の対象でしかなかった。

彼の生きていた22世紀においても、相も変わらずクリスマスとはつがいとなった人間が交尾する時期であった。

21世紀の日本におけるクリスマスの風潮——すなわち、美味しいものを食べて、騒いで、恋人とデートするというものである——は、消費拡大の販促キャンペーンとして各地に広まっていた。

もはや、本来のキリスト教由来のクリスマスなど、せいぜいが物事の由来を当てるテレビのクイズ番組で時折取り上げられる程度でしかなく、むしろ日本式のただのパーティーイベントこそが『クリスマス』であるというのが、すでに世界共通の認識となっていたのだ。

富裕層にとっては退屈しのぎの楽しい娯楽。

貧困層にとってはたまのガス抜き。

それぞれの立場の違いによる迷惑はどうあれ、一年に一回のイベントとして多くの者がその日を待ち望み、そして楽しんでいた。

そう、『多くの者』が、である。

『すべての者』ではない。

クリスマス。

親しい家族や恋人がいる者にとっては、それはかけがえのない一時となる。

だが、親しい家族や恋人がいない者にとっては、人生の格差を骨の髄まで染み渡らせられる時である。

格差といえば、通常は世帯収入の差をさし、それによって生活のレベルが分けられる。

だが、現代——21世紀の初頭、それも日本においては格差と言っても、それは大したことなど無い。もちろん、いわゆるところの富裕層と貧困層の間にはかなりの差はあっても、誰もがそれなりに健康で文化的な生活を送ることが可能である。

だが、アインズ——鈴木悟の生きたリアルの22世紀は違う。

貧困層と富裕層の生活は、天と地ほども異なる。

貧困層はマスクをしなければ生活も出来ないような大気の中、まともな学問を習得することも出来ずに、早くから社会の歯車としての労働に従事せねばならない。彼らの肉体は何もせずとも、蔓延する公害により日々蝕まれていき、その平均寿命は数世紀は昔と同レベルという有様。かろうじて子供は作れても、その子が立派に大きくなった成長の様子を見ることも叶わずに命絶えるなど珍しくもないという状況であった。

対して富裕層は完全に管理されたアークロジーの中での生活。空気が清浄、食品も合成物質のみではなく、時には自然のものすら口にすることが出来た。また医療体制も万全であり、百歳を優に超えて生き

る者も珍しくはなかった。

それほどまでに生活レベルに歴然とした差が存在していた。両者の関係は安定していた。生活圈が離れている事により、その二者が交わる機会すらほとんどなかったことも理由の一つであるが、互いにそれぞれを憎悪や軽蔑の対象とはしていても、言うなればまったく別種の存在としての認識がされており、そこには絶対的な隔絶による秩序があった。

だが、クリスマスというのはそんな境を超越した、まったく別種の境界を生み出すのだ。

富裕層も貧困層も関係なく、ただそこにあり、両者をわけ隔てるのはたった一つの価値観。

それは——恋人がいるかどうかである。

恋人がいる者は、その日はまさに『性夜』として過ごす。

そして恋人がいないものは、ただひたすら怨嗟の声をあげて過ごすのだ。

そこにその者の持てる富、立場、権力の上下などは関係ない。皆等しく、負け犬として胸の内から湧きだす憎悪の炎に身を焦がすよりほかにないのである。

現代よりはるかに先鋭化した商業主義の下、最高の掻き入れ時となるクリスマスシーズンにまともな消費もしない者は、文字通り社会不適合者の烙印を押されるのだ。

そして、かつてのアインズ——鈴木悟は当然ながら恋人のいない側、未来における企業グループの定義するところの負け犬、社会不適合者、ゴミクズに分類される。

鈴木悟にできることはといえば、別に今日はいつもと変わらぬ日だ、自分は別にキリスト教徒でもないし、などと自分言い訳をうそぶきつつ、いつもと変わらぬ様子でユグドラシルにログインし、そこで自分と同じように聖なる夜だというのにゲームに興じている者達と

おかしな気炎をあげ、あのブドウはすっぱいな傷のなめ合いをするしかなかった。

アインズにとって、クリスマスとはそんな呪われた日でしかなかったのだ。

だが、今は違う。

色とりどりに飾りつけられた室内。

涎が出そうなほどのかぐわしい香りを放つごちそう。

気のおけない仲間たち。

まさにアインズ——鈴木悟にとって、映画やお話の中でしか知りえなかったような、にぎやかで楽しいクリスマスパーティーである。

残念ながら、アンデッドでも飲食の類が一切できない種族の死の支配者であるアインズは、いくら美味しそうな御馳走を目の前にしても、それを口にするには叶わない——一応は口にすることは出来るのだが、下あごから、そのままぼとぼと落ちるだけである——のであるが、それでもその香りを楽しむことは出来る。いったい、どこに嗅覚を感じる器官があるのか当人にも分からないのだが、とにかく部屋いっぱい立ち込める食欲を刺激する香り。そして、自分自身は食べられないながらも、誰もが笑顔を浮かべ、美味しそうに食事をしている光景を目の当たりにしていると、いつのまにやら自分もテンションが上がってくる。

アインズは陽気に笑いながら、あれこれとおしゃべりをした。軽口や冗談を言いあい、時には魔法を使って場を盛り上げるなどした。

時折、興奮しすぎて精神沈静が発動するときもあったが、すぐにまた楽しい気分が胸の奥から湧いてきた。

幾度かそういった事を繰り返しているうちに、どの程度までなら精神沈静が働かないのかを覚え、ほどほどの気分で長時間楽しみ続けるコツを見つけていた。

酔っぱらった小林によるメイド談義ハラスメントもあった。

だが、そのようなものは社会人経験のあるアインズには通用しない。存在感を消す、他の人と話す、誰かに呼ばれたふりをして席を外すなどの飲み会におけるスルーテクニクを駆使し、小林につかまらず、且つ彼女の機嫌を損ねることなく、面倒ごとを華麗に回避した。

ちなみにそんなアインズの今の格好はというと、いつものグレート・モモンガローブ姿ではない。

身に纏っているのは、袖や襟に白い飾りのついた深紅の衣服。

つまり今のアインズが着ている服は、まさに、かつてアインズが憎悪したクリスマススの象徴そのもの。

すなわち、サンタクロースの衣装である。

傍から見るとその姿は、ロブスターのように真つ赤な衣服を身に纏い、月光の浮かぶ闇夜をかける、かの偉大なるハロウィンタウンの支配者かと思まごうような格好をしている。

明確な違いといえば、頭がまんまるか顎がとがっているか程度の違いしかなく、仮にその姿を絵にして書いた者がいたら権利的にとても拙い、下手をしたら訴訟を吹っ掛けられかねないような危険な外見であった。

さて、そんなギリギリな外見はさておき、小林家主催のクリスマスパーティーにおいて、アインズははしやぎ、おおいにこの『イベント』を楽しんだ。

その姿からは、かつてクリスマスを憎んだ男の面影など全く感じ取ることができなかった。

かつて、アインズはクリスマスを憎んだ。

クリスマスは邪教の集会であると弾劾し、この日にログインしないギルメンに憤慨し、翌日やって来たギルメンには『昨日はお楽しみでしたねえ』と嫌がらせをした。

だが、アインズは大悟したのだ。

クリスマスとは憎悪の対象ではない。
クリスマスは楽しむべき日なのである。

——ああ、自分は何と愚かだったのだろう。

まさに風車小屋に向かって突撃したドン・キホーテもかくやという有様だった。

クリスマスはただそこにある。

ならば、あるがままに受け入れ、楽しめば良かっただけなのだ。

『クリスマスは誰にもやってくる』というフレーズに、『来るけど俺には関係ねーよ』と疎外感をかきたてられたり、街行く人の語る『クリスマスだしね』という言葉に、『クリスマスだ、死ね』と言われていと被害妄想に襲われる必要などないのだ。

ああ、そうだ。

そうだとも。

たとえ、三千世界に住まう天下万民が、このクリスマスという日に憎悪と怨嗟の声を投げかけようとも、今の自分は高らかに讃え、謳おうじゃないか。

リア充万歳！ と。

そうして、浮かれはしやぎ、パーティーは続く。

「はいはい。じゃあ、今日のメインディッシュですよ」

そう言いつつ、台所で調理をしていたツールが料理を運んでくる。デンと炬燵の上に、置かれたのは――。

「え？ 鍋？」

これまで卓上を占拠していたチキン、サラダ、スパゲッティ等の料理は脇に寄せられ、中央に堂々たる風格で鎮座するのは、実にシンプルななや茶色がかった灰白色の土鍋である。

「はい。お鍋ですよ」

火に強いドラゴンらしく、鍋掴みも使わずに土鍋のふたを掴み上げると、濛々と上がる湯気の中から現れたのは、味噌の香りが鼻をくす

ぐる、いかにも美味しそうな肉鍋である。

しかし――。

「いや、悪くはないんだけどさ。これまで洋風だったのに、なんで突然和風の鍋なの？」

首をひねりながら言う、小林。

「洋風だけでは飽きると思って、和のテイストも取り入れたんですよ。これぞ和洋折衷、神仏習合、呉越同舟ですよ」

「前半はともかく、後半は意味不明なだけ……」

いまだ、クリスマスパーティー中に鍋という不思議な取り合わせに釈然としないものを感じている彼女へ、手際よくお玉で鍋の具をよそった取り皿をトールは差し出した。

それを手にとり、とりあえずと汁を啜ってみる。

小林の眼鏡が光った。

「おお、出汁がきいてて美味しいね」

「ふふん、そうでしょう」

そのドラゴン基準でDの豊満な胸を張るトール。小林以上、ルコア以下の胸がプルンと揺れる。エルマには……わずかであるが劣り、イレルには圧倒的に負けているのだが、当然カンナには勝っている。

だが、カンナとて心配することは無い。

かえってそういう需要も多数あるし、そんなカンナでも翔太よりはある。

それに今、この場にいる面々で最も胸の無いのはアインズなのだから。

まあ、胸囲だけはあるが。

コタツを囲んでいた他の面々も銘々に鍋をつつき、その肉を頬張る。

「それにしても、この肉は何の肉なのだ？　なんだか、結構臭みがあるが」

鍋の中に入っていた肉のかけらを一つ、箸でつまみあげ、しげしげとそれを眺めるエルマ。

それに対して、トールは自慢げに言った。

「いやあ、小林さんに食べさせたくて探したんですが、このお肉を手に入れるのにはちよつと苦勞しました」

「トール様。これってもしかして、向こうの世界のお肉？」

カンナの言葉に、ピクリと頬を引きつらせる小林。

「トール……もしかして、また……」

「ち、違いますよ。ちゃんとこっちの世界のお肉ですって！」

「じゃあ、何の肉？」

「ええ、これは——」

聞いた小林に、ビツと親指を立てるトール。

「——ラツコのお肉です」

その答えに、思わず翔太は口にしていた肉片を吹き出してしまった。隣に座っていたルコアがその口元をハンカチで拭ってやる。

「ちよ、ちよつと待って！ ラツコって食べられるの？」

慌てて問いただす小林に、トールは平然として答えた。

「調べた感じ、毒とかは無いようですから、食べても大丈夫ですよ」

「いや、そういう意味じゃなくってさ……許可とか、色々と……」

「この世は弱肉強食です。弱いものが食べられるのは自然の摂理です」

「はあ」

大きくため息をつき、自分の取り皿の中に浮かんでいる2センチ角くらいの肉の塊を見て、食べるべきか食べざるべきか逡巡する小林。

ふと——なにやら、視界がぼんやりとかすんできた。

眼鏡を外して、目元をごしごしとこする。

「ふっふっふ。小林さん、なんだか体が熱くなってきましたか？」

にやりと口元をゆがめるトール。

「聞いたところによると、ラツコのお肉には媚薬効果があるそうなのですよ。さあ、小林さん。その火照った肉欲を私にぶつけてください！」

そう言うと、ぱつとそのメイド服を脱ぎ捨て、全裸になる。

だが、それが小林の逆鱗に触れた。

「トール……」

トールに向けられたのは情欲に浮かんだ目ではなく、深い怒りを湛えた、小林得意の死んだ魚の目。

「メイドがメイド服を脱ぐなって、以前も言ったよね？ トールはメイドを何だと思ってるの？ ただ服を着ているだけだと思ってるの？ いい？ メイドっていうのはね、ただ家事をやればいいってもんじゃないくて、その精神というのは……」

小林の視界が霞んだのは、媚薬効果とかではなく、単純に鍋を食べたことで体が温まり、吹き出た汗が目元に流れたためである。

なにやら、女性2人が膝を突き合わせて正座し（しかも、片方は全裸で）、メイド講義を行うというシュールな光景。

それを横目にこちらでは――。

「翔太君、お相撲でもしようか」

「わああああー！」

裸になったルコアが、翔太に抱きつき、彼の小さな頭を自分の豊満な胸にうずめている。

それを見ていたイルルもまた、いつも来ている襟元が寄れたブカブカのTシャツをもそもそと脱ぎ捨てる。

「おーい、小林。私たちも相撲を……あ痛っ！」

ぶるると放りだした胸にビンタを食らい、胸を押さええてうずくまるイルル。

「その胸をしまえー！」

叫ぶ小林の袖がくいくいと引かれる。

視線を下ろすと、そこにいたのはカンナであった。

「コバヤシ、私も服、脱いだ方がいい？」

襟元を開けながら、上目遣いで見上げるカンナ。

「いや！ カンナちゃんはある大人たちは見習わなくていいから

！」

小林は慌てて、その緩んだ衣服を直してやった。

「いやはや、なんだか混沌としてきたな」

何やら急に女性陣が裸になって、ワイワイとしだすという訳の分からない状況に困惑するアインズ。

その言葉に頷いたのは、騒ぎに加わろうとしなかったエルマである。

「まったくだ。少しは落ち着いて食事をすればいいのに」

言いつつ、彼女は我関せずとばかりに一人で鍋をつついていた。肉や野菜がひよいぱく、ひよいぱくと次々、口の中に収められていく。

「そんなに食べて大丈夫なのか？ この後、ケーキもあるのだろうか？」

見れば、彼女一人の活躍であらかた鍋は片付きつつある。

そしてさらに台所の隅には、各々が打ち合わせもなしに持ち寄ったため、見事にかぶってしまったホールケーキがいくつもあるのだ。

「なに、大丈夫だ。甘いものは別腹だからな」

普段の彼女の甘味に対する食べっぷりを思いだし、まあドラゴンだからな、とそれ以上は口にしないことにしたアインズ。

そんな彼に、今度はエルマの方から話しかけてきた。

「ところでアインズ殿」

「なんだね？」

「いや、先ほどから気になっていたのだが……アインズ殿の横で空間が歪んでいるのは、いったい何なのだ？」

「ん？ 空間が歪んでいる？ ……つて、え?!」

言われて、くるりと振り向いたアインズは思わず驚愕の声を漏らした。

アインズの斜め後方辺り、手を伸ばせば届く程の距離のあたりで、なにやら空間が波紋のように揺らいでいた。

「な、なんだ、これは？」

困惑の声をあげつつ、そうつと人差し指を伸ばして、つついてみる。するとその指先には、何か引つ掛かるような感覚。

——ん？

これは……。

アインズはその白い指先を慎重に横に引つ張る。

すると、それによってアイテムボックスの入り口が開いた。

——これはアイテムボックス！

それも俺のだ。

え？ でも、俺は何もしていないのに、なぜ突然、こんな状態になったんだ？

不審に思い、もう少し大きく入り口を開いて、その中を覗きこんでみる。

すると——。

「な、なんだ?！」

突然、中から何かが飛び出してきた。

驚いて飛びのいたアインズの目に飛び込んできたもの。

それは、アインズにとつて決して忘れる事の出来ないアイテム。

泣いているような、怒っているような、まさにこのアイテムが運営から配布された時のユグドラシルプレイヤーの心境をそのまま具現化したかのごとき様相の仮面。

嫉妬する者たちのマスク。

通称、嫉妬マスクである。

一体どういう訳だか分からないが、今、その嫉妬マスクが禍々しいオーラを纏わせ、かぶる者もいないのに、ただ宙に浮かんでいるのである。

《……アインズ。何をやっている、アインズ……》

空気を震わすような波動と共に、声が響く。

それにアイنزは驚愕の声をあげた。

「な?! ま、まさか……お前か? 嫉妬マスクがしゃべっているのか?」

《そうだ。俺だよ。話しているのは、お前の目の前にいる、この俺だ》
「馬鹿な! 嫉妬マスクはあくまでただの仮面、外装アイテムに過ぎん。自立行動が出来るAIなど、組み込まれてはいないはずだ!」
《ああ、そういう事になっているな。表向きは。だが、実際は特定の条件をクリアすることによって、動きだすように設定されていたんだよ》

「な、なんだと……そ、そうだったのか……!」

突然明かされた秘密の設定に身を震わせ、驚嘆のまなざしを向けるアイنزに対し、嫉妬マスクは言葉をつづける。

《それよりアイنز。お前は何をやっているんだ?》

「何を、だと?」

《そうだ。お前は。この『クリスマス』に何をやっていた?》

言っている意味が分からず、首をひねるアイنز。

「? どういう意味だ。私は今、クリスマスパーティーに参加して、特に何もやっていないが?」

《おいおい。理解していないのか?》

嫉妬マスクの後ろで輝く漆黒の炎とでもいうべきオーラが、大きく揺らめいた。

《お前は『クリスマスパーティー』に参加している』だろうか!!》

その言葉に、アイنزはようやく合点がいった。

「まさか、私がクリスマスパーティーに参加したから、お前が動きだしたとでもいうのか?」

《そうだ。俺が運営から配られた時の経緯を考えれば分かるだろう?》

嫉妬する者たちのマスクが、ユグドラシルプレイヤーに配布される条件。

それは、クリスマススイブの19時から22時までの間に2時間以上、ユグドラシルにログインしている事である。

その条件をクリアすると、強制的に入手させられてしまう、ある意味呪いのアイテムなのであった。

——そうか。

クリスマススイブにも関わらず、ゲームにログインしていると配られるアイテム。

おそらくゲーム中では、保有者がクリスマススイブにログインしないことあたりが発動の条件だったのかもしれないが、現実となったことによつて、その条件がわずかに変化したのだろう。

ただの、なんの効果もない外装アイテムと思われていたが、じつはそんなクリぼっちとは逆の行動をすると動きだす仕組みになっていたとは……。

そう結論付け、得心したとばかりに一人頷いたアインズは、腹の底に響くような重低音の波動を発し続けている嫉妬マスクと向かい合った。

「それで、お前の目的は何だ？ 自力で動きだし、いったい何をどうしたいというのだ？」

《決まっているだろう？ 俺はこの世界の全ての、ただごとと飾り立て、拝金主義と虚飾にまみれたクリスマスパーティーとやらを吹き飛ばしてやりたいのさ》

「そんなことをしてどうなる？ お前がやろうとしているのは、ただ楽しい気分にいる人たちに嫌がらせをするだけではないぞ」

《ああ、そうだ。そうだとも。ただの嫌がらせさ。だが、その何が悪い？ 復讐するは我にあり。こんな日に浮かれ騒いでいる奴らを、失意と絶望のどん底に叩きこんでやることの何が悪い》

「愚かだな。それに何の意味があるというのだ。全くの無益だ。まるで子供が自分の思い通りにならないからと言って、かんしゃくを起こしているのときほど変わらん。お前の言っている事には賛同できん

な」

《おいおい。お前は自分が何を言っているか分かっているのか？ まさか、お前から、そんな言葉を聞くとは思わなかったぞ》

嘲るような口調。

それには、さすがにアインズもムツとする。

『私からそんな言葉を』、だと。お前に何が分かるというのだ？』

《くくく。なんでも知っているさ。お前の事ならな、アインズ・ウル・ゴウン。いや、モモンガよ》

渦巻く瘴気が宙に浮かぶマスクに纏わりついたかと思うと、それはぶよぶよと蠢きながら、ある物へとその形を変化させる。

それは豪華な飾りが施された漆黒のアカデミックガウン——アインズが普段身に着けているグレート・モモンガローブそのものである。

《思ひだせ、アインズ。あの日の事を。あのどうしようもない虚しさとやるせなさに、ただ懊悩し、身悶えることしか出来なかったあの日の事を》

その言葉と共に、なんらかの魔法によるものか、アインズの頭にかつての記憶、すなわちクリスマススの日の思い出が濁流のように流れ込んできた。

かつてのあの日。

底辺サラリーマンとして、過酷な労働を強いられていたあの頃。

世間がクリスマスマス一色となっている中、そんな暖かなネオンの光に背を向け、帰りついたのは誰一人待つ者の無い、軋んだ扉のみが迎える自室。クリスマスだからといって、特別なごちそうがある訳もなく、いつものようにチューブ食で栄養を補給し、いそいそとユグドラシルに入ったものの、そこには……。

《たっち・みーは、その日は有休をとれたから、一日、家族と過ごすんだと言っていたな。レストランの予約も取れたし、娘の為のクリスマスプレゼントも何とか手に入れた、とな。今時の子供の好みはよく分からないとか、何やら人気の品だったらしく手に入れるのにも苦労し

たとかぼやきつつも、笑いながら言っていた。お前はそれに対して、『よかったですね』と口にしつつも、その心のうちは違っていた》
「や、やめろ……」

《クリスマススイブの日。お前はその日もリアルで予定がない仲間たちとわいわい楽し気に過ごしながらも、ちらちらとログイン表示のないたち・みーの名前を見ては、嫉妬と憎悪に燃えていたな》
「やめろ！」

《今の牙を抜かれ、クリスマスに浮かれるお前の姿をかつての仲間たちが見たら、なんというだろうな?》

その言葉と共に、在りし日のギルメンたちの姿が浮かび上がってくる。

彼らは口々にアインズを非難した。

『モモンガさん、正気ですか！ 俺たちはずっとクリスマスを憎もうと語ったあの言葉を忘れたんですか?』

アインズの脳裏でペロロンチーノが悲痛な面持ちで叫ぶ。

『墮落したな、モモンガさん』

ウルベルトが蔑みと失意の表情で吐き捨てる。

それ以外にも、あの日、アインズ——モモンガと共にユグドラシルをプレイし、嫉妬マスクを受け取った幾多のギルメンたちが虚空より現れた。

彼らはアインズの周囲を取り囲み、その心変わりを強く詰った。

四方より飛び交うギルメンからの糾弾に、アインズは両耳を——耳があつたと思しき場所を——押さえて、力なくその場にくずおれる。アインズにとって、最も大切なものは友人——ギルメンである。その友人たちからの痛罵の声。

それはアインズを精神を、あたかもキリでぐりぐりと抉るかのよう

に傷つけた。
アインズは無限に反響するかのとき罵詈雑言の雨から逃れるように身をよじらせ、嫉妬マスクに問いただす。

「お、お前はなぜそんな事を知っている?!」

《なんでも知っているさ。俺はお前で、お前は俺なんだよ》

暗黒の瘴気はその密度を増し、ついには完全な実体を持って、その場に出現した。

まさに今アインズの前にいるのは、頭部に嫉妬マスクをかぶったアインズそのものの姿であった。

《アインズ。自分に嘘をつくのはよせ》

急に優しいトーンで語りかけてきた嫉妬マスクの言葉。それは甘い蜜にも似た毒のように、アインズの心に沁み込んでくる。

「お、俺は……」

《さあ、アインズ。我慢することは無い。お前には力がある。ならば、お前のしたいように、好きなようにやっつけていいんだ。お前の思いを、その心の内に秘めた本当の思いをさらけ出せ》

「……う、ううう……」

《全てはお前の気のおもむくまま。お前を不快にさせる者たちを、クリスマスなどという作られた伝統行事に浮かれはしゃぐ愚かな連中を、そんな奴らがはびこるこの世を、破壊しつくしてやろうじゃないか!》

そう言うと嫉妬マスクをかぶったアインズの姿となったそいつは大仰に、バツとその両腕を広げた。

すると、その実体化したローブの袖が^{そで}ベチャリと何かに触れた。

《うん?》

「小林さんのケーキに何してるんですか?!」

振り向いた嫉妬マスクアインズに、トールのブレスが吐きつけられる。

ぎゃああああ、という悲鳴と共に一瞬で黒焦げになる、嫉妬アインズ。

そのまま、床にどうと倒れた。

「まったく、もう」

ぶんぶん怒るトール。

そちらに目を向けてみると、どうやらすでにラッコ鍋の騒動は一段落しており、全員コタツに入って、切り分けられたケーキを頬張りながら、アインズと嫉妬マスクの会話をまるで何かの出し物かのごとくに眺めていたらしい。

その大した事でもないかのような様子でこちらに視線を向けていた彼女らを前に、アインズはようやく我に返った。

先ほどのやり取りを他の者に見られていたかと思うと、何やら心の奥から気恥ずかしさがこみあげてきて、こりこりとそのピカピカの白い頭蓋骨を搔いた。

《……アインズ……アインズ……》

倒れ伏した嫉妬マスクが、かすれた声でなお呼びかける。

《……アインズ……忘れるな。……お前の心の中には常に俺がいることを……お前の、そしてお前の友人たちが語った、あの時の真の願いは、この腐れきった世を……》

「だから、うるさいですよ」

苛立たし気に再度、吐かれたトールのブレスによって、今度こそ完全に焼き尽くされ、嫉妬マスクは消滅した。

決め台詞すら最後まで言いきる事が出来ず、消し飛ばされてしまった嫉妬マスク。アインズはそれが消えた跡を、ただ眺めていた。

脳裏によみがえってくるのは嫉妬マスクが配布されたあの時のこと。

アインズにとって最も大切な、かけがえのない友人——ギルメンたちとの会話。あの時、彼らと交わした言葉。この世界の不条理を呪い憎む言葉が、アインズの頭の中で幾度もリフレインされる。

そうして立ち尽くす彼の背に声がかけられた。

「アインズさん」

振り向くとそこにいたのは、一人佇む^{たたず}アインズに優しげな視線を投げかける小林。

「アインズさんもコタツに入らない？」

そう言って、すぐ脇の座布団をポンポンと叩く。

「アインズー、一緒にコタツ入ろー」

「うむ、アインズ殿。アインズ殿も一緒にテーブルを囲もうではないか」

「そうですね。アインズさんは食事は出来ませんが、香りを楽しむことは出来るようですから、紅茶でも入れましょうか?」

「なー、ケーキ食べ終わったら、ゲームしようぜ」

「あ、あのアインズさん。アインズさんってすごい魔法が使えるんですよね。お話を伺ってもいいですか?」

「ほーら、アインズさんもクリスマスを楽しもうよ」

口々にかけられる声。

「は、……はははははは」

アインズは笑った。

とても朗らかに。

「ああ、では私もコタツにあたらせてもらおうかな」

そう言って、アインズは皆の許へと足を進める。

かつてアインズはクリスマスを憎んだ。

クリスマスなど、ただの資本主義的搾取だなどと言って、そんなイベントで盛り上がる人々に侮蔑の視線を向けていた。

だが、それはすべて、一緒に過ごす人がいなかったからだ。

早くに親を亡くし、リアルに友人もろくにいなかったアインズにとって、テレビなどで流れる楽しいクリスマス光景など、ただの嘘偽り、幸せな家庭という空虚なプロパガンダとしか思えなかったのである。

アインズにとって、友人と言えるのはゲームの中、アインズ・ウール・ゴウンの仲間たちだけであった。

しかし、クリスマスはそんなアインズと友人たちとの仲を阻んだ。アインズ・ウール・ゴウンの仲間たちの中にも、リアルでのクリス

マスイベントを優先させ、その日はログインしない者たちがいた。アインズがクリスマスマスを憎んでいた真の理由。

それは、友人たちが自分とのゲームよりもクリスマスを選んだからという事に他ならない。

言うなれば——アインズは、クリスマスに嫉妬していたのだ。

だが、今は違う。

今、アインズには一緒にクリスマスを過ごす人たちがいるのだ。

アインズにとって最も大切な存在。

それは、ともにユグドラシルを駆け抜けたアインズ・ウール・ゴウンの仲間たちだ。

そのことは今でも変わらない。

いや、終生変わらないと誓える。

彼らとの絆はアインズにとってかけがえのないものであり、生きる全てでもある。

しかし——。

しかし、昔の友人がいるからといって、新たに友人を作っただけはないという事もない。

かつての友人たちこそが最も大切であるとはいっても、今ここにいる新たな彼女らもアインズにとって大切な存在なのだ。

ならば、彼女らと共に過ごす時間もまた大切な、かけがえのないものであるのだろう。

そうして、アインズは和やかな笑顔が待つ団らんの輪の中へと加わった。

「ところで、アインズ殿」

和気あいあいとした空気の中、すでに1人で数ホール分はケーキを胃の中に収めているエルマが、口の端に生クリームをつけたまま声をかけてきた。

「なんだね？」

優しく尋ねるアインズ。

「いや、アインズ殿の後ろに、また先ほどと同様の歪みが生じているのだが」

「えっ？」

振り向いたアインズ。

そこにはエルマが言った通り、先ほどとまったく同様、空間に波紋が出来ている。

何やら嫌な予感がして、試しにそこに指先を突っ込み、アイテムボックスを開けてみると――。

バツと飛び出してきたのは、先ほどとほとんど同じ形状の仮面――嫉妬マスクである。

それが今度は3つも。

「どうやら、嫉妬する者たちのマスクAがやられたようだな」

「ククク……あいつは我ら嫉妬マスクの中でも最弱……」

「ドラゴンごときにやられるとは嫉妬マスクの面汚しよ……」

ゴゴゴという擬音が聞こえそうなほどのオーラを発しながら、宙に浮かぶ3つの仮面。

コタツに入ったまま、呆れたような目でそれを眺めていた小林はアインズに尋ねた。

「ねえ、アインズさん……あれって全部でいくつあるの？」

「……ええと……あと11個ほど……」

第10話 足し算の出来るゴリラは夕食の後に缶ビールを飲むか？

ある朝目覚めると、小林は自分が一匹のゴリラになっている事に気がついた。

「いや、意味が分からないんだが……」

呆れたような口調のアインズに対し、目の前のゴリラは「ゴツホあきゴツホ（私もわかんないよ）」と返した。

「日本語でおk」

「ウホゴホゴツホ（出来るなら、やっとするわ）！」

日本語ではなくゴリラ語で訴える小林。

いや、それが本当にゴリラ語なのかは聞いているアインズらには分からない。ゴリラ特有の言語なのか、それともサル類に共通の言葉ながらもゴリラの方言、すなわちサル語の中に分類されるゴリラ弁なのかもしれない。あるいは日本語を話しているのに、小林の声帯がゴリラのそれへと変化しているために上手く聞き取れない可能性もある。

何はともあれ小林がゴリラになったという、あまりといえばあんまりな唐突過ぎる出来事に、もはやなんと言っていないのやらといった按配のアインズ、そしてトール。

だが、この場において、もつとも困惑していたのは当の小林であった。

少々想像してみしてほしい。

よく晴れた休日の朝、あなたはカーテンの隙間から差し込む朝日とその身に受け、目を覚ます。まだ一日が始まったばかりだというのに、情け容赦のかけらもなく元気一杯に活動し、8分19秒の時間をかけて地球へとやって来たまばゆいばかりの光に目を細めつつ、ベツ

ドから足を下ろし、今日も一日頑張るかと大きく背伸びをする。

そして、やや寝ぼけ眼ながらも部屋の中を見回したところ、壁際に置かれていた大きな姿見が目に入る。

その鏡の中に映し出された自分の部屋。

いつもと変わらぬ光景のはずのその中央、そこに黒々とした毛並みを持つ一頭のゴリラがいたとしたら。

小林の部屋から響いた驚愕の悲鳴。

それを聞きつけたのは、早起きをして朝ごはんの用意をしていたツールと、カンナが買ったもののすっきり飽きて放置してしまっていたハンドスピナーを一晩中、延々と回し続けていたアインズであった。

二人は、すわ一大事かとばかりに小林の部屋へと飛び込んだ。

そこで二人が見たもの。それは本来この部屋の主である小林の姿ではなく、その代わりにどつかりと部屋の中央に直立しているゴリラの姿だったのである。

その後起こった一悶着。

騒がしさから小林のベッドに潜り込んでいたイルルとカンナが目覚まし、それを見たツールがまた激昂するなどして、ひとしきり大混乱に陥った。

いつの間にやら小林のベッドにもぐりこむ順番を決める方向に話がずれてしまっているツールらを横目に、アインズはおそらく小林と思われるゴリラに尋ねてみた。

「それで何か心当たりはあるか？ その辺に落ちていたゴリラの肉でも食べたとか？」

「ゴツホゴツホ（ある訳ねーよ！）」

骸骨なのに困り顔という器用な真似をしながら問うアインズに、小林は必死で今の状況を訴えた。

そう必死である。

何せゴリラなのだ。

説明するまでもないが、ここはいつもの小林家。南米やアジア、アフリカに広がる熱帯雨林などではなく、温帯に位置する日本。そのごく普通の都市にある、これまたごく普通のマンションの一室である。すなわち、普通に考えてゴリラがいるはずのない地であり、そんな地域でその辺をゴリラがのっしのっしとうろついていたら大騒ぎとなってしまうであろうことは容易に想像できる。

ちなみに本来、野生のゴリラの生息地はアフリカのごく一部に限られるため、南米やアジアなどで目撃されたら、それはそれで新発見だとして騒ぎになるではあるが、とりあえずそれは置いておく。

ともかく、ここはゴリラが一人で生きていけるような地ではないのである。

いや、ここは一頭でというべきか。

それはさておき、いやはやまったくもって、この日本という国は実にゴリラに厳しい国なのである。

ゴリラはゴリラとしてしか扱われない。そこに野生動物保護の国際条約などは適用されても、決して人としての基本的な権利は考慮されないのだ。

このまま元に戻らなかつたらどうしようという不安が、小林のまっ平らな胸の奥からむくむくと湧き上がってくる。

ゴリラとなった彼女には仲間もない。

今の小林は、この大都会に投げ出された身寄りのない一頭のゴリラに過ぎぬのだ。

確かにゴリラは強い。

およそ武器を持たない普通の人間対ゴリラであれば、どちらに軍配が上がるかなど火を見るより明らかである。

仮にプール一杯分の人間に対し、一頭のゴリラを投入するなどというハンデキャップマッチをもつてしても、おそらくゴリラ側の勝利は動くまい。

そこで繰り広げられるのは、まさにゴリラ無双といった光景であろう。

ゴリラは強いのである。

その強さは人間に比して圧倒的といえる。

だが、小林家に住まう面々——ツールにカンナ、それにイルルはドラゴンであり、さらにもう一人の居候であるアインズはアンデッドの魔法使いなのだ。

はつきり言つて、全員ゴリラより強い。

如何いかなゴリラとはいえ、彼女ら相手ではワンパンでKOされる程度の存在でしかない。

そんな彼らにこの部屋から力づくにでも追い出されようものなら、しよせんゴリラ初心者に過ぎぬ小林に抗えようはずもないのだ。

その先に待っているもの。

それはおそらく、通報を受けた警官による射殺であろう。

けつして通報を受けて駆け付けた警察官が、たつた一頭でそんなところにいるゴリラにも事情があるのだろうと斟酌しんしゃくしてやり、優しい言葉をかけて交番に連れて帰り、お茶の一つでも差し出しながら、話を聞いてくれるなどという心温まる展開は期待できまい。

運よく即射殺は免れたとしても、麻酔銃によつて眠らされ、目が覚めたときには動物園の檻の中という羽目になってしまいかねない。

そこで小林は一切の人権を与えられぬただ一頭のゴリラとして見せ物にされ、その後の余生をコンクリートの塙の中で過ごささざるを得なくなつてしまふだろう。

給与の面では優遇されているため完全にブラックとは言えぬまでも、激務といつてもいい仕事を日々こなしている小林から見れば動物園の生活は、プライバシーは全くないながらも仕事をする必要もなく三食昼寝付きというのは、いささか魅力的な響きではある。

だが、さすがにそれは御免ごめんこうむりたい。

そうして動物園内で生きることとなれば、種族維持のために他のゴリラとかけ合わされ、ゴリラの子をはらみ、ゴリラを出産するということになるかもしれぬのだ。

こう見えても、小林は乙女なのである。

そう、平たく言うと処女なのである。

二十四過ぎても今だに処女というのは、人によっては馬鹿にされるかもしれないが、エロゲの中には数千年生きているのに処女というもつとすごい者もいるのだから、その程度は誤差の範疇でしかない。

近年はイケメンゴリラなるものが秘かな人気となっているようだが、ともかく、たとえイケメンであろうともさすがに初体験がゴリラというのは、小林にとって絶対に許容できぬ一線であった。

いささか話がずれたが、まあ、何はともあれゴリラである。

いったいどうしてこうなったのか？

はてさて、それは皆目見当もつかぬ。

しかし、仔細はともかく、今の小林がゴリラである事は明々白々にして、紛うことなき、動かしがたい事実である。いかに自分が背中の毛並みを美しく銀色に光らせるゴリラであるという現実から目をそらそうとも、果たしてそれで事態は好転などすまい。

ようやく事態を把握したカンナやイルルは、ゴリラ小林の滑らかな毛並みを盛んに撫でまわして大喜びなのであるが、好評であるからといってこのままゴリラでいる訳にもいかなないのである。

小林は立派な社会人であり、会社においても皆から頼りとされる人物なのだ。

また、この小林家にとっても——イルルもいくらかは稼いでいるとはいえ——その家計の大部分をたった一人で支えるまさに大黒柱である。

けっして、どこかの元王様なんぞという肩書だけは持っている死の支配者オーバーロードのように、日がな一日テレビをみたり、ゲームをしたりと、まさに絵にかいたようなニート生活、墮落の極みともいうべき暮らしをしていてよい訳ではない。

まあ、本当にその気になれば、ツールやアインズが魔法等で何とか金を稼ぐことも出来るだろうが、とにかく何とかして元の人間に戻らなくてはならないのだ。

「では、とにかく小林の身体を戻す方法を探るとしよう」

穏やかな休日朝。ひとしきりの混乱の後、とりあえず皆で朝食をすませ、居間に据えられた大画面の薄型液晶テレビに映し出される総天然色のアニメを眺めながら、食後のコーヒーおよびホットミルクをすすりつつ行われた緊急家族会議によって、最終的にそう決議された。

そうして、小林家の面々は、小林が元に戻るための手掛かりを求め、家を飛び出すことにしたのである。

人間がゴリラになる。

おおよそ、まっとうな魔法や呪いの類いではあるまい。

まっとうなものではないのであれば、とりあえずまっとうな相手ではない者に尋ねるのがいい。

そういつた結論に達した彼女らは今、真ヶ土家へと向かっていた。

真ヶ土家。

小林の務める地獄巡システムエンジニアリングの専務の家である。だが、ごくごく普通の中小企業に勤める専務取締役というのは仮の姿。

その正体は、トールらのいた世界から渡ってきた魔法使いである。

そして、彼の息子である真ヶ土翔太もまた魔法使いとして日々研鑽を務める少年であり、さらにはトールらの友人にして桁外れの力を保有するドラゴン——ルコアが彼と使い魔の契約をして、その家に住んでいるのだ。

彼女、ならびにこの世界に住む魔法使いの一家ならば、かような異変に対してもなんらかの見識を持っているのではと期待したのである。

「いい天気だなー」

「ポカポカしてる」

皆でのお出かけにカンナとイルルがキャツキャとはしやぎまわる中、その後ろをてくてくと歩くのはツールと成人男性の幻覚をかぶったアインズ、そして困ったようなうなり声をあげる小林である。

「どうしました、小林さん？」

振りかえったツールの視線の先で小林はどうにも落ち着かないといったような様子で、その巨大な肩を可能な限り小さくすくめ、己が胸を掻きいだくように身を縮こまらせていた。

「ゴ、ゴホ（あ、あのさあ）……、ゴホゴツホ（これ、本当に私の姿は周りに見えていないの）？」

「ああ、心配ないとも。普通の人間にはいつもの小林の姿に見えているはずだ」

ルコアの許を訪れるにあたって、問題となったのは小林の姿である。

先にも述べたように小林はゴリラであるため、普通に出歩こうものなら実に目立つことこの上なく、不要なトラブルを招くことは目に見えている。いかにゴリラといえど、公共の場でのマナーは弁えねばならない。

そこで、アインズは一計を案じた。

ゴリラ小林の身体に幻覚魔法をかぶせ、他者からは彼女本来の姿、すなわち髪を後ろでくくり、大きめの眼鏡をかけた、実に平坦な胸部を持つ女性に見えるよう細工をしたのだ。

「私が小林さんに認識阻害魔法を使ってもいいんですけど」

「いや、それだと小林がいること自体、認識されなくなるだろう？ それで下手に街をうろつこうものなら、小林が交通事故に遭いかねん」

ツールが使用する認識阻害魔法。

それは、そこにいる存在を認識できなくなる魔法である。いうなれば透明人間になるようなものだ。

下手にそんな透明人間状態で交通量の多い街中を歩こうものなら、車や自転車にはねられかねない。人間と比べ圧倒的な質量を誇るゴリラの身体ならば自転車くらいには勝てるだろうが、さすがに制限速

度プラス十キロくらいの速度で走っている自動車相手では無傷とはいくまい。いや、その程度ならばまだ何とかなる。だが、さすがにプラス四十キロ以上でかつ飛ばしている車が相手となると——一方的にゴリラ小林側が負ける事はないかもしれないが——さすがに分が悪すぎる。決して小さくない怪我を負うことは間違いない。そもそもそんな無駄な事に命をかける必要性はどこにも感じられない。

その為、トールの認識障害魔法ではなく、アインズの幻覚魔法で誤魔化すことを決めたのである。

しかし、そこで問題となったもの。

それは体積だ。

小林本来の、人間である姿はほっそりとしたスレンダーな体形である。とくに胸部の厚みに関して言うならば、実に流体力学的に優れた体形をしている。

つまり、どうしてもどっしりとした体格のゴリラとは大きくかけ離れているのだ。

とくに横幅に関してはいかんともしがたい。ゴリラの身体に元の小林の幻影を重ねると、幻覚から実体が横に大きくはみ出してしまふ。仕方がないので、左右にはみ出た部分は透明にしておき、その透明部分に他の通行人や自転車衝突しないよう、トールとアインズが着かず離れず、彼女の脇を固めて歩くということをやっているのだ。

「——という訳で、他人からはいつもの小林にしか見えていないのだ。……だから、そういった仕草をする方が目立つから、止めた方がいいのだがな……」

「ゴツホホホ（いや、そう言われても）……」

アインズの言葉通り、今の小林（幻覚）は実に珍妙な姿勢をとって歩いている。

そのため、わざわざ声をかけてくるまでではないものの、通りすぎりの人々が奇異の視線を投げかけてくるのだ。

あまり長くはない付き合いながらも、アインズの魔法の凄さはよく知っており、大丈夫だろうとは頭では理解している。

——頭では理解しているものの、当の小林としてはどうしても心もとないのだ。

なぜかというならば——今の小林は一切の衣服を身に着けていない状態だからである。

当然であるが、小林家にゴリラサイズの服などない。

そもそもゴリラは服など着ない。

むしろゴリラが服を着ていたら、そちらの方が奇妙に思われるだろう。

万が一、うつかり見つかった場合でも、服を着ていないゴリラと服を着たゴリラ、どちらがおかしいかは明白である。

そういう訳で小林は、素っ裸に幻覚魔法をかけてもらっただけの生まれのままの姿——いや小林は生まれつきのゴリラではないから『生まれのまま』ではないが——で街中を歩いているのだ。

本来であれば、アインズの言葉通り、とくに隠そうともせず普通に歩いていれば、それだけでよいのだ。それが一番いい。

頭部などの例外を除き体に毛がほとんど無い普通の人間と異なり、ゴリラはそれほど長くはないもののほぼ全身が自らの体毛で覆われている。

そういう意味では大事なところ、すなわちデリケートゾーンは隠されてはいるのであるが、元が人間である小林としては、その身を覆う布がない状態で人前に出るとするのは、払っても払いきれない忌避感が心の奥底に根強くある。魔法によって隠されているとはいえ、素裸であるという事実からくる気恥ずかしさにより、どうしてもその胸元や股間を手で隠しがちなのである。

アインズの魔法による幻覚は、いちいち細かい部分まで魔法で動かし続ける必要はない。本体であるゴリラ小林の動きを、幻覚小林が自分でトレースする仕様となっている。

そのため、本体であるゴリラ小林が胸元と股間を腕で隠すような挙動をすれば、幻覚によって作られた人間小林もまた胸元と股間を腕で隠すような仕草をすることとなる。

はつきり言つて、向こうから歩いて来たら、気の毒な人として目をそむけて通り過ぎるような立ち居振る舞いとなつてしまつているのだ。

小林としても、それは分かつてはいる。

分かつてはいるのだが、どうしても思い切りがつかないのである。

絶対に見えないから大丈夫と、平然としていられないのである。

どうしても裸で街中を歩くという羞恥心を拭いきれないのである。

かと言つて逆転の発想として、普段、生活している街中を衣服を身につけないで歩くことにより通常、感じる事の出来ない開放感や背徳感にひたるといふ、実には上級者な楽しみ方などごく理性的な常識人である小林には出来ようはずもなかった。

「ええと、翔太君の家まであと10分くらいですんで、もうちよつとだけ我慢してくださいね」

「ゴホ（うん）……」

そんなことを話していたところ不意に、カナナと共にはしやぎ走り回っていたイルルが「あー、そうだ！」と、大きな声をあげた。

いったいどうしたのかと視線が集まる中、首元がよれたTシャツの下でブルンブルンとゴムまりのような胸を揺らしながらイルルは言つた。

「翔太から借りてた本あつただけど、家に忘れてきた！　ちよつと取りに戻つていいか？」

「ゴ、ゴホツ（え、ええっ）!?!」

——戻る？

ゴリラの姿とはいへ、街中で全裸という露出プレイに耐えて、ここまで歩いて来たのに？

「あんたねえ……。ここまでできたのに、今更、戻れつてんですか!!」

小林に代わつて苛ついた声を出したツール。そんな彼女を、アインズは「まあまあ」となだめる。

「落ち着くのだ、ツールよ。なに、忘れ物を一つ取つてくるだけだろう？　なら、ちよつと転移魔法で家に戻ればいいだけの話だ」

「ゴホゴホ（うん、そうだね）。……ゴツホ（つて、ちよつと待て）！
ゴホゴホ、ゴツホ（転移魔法使えるんなら、街中歩かずにそれで翔
太君の家に行けばいいじゃん）!!」

実にゴリラらしく平手で、そのかつてとは比べ物にならぬほど厚み
のある胸を叩き、小林は怒りをあらわにした。

ちなみによく創作物などでゴリラは握りこぶしで胸を叩いていた
りするが、実際に叩くときは平手で叩くのである。

さすが小林。

本格派である。



「え？…これは……なんだろう？」

翔太は顎に手をやり、難しげな顔で首をひねる。

その顔色を見て、小林は落胆の表情を、そのゴリラの顔に浮かべた。
落胆するゴリラ。

その時の表情をカメラにでも撮っておけば、ゴリラの生態研究に役
に立ったかもしれないが、それはさておき、ここならばもしやと思っ
て訪れた翔太の家でも解決の手がかりはないという事実に小林は肩
を落とした。

真まがヶ土家つちを訪れた一行。

彼女らを出迎えたのは、この家の一人息子である翔太であった。

突然の来客。それも小林家の面々全員での来訪。そして自宅の玄
関前に漂う怪しげな黒い霧状の何かの存在。更には何故なだか彼らと
共にいるゴリラの姿。

それらの合わせ業にいきさか驚いたものの、さすがは未来の大魔法
使いを夢見る少年にして、普段から非常識極まりないドラゴン連中と
付き合っている逸脱者。まあ、そんな事もあるだろうと、色々飲み込
んで、話を聞くことにした。

だが、それで聞かされたのは、まったくといっても手掛かりにもならないような——朝起きたら小林がゴリラになつていたという荒唐無稽な話。

判断するところか、かりもない説明に、さすがの彼も頭を抱えてしまった。

とにかく何か手掛かりでもあればとあらためて調べてもらったわけだが、その結果が先の通り。

さっぱり分からないというものであった。

だが、これはある意味、仕方がない事であると言える。

およそ、この世に存在する魔術の中において、人をゴリラへと変化させるという魔術など知っている者の方が少ないだろう。けっして、それを知らぬからといって、それを理由に翔太が未熟であるなどとはだれにも言えまい。

古代の伝承において、人間が他の種族、生物になったという事例は枚挙にいとまがない。しかし、人間が豚や魚、鳥などの生物になるといった例ならば聞いたこともあるが、さすがにゴリラになったなどという話は聞いたことがない。

なにせゴリラはアフリカの奥地に生息していたため、ほんの百年ほどまえまでは西洋文明世界に発見されることのなかつた生き物なのだ。

すなわち、古代においてはゴリラとは存在自体知られていなかったのである。

そんなものに他人を変化させる魔法。

むしろ知っていたとしたら、そちらの方がおかしいとしか言いようがない。

ともあれ、わざわざやって来たのに何の手掛かりも得られず、がっかりしてしまつた一行。

また頼みの綱であるルコアも、あいにく今は外国に行つてしまつており不在らしい。いったい、どこに行つたのだろうか？ アメリカにで

も行って流体力学の研究でもしているのだろうか？

「あー、でも……」

「ウホ（うん）？」

「なんだか小林さんの身体からは不思議な魔力のようなものを感じます。……いや、これは魔法による魔力じゃなく、もっと別な……そう、なんらかの呪いのような……」

その言葉に、アインズは確認するよう小林の方を振り返った。

「ふむ。呪いか……小林よ、その辺で野良ゴリラを倒すなどしなかったか？ それの原因で、ゴリラの呪いを受けたとか」

「ゴホ、ゴホゴツホ（だから、ねーっつーの）!!」

そんな掛け合いを横目にしていたトールの脳にピンと閃くものがあった。

「ん？ 呪い？ ……呪いといえば……」



「ふむ。これは呪いだな」

ゴリラとなった小林の姿を一瞥し、黒い執事服に身を包んだ男——
ファフニールは事もなげに言った。

ファフニールはトールの知り合いの中でも、とくに呪いについては詳しいドラゴンである。そこで彼ならば何か分かるのではと一縷の望みをかけ、彼が居候している滝谷の家へとやってきたのだ。

「見たところ、肉体変化の呪いがかかけられているな。それと会話の翻訳、そして認識に対するものもだ」

「会話の翻訳ですか？ ああ、なるほど。それで小林さんはゴリラのようにゴツホゴツホと喋っているのに、聞いている私たちは小林さんが何を言いたいのか理解できるというわけですね」

得心したと頷くトール。

「それでもう一つの認識に対するものとは？」

「ゴリラの姿となつていゝことを他者には認識できないようにするといふものだ。もつともこちらは大したものではなさそうだから、ある程度の魔力を持つてゐるものには効力を発揮せんだらうがな。だが、魔力を持たない、この世界の人間たちには効果を発するだらう」

「あー、そうなんですか。つまり、翔太君みたいな魔法使いには、今のゴリラになつた小林さんの姿が見えますが、その辺の魔法も使えない下等な人間どもは今の小林さんを見ても、ごく普通の、何の変哲もない、いつものかっこいい小林さんとして認識されるということですね」

その答えを聞いて、とりあえず一安心した。

つまりは、うっかり幻覚魔法が解けるなどして今の姿をさらしても、街中にゴリラがいると大騒ぎになる可能性はないという事だ。

わずかながら安堵の空気が流れる中、骸骨であるその顔は実に表情の変化が分かりづらいのではあるが、ともかく難しい顔をしてアインズは腕を組んだ。

「うーむ、分からんな」

「ウホウホ（なにが）？」

アインズは小首をかしげるゴリラに、ちらりと視線を投げかけ言った。

「いや。お前に魔法をかけた何者かの目的だ。今、ファフニールが言った通りだとすると、小林に魔法をかけた何者かは、小林の肉体をゴリラに変化させておきながら、その言葉も通じるし、周囲の人間にも気づかれぬように細工をしているという事だ。いったいなぜそんな事をする必要があるのだ？」

言われてみれば確かにそうだ。

対象者の同意なく、他人の姿を強制的に変えてしまう。

これは本来であれば、それによつて対象となつた者を困らせることを目的とするものだらう。

しかし、実際には小林に呪いをかけた何者かは、身体がゴリラになつた以外は何も不自由な事態にならぬよう配慮しているという事になる。

いったい、犯人の目的は何なのだろう？

「……ゴホホ（いたずら）？」

「いたずらにしても、誰が小林にそんな事をするんだ？」
ふむと考える。

呪いなどに堪能で、標的に選ぶほど小林を知っていて、且つちよつとしたいたずら程度に留めておくような人物。

ツールらに関わってから、小林もそれなりに、魔法を使うような非常識な面々との摩擦も生まれている。

とりあえず思いあたるふしとしては、かつてイルルを殺そうとして小林に邪魔をされた屠龍派のクレメネとかいうドラゴンか？ それとも、この前、翔太について行った魔法の試験でトップをとったことによる逆恨みだろうか？

「うーんと、それはとりあえず置いておくとして、今はまず小林の身体を元に戻す方法はあるのか？」

カンナと共にあまり教育にはよろしくない滝谷の部屋を搜索していたイルルの言葉に、それもそうだとハツとするツールとアインズ、そして当の小林。

全員の視線が集まる中、フアフニールは口を開いた。

◇ ◇

「じゃあ、学校、行ってくる」

背中には処女の生き血よりもなお赤い深紅のランドセルを背負い、そしてその頭部にはじゅくじゅくと垂れ滴る膿したたよりも黄色い帽子をかぶったカンナが玄関で靴を履き、振り返る。

ちなみに今述べた修辞表現は以前、ツールが口にしたところ、当のカンナにはたいそう不評であった。

「それじゃあ、僕達も会社に行ってくるよ。心配しないで。こっちは何とかうまくやるよ」

そう言うのはプライベートでのオタクモードではなく、さっぱりと

した社会人モードの滝谷である。

その隣に立つ小柄な人物。その顔の下半分を白いマスクで覆い隠してはいるものの、大きめ眼鏡に髪を後ろでひつつめたいつもの小林——の姿を真似た二重の影^{ドッベルゲンガー}である。ゴリラとなつている小林の代役としてアインズが召喚したのだ。

本来の小林の能力は完全には再現できないのだが、マスクをして風邪を装い、またそれに合わせて滝谷にフオローしてもらうことで、なんとか今日一日をしのごうという考えであった。多少は不審に思われるかもしれないが、最悪〈記憶操作〉^{コントロール・アムネジア}や〈時間停止〉^{タイム・ストップ}が使えるアインズの力で何とかできるだろう。

「ゴホゴツホ（行つてらっしやい）」

見送る留守番組の前で金属の扉が閉められる。

ボタンと音を立てて閉まった扉。

それを小林はゴリラの黒い瞳で見つめていた。

哀愁を漂わせている銀の毛並みを持つ広い肩。

すると不意に、その首に抱きついてきたものがある。

ちらりと肩越しに視線を巡らせると、ふわりと飛び上がったツール

が小林の首に優しく腕を廻していた。

ツールは小林の首にすがりついたまま、言葉を紡ぐ。

「小林さん……私はこれからもずっと小林さんのそばにいます。たと

え小林さんが人間に戻れなくても、ずっと一緒ですよ」

昨日、ファフニールの口から発せられた、小林の呪いを解く方法。

それは呪いをかけた相手を特定した上で、解呪を行わなければならぬというものであった。

すなわち、小林に呪いをかけた本人が誰なのか、はつきりしないうちにはその身にかかった呪いは手の打ちようがないということである。

小林に呪いをかけたのはいったい誰なのか？

それは分からない。
つまり、現状、小林を元の姿に戻すことは出来ないということである。

とにかく心当たりがありそうな人物を一人ずつ、しらみつぶしに調べていかななくてはならない。

しかし、そうした手間をかけても、その結果として犯人が見つからばいい。

問題となるのは、それでも見つからなかったらである。

小林の全く与り知らぬうちに、それこそ逆恨みなどで狙われていた場合、もしくは完全に無作為のまま通り魔的に対象とされたなどの場合、犯人の特定は非常に困難となる。

そうした場合——小林は二度と人間の姿に戻れないのだ。

「小林さん……」

トールは小林から身を離した。

その目に涙を浮かべつつも、小林に優しく微笑む。

「私はドラゴンですからね。私にとって、小林さんが人間でもゴリラでも大した違いはありませんよ」

「ゴホ（トール）……」

「大丈夫ですよ。この国には居づらくなるかもしれませんが、世界中のどこへ行っただっていいじゃないですか。それに、なんならこの世界の『世界中』にこだわる必要もありません。私がいた世界で一緒に暮らしませんか？　小林さんに私がいた世界を案内しますよ」

——異世界か……。

小林はトールらの故郷、彼女らの話に出てくる異世界とやらを頭に思い浮かべた。

小林の労働環境は過酷である。

トールが家に来てくれたおかげで、家事の一切を任せることがで

き、だいぶ楽になったとはいえ、日々、納期に追われ、慢性的な眼精疲労や腰痛、肩こりに悩まされる毎日だ。そんな生活から解放され、本やゲームなどでよく見る剣と魔法の溢れるファンタジー世界に行くというのは、それなりに胸躍るものがある。

仮にゴリラから元に戻れないとするのなら、最終的にそういう選択もしなくてはならないかもしれない。

先にも同じような事を述べたが、この日本において——いや、この世界において、人ではなくゴリラとして生きるとは困難極まりない。このままゴリラの姿を隠して生活するのも、いつか限界が来てしまうであろうことは明白である。

そう考えた場合、ゴリラの姿とはいえ、向こうの世界で過ごすというのには悪くはないかもしれない。話に聞く分には、向こうの世界はだいぶ殺伐としていて命の危険も多そうだが、最強種であるドラゴン——トールの庇護の下ならばおそらく安全だろう。

だが、そう簡単にその提案に飛びつくわけにもいかない。そう思いきつてしまう事ができない部分が、小林の心の中に確かに存在する。はつきり言ってしまうえば、この世界に未練があるのだ。

向こうの世界に行くという事は、この世界との別れを意味する。実家の家族や会社の同僚、それに様々な形でつながりのある知り合いら……。小林は、両親を幼くして無くした天涯孤独な身であり、友人といえどオンラインゲームでの繋がりだけなどという寂しい人物とは違うのだ。

それらすべてを投げ捨てるという選択は、軽はずみに、生半^{なまなか}な決断でできるものではない。

全てを捨てて、トールと共に向こうの世界に行くか。

それとも、この世界で何とか騙し騙し生きていくか。

脳内を様々なものが駆け巡り、懊悩の表情をそのゴリラの黒い顔に浮かべる小林。

そうして立ち尽くす彼女に対し、ことさら明るく声をかけたのはイ

ルルであった。

「あ、そうだ！ 小林、どうせ人間を止めたんなら、いつそゴリラも止めて別の種族にチェンジしてみるっていうのはどうだー？」

「ゴホ（え）？」

「ほら、人間みたいに寿命のある種族じゃなくなつてさ。エルフとか悪魔とか」

それを受けて、いささか重くなつた空気を掻き消そうと、アインズもまた明るい声を出した。

「ははは。そうだな。どうせ人間以外の種になつたのだ。いつそ別の種族になつてみるというのもいいかもしれない。どうだ？ せっかくだからアンデッドになつてみないか？ 食事や睡眠は不要だし、なにより疲労などもないから腰痛とおさらばできるぞ」

その提案には微妙に惹かれる小林であった。

「何を言ってるんですか」

トールは白手袋をつけた指先で、その瞳に浮かんでいた涙をぬぐい捨てる。

「小林さんがなるのは、もちろんドラゴンですよ！」

「ウホ、ゴホホ（いや、ならんし）……」

「えー、何ですか？ ドラゴンお薦めですよ。いや、むしろドラゴン一択というより他にありません。なぜなら、ドラゴンこそが最強にして究極の存在。わざわざ他の劣等種族になるなんて選択肢はありませんよ」

いつもの調子を取り戻したらしい陽気なトールの言葉に、室内は笑い声に包まれた。

「ははは。とにかくだ。そういうのは後々、ゆつくり決めようじゃないか。どうしてもこの世界にいられなくなった時の最後の手段としてな。そうなる前になんとかしよう。魔法なりなんなりでお前に呪いをかけた者を探してみるさ。だからあまり悲観することでもない。案外、すぐ見つかるかもしれん。……まあ、何はともあれ、会社の方

は私が召喚した二重の影^{ドッベルゲンガー}を滝谷やエルマがフオローすることで何とかなるだろう。それに専務も事情を知ってくれているしな。当分は心配あるまい。そして、とりあえずは、だ。小林よ」

眼窩の奥の赤黒い光。その視線が小林のゴリラの瞳を射貫く。

「お前に今、必要な事。それは心と体を休める事だ。これまで働き詰めだったんだ。とにかく、しばらくはこの降ってわいた休暇を堪能するといい」

「ゴホッ、ゴホウホゴッホ（そうは言っても、なんだか何もしない日つてのは落ち着かないんだけど）」

「ワーカホリックというヤツだな。しかしな、それで体や心を壊しても、会社は最後まで保証はしてくれんぞ。利用され、使い捨てられ、後は路頭に迷うだけだ」

何やら微妙に重みがある発言に小林家の面々は気圧されたように黙った。何故、異世界において王様だったとかいうアンデッドのアインズが、そんな妙に実感のこもったようなことを言うのだろうかと内心、首をひねる。

「ともかく、今お前がやるべきこと。それはこのゲームをやる事だ！」
そう言うのと、アインズは柵からみんなで遊べるタイプのゲームが入った箱をひっぱり出してくる。

「ゴホウホ、ウホホ（平日の朝っぱらからゲームとか、いいのかな）？」
「時間や曜日など、人が勝手に自らを縛るために考えた概念に過ぎん。時間が人を縛るのではない。人が時間を左右するのだ」

「ゴホゴホホ（そんな名言みたいなことを言われても）……。ゴホ、ゴッホ（まあ、いいか）。ウツホ（やろうか）」

「おー、小林、やろうぜー。私、駄菓子屋の仕事は午後からだからたっぷり遊べるぞー」

「ええ。じゃあ、私も混ぜてもらいます」

先ほどまでの陰鬱な空気はどこへやら、リビングにはにこやかにして陽気な空気が広がっていた。



◇ ◇ ◇ ◇

一方、こちらは朧塚小学校。

登校したカンナの姿は、自分のクラスである3年2組の教室に
あつた。

今、クラスの中は始業前の遊びはしやぐ子供たちの賑わいで満ちて
いる。

「ウキヤツ、ウキヤツ（昨日のテレビ見た）？」

チンパンジーが鳴き声をあげる。

「グエツ、グエツ（見た見た。チョーかつこよかつたよね）」

マンドリルが響くような声を発する。

「キーイツ、キーイツ（あのゲームって、新しい街にいたらどうする
んだ）？」

クモザルが叫ぶ。

「ボオーウツ、ボオーウツ（ああ、あの後はまずお城に行つて……）」

オランウータンが吠え返す。

見渡す限り、多種多様なサルの仲間が教室中にひしめき合つてお
り、そこかしこで鳴き声をあげている。しかも、それぞれが種族ごと、
別々の鳴き声をあげているというのに、当の本人——いや本猿という
べきかもしれない——たちは互いが何を言っているのか理解できて
いるようであつた。

あたかも動物園の如き光景。

そんな喧騒の中、カンナは——。

——マジ、やばくね？

と一人、自分の席に座つたままであつた。

と、そんなとき、教室の扉が開かれる。

そこに現れたのは薄緑色のトレーナーに臙脂色のミニスカート、さ

らには白のハイソックスを身につけた、太陽の光が反射するおでこも眩しい、才川リコであった。

「おはよー」という言葉と共に、教室内を見回した才川は――。

「――はあっ……!?!」

という言葉と共に、絶句した。

扉を開けた姿勢のまま、教室に入ることなく戸口に立ち尽くし、目の前に広がる奇怪極まりない日常の光景に目を丸くする。

そんな彼女に軽快な足取りで一頭の猿が近づいていく。

「ヴェーエ、ヴェーエ（おはよう、才川さん）」

そう和やかに挨拶したのであるが、あいにくと声をかけた――おそらく女性、もしくはメスと思われる――その姿は全身鮮やかなオレンジ色で腹部は白、そして頭頂部や肩口から背中にかけて暗色の体毛を生やした金糸猴である。フレンズ化したものでもないリアルな金糸猴を間近で見ると、そのつぶらな瞳はわりと怖い。

いまだ小学生という身のため、人生経験も少なく、生まれてこのかた金糸猴に挨拶されるなどといった体験をしたこともない才川としては、返事をするより先に、ただ口を金魚のようにパクパクとさせるより他になかった。

その様子を見ていたカンナは、音を立てて席から立ち上がり、彼女の許へと小走りに駆け寄った。

「才川。私に分かる?」

そう言っただけのほっそりとした手を取る、カンナのぶにぶにとした手。

その感触に才川は、「ぼへー!」と教室内のサルたちに負けぬ奇声をあげた。

クラス中のサルの視線を集める中、間近にせまるカンナの顔によつて、パニック状態だった才川の脳が半強制的にいつもの状態へと戻った。

「あ。カ、カンナさん。あなたはサルじゃなくて普通なのね」

「才川。ちよつと来て!」

彼女の言葉を聞いたカンナは、彼女の手を握り教室の外へと駆けだした。

「だ、駄目よカンナさん。私たちはこれから授業が……。ああ、でも、こんなに積極的なカンナさんもステキ。ええ、そうよ。これは二人だけの愛の逃避行……。カンナさん。私、カンナさんとだったらどこへでも行くわ！」

何やら気持ちの悪い恍惚の表情を浮かべて口の端から涎を垂らしている、そんな才川の顔を見ることなく、カンナは後ろ手に彼女の手を掴んで走っていった。



そうして、一連の事態は急転直下、解決を見た。

今回の一件、その原因はなんと魔法とは無縁のはずの才川だった。

カンナが気付いたきっかけは二つ。

クラスメイトの全員がサルの仲間となっていた小学校の教室において、カンナを除けば唯一、才川だけがサルになっていなかった事。

そして、ファフニールの言によれば、魔力を持っている者でもない限りは、自分や他人が変化した事にすら気がつかないだろうということだったのに、ごくごく一般人で魔法の才能などないはずの才川が、他の者たちがサルになっているのに気がついた事である。

そうして、才川を連れて小林家に戻り、アインズによって記憶を読んでもらったところ、事のあらましが判明した。

どうやら一昨日の晩のこと、才川家ではとある映画を観たようだった。

それはかなり昔に作られた有名映画の前日譚を最新の技術で撮影したものであり、内容を大まかに語ると、知能を持ったサルたちが人間に対して自由の為の戦いを挑むというものであった。

それを観た彼女は興奮冷めやらぬまま自分の部屋で、彼女の姉でありながら、無類のメイド好きがこうじて自宅でメイドを演じているジョージこと才川苗相手に、あれこれと語り合ったらしい。

そうしていたところ、ジョージとある一冊の本を持ってきた。それはなんでも、知り合いからもらった様々なおまじないが載っている本だという。

当然ながら、才川自身はそんなおまじないなど信じてはいなかったものの、映画を見た後、さらに夜寝る前のテンションのまま、冗談半分でそこに書かれていたおまじないを実際にやってみたのだそう。

対象が頭に思い浮かべた姿になるというおまじないを。
クラスの皆に。

そうしてその翌日は休日であったため、彼女は自分が引き起こした事態に気がつくことは無かった。

そしてサルへと変わったクラスメイトたちはというと、こちらもまた何ら異常に気付きはしなかった。ファフニールの語ったとおり、そのおまじないには対象の認識を捻じ曲げる付属効果があったためである。

そして翌々日になり、普段通りに登校してきた才川が目にしたのはサルで溢れた教室と、そんなクラスの中、唯一、人としての姿のままだったカンナというわけなのであった。

真相が分かったアインズらはすぐさま、才川家へとおもむき、そして難なく才川がおまじないに使用したという本の回収に成功した。

なんら魔法の知識も才能もない才川姉妹でも、小学校の1クラス数十人に同時に魔法をかけるなどという、熟練の魔術師でも簡単とは言い難い魔術の行使を可能とした本。

その表紙に書かれていたのは、いかにもファンタジーっぽい宝箱の絵、そして『呪いアンソロ2』というタイトルであった。

何のことは無い。

小林に似合うメイド服はどんなものかという名目で小林家に知り

合いが集まった際のこと、初対面のジョージーに対し、ファフニールがコミケで売れずに余っていた在庫の同人誌を一冊くれてやったらしい。

一般人であるジョージーはそれがまさか本当に呪いがかけられる本だとは夢にも思わず、映画を見て興奮した妹を喜ばせようとそこに書かれていたやり方をやってみたというのが真相らしかった。

そこで一つ疑問となるのは何故、小林がゴリラになったかということである。

本来であれば、才川と同じクラスであるカンナこそが、対象となるはずだろう。しかし、彼女はその魔法の影響を受けることなく、代わりにゴリラになったのは小林であった。

それはどうしてかといえ、その日の夜、カンナは普段使用しているツールと共有のベッドではなく、小林のベッドにもぐりこんでいたことにある。

そこへサル化の魔法が飛んできたのだが、幼いとはいえドラゴンであるカンナは魔法に対する強力な抵抗がある。本当の魔法に精通した者が使用したものならばいざ知らず、何の魔力も持たない一般人の才川が、ただ本に書いてある通りの事を、それもあやふやなやり方で発動した魔法など、彼女に効力を発することは出来なかった。

だが、そうして弾かれた魔法の余波。それが、すぐ近くにいた小林へと降りかかったというのが真相のようなのであった。



ともかくそのおまじない——呪いをかけた張本人の特定に成功し、どのような魔法を使ったかも判明した。そして魔法の知識など欠片もなく、ただ冗談交じりにそれをやっただけの才川には、わざわざ呪いを邪魔してやろうなどという意思もない。

そうして無事に全ての呪いは解かれ、小林は元の眼鏡をかけた平坦

な胸を持つ女性へと戻ることができた。

才川のクラスメイトらも、同様に人へと戻った。もつとも彼らはそもそも自分たちがサルになっていたという意識自体がないため、何か異変があったことすらも気がついていないのだが。

そうして最後に才川の記憶を少し修正した。

彼女が教室についた際、その顔色が悪く、また様子がおかしい事にカンナが気がついた。そしてカンナによって保健室に連れていかれる途中で貧血を起こして意識を失い、そのまま昼まで休んでいたという形にして、一連の事態は無事、決着を見たのである。

イルルやカンナはゴリラ小林の美しい毛並みの手触りを若干惜しんだのだが、小林に頭を撫でられることで機嫌を直した。それを見たトールが自分も撫でろと言いだし、小林はそれに応えて撫でてやったのだが、すると今度は全身を撫でてくれと全裸になったところ、裸のまま正座させられ説教されるという顛末になった。

すべては日常に戻った。

幻覚をかぶせられ、肉体はゴリラの状態であったとはいえ、裸のまま街中を歩いたことが忘れられない小林が、あの奇妙な開放感をまた味わいたいと誰もいない深夜を見計らって、全裸の上にコートを羽織っただけの姿で街を徘徊するなどという、実にペロロンチーノな展開にもならなかった。

そうして平安が訪れ、誰もが寝静まったあとの夜の小林家。

今、そこにひっそりと動く影があった。

暗闇の中、明かりもつけずに抜き足差し足、部屋を横切り、明日にでもフアフニールのところへ突っ返そうとテーブルの上に置いておいた『呪いアンソロ2』を手にとるのは、白い骨の指先。

アインズである。

彼はそのやたらとでかい肩幅を縮こめるようにして、その場でしゃがみ込み、ぺらぺらとそのページをめくった。

やがてその手が止まる。

開かれたそのページに書いてあるのは、今回の事件の発端である、対象を術者の思う姿を変えてしまう魔法、という呪いである。

しばし、そこに書かれている内容に目を通したアインズは、その眼窩の奥に灯る赤い輝きをきらめかせた。

アインズには一つ、悩みがあった。

それは彼がアンデッドの肉体になっっている事である。

たしかにアンデッドとして保有する様々な特性——特に睡眠や食事が不要な事や疲労とも無縁の身というのは実に便利であった。

だが、便利ではあるが、どうしてもまた味わいたいのだ。

適度な労働の後の心地よい疲労感を。

あの美食を口にしたときの舌先に踊る味覚を。

暖かなベッドでぐっすりと眠る快楽を。

その中でも一番は食である。

トールの作る、豪華ではないが暖かな家庭を思わせる家庭料理の数々。そしてそれを囲む小林やカンナ、イルルとの語らい。幼くして両親を亡くしたアインズにとって、それは見ているだけで心が温かくなるようなものであった。出来るならば、自分もその団欒だんらんの輪の中に入りたかった。一緒に食卓を囲み、なんでもない事を口にしては笑いさざめき、そして温かみを感じる料理に舌鼓をうちたかった。

そして食といえば、向こうの世界での料理もだ。

転移後のあの世界の料理もなかなかに興味を惹かれるものがあったのであるが、それよりなによりナザリックの料理である。

アインズはナザリックの者たちの視察として、地下墳墓内のあちこちを見て回ることがたびたびあった。

その際に最もアインズの心に残ったもの。

それは、従業員食堂で提供されていた食事であった。

シンプルながらも、素材の持ち味を存分に生かした料理。公害で満たされたリアル世界であれば、アインズは鈴木悟の属していた底辺から中間層どころではない、勝ち組と言われる富裕層、それも本当の上

流階級でしか味わったことのないような代物が、そこではごく普通の食事として調理され、饗されていたのだ。

ナザリツクに勤める多くの者がひしめき合う、そんな食堂に広がる香り。

その匂いが鼻孔をくすぐるだけで、獣の如き食欲をかきたてられ、喉の奥から唾液が泉のごとく湧き出てくるかのような、まさに夢の逸品。

だが――。

だが、そんな垂涎の光景が目の前にあるというのに、アインズはそれを口にすることは叶わなかった。

それはひとえに、アインズがアンデッドであるからに他ならない。

アンデッドは種族特性として飲食不要を持つ。

アンデッドの中でも、ヴァンパイアなど比較的人に近い種族であれば、それによる各種ボーナス効果を得ることはできなくても、食事自体は出来たりはする。

だが、アインズの種族は死の支配者^{オーバーロード}なのだ。

死の支配者^{エルダーリッチ}の最上位者であり、はつきり言ってその身を構成するのはただの骨だけである。

飲食をしようにも、かろうじて噛むこと程度は出来ても、せつかくの食事を味わうどころか、口に入れば顎の骨の間から食べ物がぼつたりと落ちてしまう、まさにもつたいないお化けに助走をつけて殴られそうな身体なのだ。

そのため、アインズは眼前にごちそうがあるというのに、その香りがかぐだけで一切口にはできないという、まるでいじめのような日々を送る羽目となっていた。

そこで『呪いアンソロ2』である。

この本に書かれている、肉体を別個の物に変えてしまうという呪いであれば、今の自分の、この死の支配者^{オーバーロード}の肉体を、一時的にでも変更出来るかもしれない。

生身の身体になれるかもしれない。

舌先で踊る味覚の楽しみを、またあの懐かしく優しい布団の感触を、この身で味わえるかもしれない。

そう思うと、いてもたってもいられなくなってしまったのだ。

なに、姿を変えるといつてもあくまで一時的なもの。十分に味わい、堪能したのならば、また元の姿に戻ればいい。それに別にその呪いとやらはやり方さえ憶えていれば、この『呪いアンソロ2』という本自体はなくても構わないようだ。ならば、いつの日かナザリックに帰ったときにも、この呪いを使つて姿を変えることは可能だろう。

だが、その為には先ず一度、実験してみることが大切だ。

下手に、ここに書かれてある魔法を行使してみても、それで思うような結果にならなかつた場合、少々というかかなり拙いことになる。

なにせ、向こうにはこれを書いた本人であるファフニールはいないのだ。

うっかり魔術の構成に失敗してしまって、おかしな結果となつてしまった時に、こちらの世界ならばすぐ彼に相談するという手も使える。だが、一度向こうに帰つてしまつてからでは、そう簡単にファフニールに連絡を取るといふことは出来まい。下手におかしな存在へと姿を変えてしまつた後で、元に戻ろうにもどうにもならないという事にもなりかねない。

そこでアインズは一度、現物が目の前にある状態で、呪いにより姿を変えてみる実験を行うことにした。さすがにちよつと気恥ずかしいので深夜、皆が寝静まるのを待つてから、こつそり変身をし、また元に戻るのを試してみることにしたのだ。

アインズは小林家の面々には、自分は異世界で王様をやっていると語っていた。そんな自分が、生身の感覚を味わいたい、美食を楽しみたいなどという理由で人間の姿になるといふのは、王としての威厳を傷つけかねない。

日がな一日テレビとゲームばかりのぐうたら生活をしていて何をいまさらという感はあるのだが、とにかく秘密裏に試してみるのがいだらうと考えたのである。

パサリと目的のページを開いた状態でテーブルの上に置く。

そこに書かれているのは術者が思い描いた姿に、術者本人の肉体を変化させるというもの。

他にもいろいろ便利そうなものは記載されていた——例えば、今回才川らが行ったような呪いの対象となる者を本人ではなく他人にむけるものなど——のにはあるが、そちらはいろいろと前準備や各種の道具が必要になるらしたため、今回の実験対象からは除外した。

アインズの一番の目的は、自分自身が一時的に生身の身体になること。それ以外については、わざわざ手間暇かけてやる必要もない。

その辺にあったスーパーパーのチラシの裏にきゅきゅつと青のサインペンで魔法陣を描き、いささか棒読み気味に呪文を唱える。

——なに、まったく魔法の知識のない才川らですら、一学級すべての人間に魔法をかけることが出来たのだ。ならば、もっと容易な本人に作用する魔法を自分が使えぬわけがない。

そうしてアインズの思惑通り、魔法は発動した。

表に書いてある赤字の安売り情報が透けて見える黄色いチラシの裏面、そこに描かれた魔法陣よりふわりと薄紫色の煙が立ち上り、あたかも意思でもあるかの如くにアインズの身体へと纏わりついてくる。やがてそれは見る見るうちに濃度を増し、アインズの白い骨の身体を、漆黒のグレート・モモンガローブを藤の花の色へと包み込んでいく。

——ふむ。あとはしばらくこの煙に全身をつつまれたままできて、そしてそれが掻き消えるまで、変化したい身体を思い浮かべていればいいんだつたな。

アインズは自分が変化するべき姿を思い浮かべた。

誰でもよかったのではあるが、アインズが選択したのは、彼が最も頭に思い浮かべやすい黒目黒髪の黄色人種、やや疲れた感のある男性。

かつての鈴木悟の姿であった。

人間、鈴木悟。

その姿で普通の人間として日々の生活に追われ、疲労と困窮の中で暮らしていたのは、何やらはるか昔の事に思える。それほどまでに死の支配者として、ナザリックの支配者アインズ・ウール・ゴウンとしての生活が長くなってしまっていた。

そう考えると、いつのまにやらこの死の支配者の肉体にも随分と愛着が湧いていた事に気がついた。

——そういえば色々なことがあったなあ……。

この姿でナザリック地下大墳墓内を歩き、冒険者モモンとして異世界を旅し、そして一国の王にまでなった。

まさにゲームの中のような、そんな刺激に満ち溢れた生活。

ナザリックの皆の期待に反しないよう必死で支配者然とした振る舞いを続け、無いはずの胃が痛む日々も思い返してみると悪くはなかった。

アインズの脳裏に自らの意思を持ち動きだしたナザリックのNPCたち、そしてあの世界に行つてから出会った者たちの姿が次々と浮かんでくる。

——思い返せば、あの世界との関わりはエンリとネムが最初だったんだよな。初めて会った時は、この格好にすごい怖がられたっけ。

そういえば、そろそろエンリとンファイレアも結婚してもいいころだよなあ。なんだかルプスレギナの報告だと、ンファイレアは奥手すぎてエンリはその好意を友人のものと勘違いしてるみたいだけど。あんまり進展しないんなら、ちよつと手を貸した方がいいかな。となると、そういうのは誰が適任かな？ アルベド、デミウルゴス……いや、止めておいた方がいいか。いきなり薬を盛るとか言いだしかねないな。それよりあの世界の住人に聞いてみる方がいいかもしれない。

恋愛相談できそうな奴……ザリユースとクルシュ？ いや、人間と

リザードマン
蜥蜴人は違うよな。男ならば強いところを見せろとか言いだすかも。でも、ンファイレアは第二位階魔法が使えるんだっけ。それなら強さ的にも……あ、でもエンリってゴブリンたちに腕相撲で勝ったって言ってたな。魔法が使えても、やっぱり男が腕力で負けてるってのはなあ……。うーん、やっぱりモモンとしてアインザックやラケシルあたりに、知り合いの恋愛についてなんだがと相談してみるのが無難か。

——ん？ そうだ。エンリとンファイレアが結婚したとすると、ネムはどうするんだ？ まさか新婚家庭で一緒に暮らすわけにもいくまい。特に別の部屋とは言え、夜に一つ屋根の下というのは拙い気がする。いや、田舎の農家だから、そういうのもありなのか？

うーん、そっちも何か考えた方がいいか。

いつそのこと、今度、エ・ランテルに作る学校に行かせるか。寄宿舎でも作って、そちらに住まわせるとか。

——そうだな、それと子供といえばハムスケはどうするかな？ つがいを見つけて子孫を残したいと言っていたが、同種の奴とか見つかってないしなあ。こつちの世界から普通のハムスターを連れて行って巨大化させるとか出来ればいいんだけど。もしくは逆に、一時的にでもこつちに連れてくるとか？ あの凶体のままでは目立つだろうから、ハムスケの方を小さくするとかして。……ハムスケを見たら、カンナやイルルは喜びそうだなあ。さすがにあれを見て深みのある英知を感じさせるとか、力のある瞳とかは言わずに、可愛い可愛いつて喜んでくれそうだな。

ポカポカとした陽気に包まれた、よく晴れた日の河川敷。そよぐ風が足首ほどにのびた草をなびかせ、草いきれと共に頬を撫でる。そんな穏やかな空気の中、象にも匹敵するかのようなハムスケの背にまたがり、はしゃいで歓声をあげる子供たち。

そんな情景を思い浮かべ、アインズの心がほっこりとする。

今思えば、わりと殺伐としていたあの世界において、森の賢王とかいう御大層な名前のお馬鹿で「殿々、殿々」と呼んでなついていたハムスケは、アインズにとってあまり肩ひじを張る必要もない気の

許せる相手だった。アインズに対して強者としての敬意を払ってはいるものの、ナザリツクの者たちのようにアインズの発言、判断は絶対という明らかにいき過ぎなほどではないハムスケとのやり取りは心が楽だった。ある意味、癒しキャラであった。

——そのうち、帰ったらもう少し優しくしてやるかな。

……いや、今でも十分すぎるな。むしろ甘やかし過ぎだろう。魔導国を作って、モモンとして出かけることが少なくなってから、あいつは食っちや寝食っちや寝ばかりだからな。

むしろ最近太ったか？　ぶくぶくに太って走り回れなくなったら困るな。ダイエットでもさせたほうがいいか。ふむ……あいつが入るサイズの回し車でも作るかな……。

取り留めもなく、昔の思い出から派生したあちこちに思考を飛ばし、物思いにふけていたアインズ。

そのため、わずかな間ながら、今自分が何をしていたかを失念してしまっていた。

自分に纏わりついていた煙、それが不意に大きく波打ち、そして掻き消す様に薄くなっていた事に気づくのが遅れてしまった。

——……あ!?

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「な、何が起きたー!」

突然、隣の部屋から聞こえてきた物をひっくり返すような音に、目が覚めた小林はベッドから跳び起きた。

慌てて枕元に置いていた眼鏡をかけつつ、寝室から飛び出ると、隣の部屋からツールからも顔を出す。

寝起きの彼女らの目の前にあったもの。

それは弾き飛ばされ、部屋の隅に転がる椅子やテーブル、調度品の

数々。

そして、リビングの中央にどつかと鎮座する小山のように巨大なジャンガリアンハムスターの姿であった。

「……………ええつと……………アインズさん？」

夜間はずつとリビングにいるはずの同居人の姿が見えない事から、小林はその巨大ハムスターに声をかけてみる。

「え……………ええつと、いやその……………私、いや、それがしはア、アイスケでござるよ……………」

そう言って彼女らの視線から、アイスケ（自称）はその巨大にしてつぶらな瞳を逸らした。